

357-301



1200501411161

357
301

30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4

始



劇悲の加利米亞

著一サイラドオテ
訳純中田



版社論公衆大

張

序

「アメリカにも文學がある！」

僕がさう思つたのは、僕が初めてこの本を讀んだ時である。尤、該博な讀書人でない僕がかう言つたからと言つて、アメリカに、この作以外に大文學がないと言ふ意味にはならない。あるひは、もつと偉大な文學があるのかも知れない。ないのかも知れない。だが、何れにしても、この一作が、アメリカ人の文學的才能を少しばかり見くびつてゐた僕に——アメリカ風に言ふならば——ラスト・インニングに出たホームランを見せられたほどの印象を與へたことは事實である。全くこの作には、シングルヒットのスマートさや、二壘打の鋭さに於て、幾らか缺けるところがあるかも知れないが、確に穹蒼を二分する一大本壘打ではあり得る。その筆力は豪宕だ。その効果は一掃的だ。

シヤアウツド・アンドスンが、そのドライサーの頤に言ふやうに、テオドル・ドライサーはすでに年とつて居る。彼は今、アメリカ文壇の長老であり、權威である。だが、一九〇〇年、その

第一長篇作シスター・キャリイを發表し、一九一五年「天才」を發表した頃の彼は、單にアメリカ清教徒への露骨な反逆者として、因襲的批評家の包圍攻撃を受けたことによつて、僅にその文名をアメリカ國內に流布されたに過ぎなかつた。彼の名が眞にアメリカ的となり、一二年後には全歐洲大陸の讃仰をさへ受けて、それによる印稅收入四十萬圓、彼をしてアメリカ文壇の王位に就かしたものは、實に「アメリカの悲劇」一作の出現によるものであつた。

この一作をもつるために、彼は十年間の沈黙を守つたと言はれる。而も一度この作が世に現はれると、アメリカ全土を二分して、大統領選舉戦以上の騒ぎを、あらゆる客間、あらゆる書齋にもたらしたと言はれる。而も、敵も味方も共に、この作にアメリカ文學最高の榮譽を贈ること躊躇しなかつたと言はれる。

何がかうした大成功を、この作にもたらしたか？ それは、讀者諸君が、この作を讀んで自ら解決される問題である。

だが、この作の階級性に就て、一言語つて置きたいことは、この作が所謂プロレタリア文學であるかないかに就て、現に、世界ぢうの批評家の間に、烈しい論争が戦はれて居ると言ふことで

ある。例へばあのアプトン・シンクレアの如きは、この作を以て一種の日曜學校用教材にしか過ぎないと貶し去つて居るが、しかしカルヴァートの如きは、明かにこの作に、階級文學有功賞の一つを贈つて居る。

事實、この作には、階級文學らしいところもあるが、また、さうでないらしく見えるところもある。たゞ、最も確なことの一つは、この作者の目が、絶えず、階級と階級との間の、經濟的、心理的、情緒的背反に注がれて、アメリカの持つもろくの悲劇の理由を、そこに置いて居ると言ふ點である。だが、それでて、日本のプロレタリア文學者諸君には不平であらうが、この作には、たゞ一人の意識的プロレタリアートも出て來ない。労働組合の組織すら、この小説の社會には現はれて來ない。

この小説が書かれたのは一九二五年であるから、今から五年前である。五年前のアメリカを知つて居る作者が、この種の題材を扱ひ、これほど周到にアメリカ社會の機構や現象や動向をほじくり廻してゐながら、彼の知らない筈のないアメリカの社會運動に、一行の筆をさへ觸れさせなかつたのは何故か？

それらの運動に餘りに深い同情を持つが故に、それに觸れることを特に避けたのであらうか？
それとも、それらに何の興味も持たないが故に、彼の周到を以てしても、なほ見落さねばならなかつたのだらうか？

これも亦、讀者の讀後の判斷を待たねばならない題目である。

たゞ、こゝに、作者ドライサーの面影を、吾々に髣髴させる一挿話が、前述のアンダスンの「頌語」の中にある。

「ずつと以前、彼が雑誌『デイリニエタ』の編輯をしてゐた頃、ドライサーは一日、ある女の友達と一緒に、或る孤兒院を參觀した。その女の人が、或る時、その午後のことを話して呉れた。大きな不恰好な灰色の建物の中で、鈍重で、老けて見えるドライサーは、小高い壇上に席を占めて、ハンケチを折つたり疊んだりしながら、小さな揃ひの服を着た子供たちが並んで來るのを眺めてゐた。涙があの方の兩方の頬を流れ落ちました。そしてあの方は、頭を振つていらつしやいました」とその女の人が言つた。これがテオドル・ドライサーのまことの姿である。彼の魂は年とつて居るので、彼は人生をどうしてよいのか解らないから、自分の見る通りの人生を語るの

ある。單純に正直に。涙が彼の双頬を流れ落ち、彼はハンケチを折つたり疊んだりして、頭を振るのである。」(高垣松雄氏「アメリカ文學」より)

恐らく、これが、ドライサーの正體であらう。彼はリアリストなのだ。だが、孤兒の姿を見ては、泣かないでゐられないリアリストなのだ。深くバルザックの影響を受けたと言はれる彼は、ロマンチック・リアリストである點に於ても、その師に追従したと言つて好いであらう。

アンダスンが言ふやうに、ドライサーの歩みは重い。全く、バルザックのそのやうに重い。だが、僕たちには、今日のアメリカを描いて呉れる限り、軽い表面的なスナツプショットよりも、重い意地悪いバルザック的透視術の方が望ましい。それでなければ、謎のやうな今日のアメリカの、骨の髄に達することは出来ないからである。而も、かうして暴露されたアメリカ社會の骨の髄は、やがてまた吾々の社會の骨の髄でなければならぬ。何故ならば、今やアメリカが、世界を支配しつゝあるといはれるからである。事實、現に、あらゆるアメリカ的なものが、日本の社會にまで、浸潤しつゝあるではないか。

僕は、この書を翻譯するに當つて、必ずしも常に「語學的」忠實を心がけてはゐなかつた。今

さら語學の試験を受ける氣にもなれなかつたし、横文字の讀めない人には解らないやうな日本文を綴つて見る氣にもなれなかつたし、更に『餘りに重い』ドライサーの歩みに、一歩々々隨いて行かねばならない讀者の退屈を救はうとしたからである。だが、『文學的』に、僕は充分原作に忠實だつたつもりである。そのために、原作の重厚さへ、少しも犠牲にされてゐないつもりである。

一九三〇年八月

田中純

アメリカの悲劇

第一部



たそがれに或る夏の夜。
人口四十萬の或るアメリカ都市。その商業區の高い石造家屋——やがては、一つの昔語りとして残るかも知れない家々である。

今、僅に鎮まつたその大通りに、六人の小さい一團が動いて行く。——一人は、背の低い、がつちりとした五十男。黒い圓いフェルト帽の下から、蓬髪がはみ出して居る。擔いで居る洋風琴は、例の大道演説家や歌うたひの常用品である。その傍に、五つくらゐ年若らしい女が、片手で七つばかりの男の子の手を引き、片手で五六冊の讚美歌集を持って、歩いて行く。瘠せぎすで、男よりも背が高い

が、がつちりと精力的な骨ぐみ。顔も着物も、ひどくさつぱりして居る。この三人の後に、十五の娘と、十二の少年と、九つの女の子とが、や、離れてついで行く。三人とも、ひどく退屈さうな足どりである。

随分暑い日だが、あたりにはすでに快い懶さが流れて居る。

彼等はやがて四つ角に出る。さまざまの自動車、車馬が、すばらしい速さで、織るやうに流れて居る。が、この小さい一團は、平気でそれを突つ切つて行く。

二つ目の四つ辻に出る。——が、事實は、高い建物に挟まれた小さい空地だ。と、男が、洋風琴をおろす。女がすぐその蓋を明けて、大きな讚美歌集を、譜面臺に置く。手にした聖書を男に渡して、男女二人が並んで立つと、十二歳の少年が携便椅子をオルガンの前に立てる。と、その男が——恐らくは父親だらう——勿體らしい様子であたりを見廻してから、聴衆の有無を眼中に置かない様子で、口を開く。

「先づ最初に、讚美の歌をうたひませう。主をお認めの皆さんは、御一緒にお歌ひ下さい。では、エスタ、頼んだよ」

そこで、これ迄無關心を装つてゐた姉嬢が、まだ發育し切らない痺弱さうなからだを椅子に運んで

讚美歌集をめくり始めると、母親が言ふ。

「今晚は第二十七番が好いと思ひます。——イエスの愛の聖き香油に……」

丁度その時、それらの家庭への歸路にあるさまざまの階級の人たちは、この小さい一團を認めて珍しげに足をゆるめたり、立ちどまつたりする。と、その男は、對手が自分の話を聞かうとして居るのだと解釋して、すぐに話し始めた。

「では、第二十七番を歌ひませう。——イエスの愛の聖き香油に……」

そこで、娘がすぐ、弱いがはつきりした調子でオルガンを弾きながら、母親に合わせて高いソプラノを歌ひ出す。父親の怪しげなバリトンも加はる。ほかの子供たちも、オルガンの上の讚美歌集を取り上げて、細い聲を合せる。と、無頓着な路傍の聴衆たちは、この世の不信と擾亂とに公然と抗辯して居るこの見すほらしい一家族の珍な合唱に氣を取られて、目を見張つて眺めて居る。或る者はオルガンに坐つて居る娘の従順らしい場違ひな姿に、或る者はまた、何をやらせても失敗のほかに途がないやうな父親の、非實際的なおづくした青い目、ほろ服を着たぶよぶよのからだに、興味を持つたり同情したりして眺めて居る。たゞ、母親だけは、盲目的で世間知らずで、人生の成功者ではあり得ないにしても、まだ何處か氣の強さうな、獨立心のありさうな様子をして居る。無知ではあるが、信念が

あるらしい。讚美歌集から目を放して、まつすぐに空を見入つて居る彼女の様子を見るならば、諸君は必ずかう言ふに違ひない。

「さうだ。この女こそ、どんな缺點があらうとも、自分の信することだけはやり遂げやうとするであらう」と。實際、彼女のすべての動作の中に、その公言する神の智慧と恵みに對する戰闘的な信仰が見えて居るのである。

「イエスの愛こそわれを救ひ、神の愛こそわれを導く」
建物のそり立つ壁の中で、彼女の鼻にかゝつた歌聲は響き渡つた。

少年は、絶えず目を伏せ、殆んど半分しか歌はないで、もじく／＼と動き廻つて居る。背は高いが、まだ華奢な姿で、黒髪、白面の面白い顔をして居る。誰よりも利口さうで、感じも鋭いらしく、かうした自分の地位を憤りもし、苦しんでもゐるらしい。非宗教的である彼は、無意識の中に、この世への興味を持つて居るのだ。彼はまだ若い。この世の美と喜びとは、その心に響き渡る。それは、両親の心に集つて居る茫漠とした望みとは殆んど無關係なのだ。

事實、この少年を圍繞する家庭生活や、物質的、心理的に觸れて來るさまざまなもの、その両親が信じたり語つたりするもの、實在や力を信じさせるに足りないものであつた。むしろ、さうしたもの

のために、彼等の生活は、少くとも物質的には、多少とも亂されて居るやうに見えた。彼の父親は、さまざまな場所で、殊に此處から餘り遠くない彼等の「傳道館」で、毎日のやうに聖書を讀んだり、説教をしたりする。また、此處かしこの慈善好きの實業家から、寄附金を集めて來る。而も、この家族は、何時でも苦しいのだ。碌な着物は着られないし、世間並な娯樂や樂みも取れないのだ。でも、彼の両親は、神の愛や恩寵や加護を、絶えず公言して居るのだ。そこには、何かの間違ひがあるのに違ひない。無論、彼にははつきりとは解らなかつたが、しかし、その母親の熱心さややさしさには尊敬を拂はないでゐられなかつた。傳道をしたり、家事を切り盛りしたり、随分急がしいにもかゝらず、食べ物や着物のことで困ると、「なに、神様が恵んで下さるよ」とか、「神様のお指圖があるよ」とか言ひながら、何時でも相當に嬉しげに、少くとも、それに堪へてゐた。しかし、それにも拘らず、彼等がどんなに困らうとも、神様は一向何の指圖もして呉れないのを、ほかの子供たちも彼も、よく知つてゐた。

今夜も、兄弟たちと一緒に往來を歩きながら、彼は、こんなことをしないで好いのだつたらなアと考へてゐた。少くとも、自分一人は、こんなことをしないで好いやうな氣がした。よその子供たちは、決してこんなことをしないではないか。こんなことは見すほらしいことだ。恥かしいことだ。以

前、彼がまだ街路に連れ出されぬ頃には、父親がこんなことをして居るために、彼は何度、ほかの子供たちに嘲弄されたか知れなかつた。彼がまだ七歳の少年であつた頃には、父親が口癖のやうに「主を讃美せよ」と言ふところから、近所の子供たちに「おい、主を讃美せよが来たよ」と、絶えず言はれたものであつたし、或る時にはまた「やい、お前の姉さんはオルガン弾きぢやないか。そのほかには何も出来ねえんだらう？」などと言はれたものである。

「何だつてお父さんは主を讃美せよなんて言ふのだらう？　よその人はちつともそんなこと言はないのに」

たゞ世間なみでありたいと言ふのが、彼等の、彼の、長い間の望みなのだ。而も、宗教に凝り固まつて、遂にそれを商賣にした両親は、ちつとも世間なみであつて呉れないのである。

今夜、この自動車と群集と建物との大通りに立つてゐる時も、彼はたゞ、人目にさらされ、からかはれて居るのが恥かしかつた。そこには、美しい自動車が走り過ぎたり、楽しさうに歩いて行く群集がある。若い樂しげな男女が、笑つたりふざけたりして過ぎて行く「餓鬼ども」は立つて、眺めて居る。それらのすべてが、彼等とは別世界の美しい幸福なものに見えるのである。

而も、かうした雑沓の中に立つて居る彼等は、通りがかりの人たちにも、或る疑問を懐かせないで

は置かない。彼等は肘を突つき合ひ、眉をひそめて、顔を見合わせる。さう言ふ人たちは、こんな子供を連れて来て、何の役に立つのだらうと思つてゐるのである。

「この連中は、毎夜のやうに此處に立つてゐるんだよ。——一週間に二三度は缺かさないが、屹度、何かの宗旨を廣めてゐるんだね」

一人の若い商店員は、今會つたばかりの娘と一緒に料理屋の方へ歩きながら言ふ。

「あんな男の子を、何だつてこんなところへ連れて來るんでせうね。きまり悪さうにしてるぢやないですか。あんな子供を、無理に連れて來なくてもよさうなものがね。まだ何にも解つてゐないのぢやないですか」

かうした商業區を食つて居るぶら／＼者の四十男が、そばの愛嬌者らしい男に話しかける。

「全くですね」と、その男もうなづいて、少年の顔をしげ／＼と眺める。全く、この顔に浮んで居る不安や自意識の表情を看取したものは、誰でも、まだどちらともきまらないこの少年の宗教的氣質に對して、心理的な仕事を強ひることの不親切さや怠惰さを感じないではゐられない筈である。

而も、事實、さうなのであつた。

ほかの子供たちに就て言へば、一番末の娘や男の子は、まだ何も解つてゐないのだから、問題外で

ある。オルガンに坐つて居る長女は、自分の姿や聲がみんなに與へる印象を樂しんでるほどで、別に深く氣にしてはるない。實際、彼女の聲には訴へるやうなところがあるなぞと、両親ばかりでなく、他人までが言ふのを、彼女は一二度聞いたことがある。しかし、實際には、彼女の聲は決して好いのではない。誰にも、音楽が解らないのである。肉體的に言つても、彼女は青白い、弱々しい娘で、本當の精神的な力や奥ゆかしさを持つて居るわけではない。かうして人前に立つて、多少の注意を集めることの方が、むしろ彼女には過ぎた仕事に思へるくらゐのものである。彼等の両親に至つては、ただこの世を精神化することよりほかに何も望んではないのであつて、讚美歌を歌ひ終ると、父親はすぐに使ひふるしの言葉を連發して、救ひの喜びや、神の恵みや、キリストの愛や、罪人に對する神の思し召しや、罪の苦しみやを語り出すのである。

「神の光りに照され、ば、すべての人は罪人であります」と、彼は宣言する。「悔い改めてキリストを受け入れ、その愛と赦しを受けない限り、誰も精神的完成と清潔との幸福を受けることは出来ません。おう、みなさん！ みなさんがもしキリストを知り、キリストがみなさんのために生れ且つ死んで呉れたことを知り、更にキリストが、日となく夜となく諸君と共に歩いて、世の惱みに耐へる力を與へて下さるとを知られるならば、みなさんの平和と満足は如何ばかりでありませう。この世の

誘惑と陥穽とは、吾々すべてを破滅に導きます。而も、キリストの慰めは常に吾々と共にあつて、吾々を導き、助け、慰めて、その傷を包んで癒して呉れます。その平和と満足と樂しみと輝かしさは如何ばかりでありませう！」

「アーメン」と、その妻が叫ぶ。と、娘のエスタも、人前では何か手助けをしなければならぬことを感じて、同じやうに叫ぶ。

長男のクライドと二人の弟妹たちは、たゞづつと下の方を見つめて居る。時々、目を擧げて父親を眺めるが、どうも得心は行かないのである。なるほど、父の言ふことは皆本當で大切なことであるかも知れないが、しかも、まだ世の中の他のものゝやうに有難いものとは思へないのである。彼等は何度も同じことを聞いて居るのだが、その若い切ない心には、この世の中は、かうした大道演説や、傳道館の説教以上のものに見えて仕方がないのである。

やがて、二つ目の讚美歌が歌はれると、今度はグリフィス夫人が説教をする。その説教の中で、彼等の傳道館のことや、禮拜の案内をする。また、三度目の讚美歌を歌ひ終ると、救ひの道を書いた小冊子をみんなに配る。これが父親アサ氏の贈り物なのである。やがて、オルガンが仕舞はれると、携帶椅子がクライドに渡される。グリフィス夫人が聖書や讚美歌集を掻き集める。と、グリフィス氏が

再びオルガンを背負つて、この傳道隊は行進に移る。

かうした間ちう、クライドが絶えず心の中で叫んで居ることは、こんなことはもう止したいと言ふ一念であつた。こんなことをして居れば、みんなが馬鹿に見え、狂人に見えるに違ひない。「安ッほい」——もし彼に、その満腔の憤懣をもらす自由があるならば、彼の言ひたい言葉はこれだつた。彼は心から、この仕事を呪つた。而も、彼にこんなことをさせるのが、彼等に取つて、何の利益があるだらう？ 彼の一生は、こんなものであつてはならない筈である。ほかの少年たちは、こんなことをしてはゐるのではないか？ 考へれば考へるほど、彼のかうした生活への反抗心は深まつて行つた。姉は好きなのだから、このまゝで續けるのも好いだらう。弟や妹は、まだ小さ過ぎて解らない。しかし、自分は——

「今夜の聴衆は、何時もより多少熱心に聞いてたやうだつたね」歩き續けながら、グリフィスはその妻に言つた。夏の夜の快い空気が、彼を何となく嬉しくさせたものらしい。

「さう。こなひだの木曜日には十八人だつたのが、今夜は二十七人も小冊子を持つて行きましたからね」

「キリストの愛は最後の勝利だよ」父親は自分をも妻をも勵ますやうに言つた。「今はみんなこの世の樂しみや思ひ煩ひに捕はれて居るが、やがて何か悲しみにぶつかると、かうした種が芽を出して來るんだよ」

「全くですわ。さう信すればこそ、私もかうして立つて居るのですわ。罪の重荷と悲しみが、やがてさう言ふ人たちに、自分たちの過ちを知らせることになるのですもの」

やがて彼等は、細い横丁に入つて行つたが、十軒ばかりも通り過ぎてから、一軒の黄色い木造の平家建ての中に入つて行つた。その家には、大きな窓があり、中央の灰色の戸をはさんで、二つの硝子戸があつた。その窓と、小さい二重戸の硝子板とにかけて、「希望の入口。ベセル獨立傳道館 集會日、水曜、土曜、夜八時ヨリ十時迄。日曜日、十一時、三時、八時。來聽自由」とペンキで書いてあつた。そして、その下に「神は愛なり」とあつて、更に小さく「待ち詫ぶる母を知らずや」と書いてあつた。

小さい一團は、この不愉快な黄色い戸口に入つて行つて、やがて、見えなくなつてしまつた。

二

以上、ざつと描いて來たゞけで、すでにこの家族が、多少特殊な歴史を持つて居ることが想像され

るであらうが、事實もまたさうであつた。全く、この家族は、心理的にも社會的にも、或る獨特のもの、一つであつた。これを説明するには、たゞに心理學者の熟練を待つばかりでなく、化學者や物理學者の努力をも待たねばならないほどのものである。先づ、父親のアサ・グリフィスから始めると、彼の人となりは極めて不圓滿であつて、宗教的な境遇から生れて來ては居るが、思考力を殆んど持たない。而も、感じ易く、従つて非常に感情的で、實際的な能力を全然缺いて居る。彼に取つて人生とはどんなものか、彼の感情はどんな色合ひのものか、それをはつきりさせることは困難である。而も他方、彼の妻君は、すでに書いたやうに、彼に比べて多少確り者ではあるが、しかし實際的な洞察力が缺乏してゐる點では、彼と殆んど違はない。

しかし、吾々に特に興味があるのは、この夫婦の經歷そのものよりも、むしろ、それが十二歳の少年クライド・グリフィスに與へた影響である。この少年の感情的であることや、珍しいものへの憧憬的な氣持は、その母親よりもむしろ父親から受け繼いだものに違ひないが、更に彼は、非常に理知的な空想力を持つてゐて、機會さへあれば、自分を出世させやうと考へて居る。彼は、好いと思へば何處へでも行くし、何でも見るし、どんな變つた生活でもする。クライドが十五歳になる迄、彼を苦しめた唯一のものは、その兩親の職業が、他人の目から見ても下等であると言ふことであつた。實際彼

は、その親たちに従つて、いろ／＼な町に——例へばグラランド・ラビッツや、デトロイトや、ミルウオウキイや、シカゴや、最後にはカンサス市や——いろ／＼の町に行つたが、何處へ行つても、人々は、少くとも彼に出會ふ少年少女は、かうした兩親の子供であるが故に、彼を輕蔑するのだつた。彼はそのために、何度、兩親の氣持にそむいて、他所の子供と喧嘩をしたか知れない。しかし、負けても勝つても、彼の意識しなければならなかつた事實は、彼の兩親の仕事が、他人に取つては不満足なもの——下等な見すほらしいものだと言ふことだつた。彼は何時でも、自分がそれから逃れられる日が來たら何をしやうかと考へてゐた。

クライドの親たちは、その子供の將來に就ては、全く非實際的な人たちだつた。彼等は、その子供一人々々に、何かの職業的訓練を與へることに就ては、それが大切だとも、必要だとも、全然思つてゐないのである。のみならず、傳道に専念して居る彼等は、子供たちを何處かの小學校へ留めて置くことも考へない。子供たちの學校さかりに、彼等は轉々として、あちこちの町に移り住むのである。その傳道の成績が思はしくなく、内職の庭作りや、發明品の勸誘もうまく行かないとなると、彼等はもう食へることも出來なくなるのであるから、子供を小學校へやるなどと言ふことは勿論出來ない。而も、彼等は、子供たちには無頓着に、何時でも樂天的なのだ。少くとも、神の加護を信じて居ると

主張するのである。

家庭兼傳道館と言ふ彼等の住居も、いろ／＼な點で、子供たちを寂しくさせずに置かなかつた。それはがらんとした細長い床敷で、色彩もなければ、飾りつけもない。商業區のことだから、素より、周圍も、雜然として居る。

この建物の前の部分が、四十尺と二十五尺の長方形に仕切つてあつて、その中に六十脚ばかりのたがたの木椅子や、講壇や、聖地の地圖が置いてあり、周圍の壁飾りとしては、凡そ次のやうな標語が二十五六ヶ條も、額ぶちにも入れないで、ぶらさけられて居る。

「酒は人を愚にす。強き酒は狂暴を呼ぶ。これに欺かるゝ者は賢者ならず」

「干と大盾とを執りて、わが援に立出でたまへ」詩篇三十五篇二

「汝等はわが羊、わが牧場の群なり。汝等は人なり。我は汝らの神なり。と主エホバ言ひたまふ」エ

ゼキエル書三十五章三十一

「神よ、汝はわが愚なるを知りたまふ。我がもろ／＼の罪は汝に隠れざるなり」詩篇六十九篇五

「もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に此處より彼處に移れと言ふとも移らん。かくて汝ら能は

ぬことなかるべし」マタイ傳十七章二十

「主の日は近し」オバデア書十五

「それ悪者には後の善養なし」箴言二十五章二十

「酒は赤く、盃の中に泡立ち、骨にくだる。汝これを見るなかれ。これは遂に蛇の如く噬み、蠍の如

く刺すべし」箴言二十三章三十一、三十二

かうした教訓が、鐵屑の壁にちりばめた金銀の板のやうに、嚴として張り出されてある。

この集會所の後の四十尺ばかりの板の間が、いろ／＼に區切られて、彼等の住居にあてゝある。三つの小さい寢室と居間。そこから、裏庭だの木柵だが見える。それから、十尺四方の臺所兼食堂。小冊子や、讚美歌集や、聖書や、がらくた箱や、トランクや、あらゆるものが打ち込んである物置き。この部屋は、集會所のすぐ後にあるから、集會の前後とか、特に重大な相談がある時とかに、グリフイス夫婦が退いて、瞑想したり、祈つたり、話したりすることになつて居る。

身の上相談だの無心だのに驅け込んで来る人があると、父たちはよくこの部屋で話し合つてゐた。クライドたちは、それを何度見たか知れない。時にはまた兩親たちが、ひどい經濟上の困難に陥つて

相談したり無駄に祈つたりして居るのも、この部屋であつた。

而も、これらを取りかこむあらゆるものゝ退屈さと零落とを見て、彼は、その中に生きることの堪へ難さを感じるのだ。

エルギラ・グリフィス夫人は、アサと結婚する迄は、宗教的には何の教養も受けてゐない、無知な百姓の娘であつた。しかし、一度彼と戀に陥つてからは、彼女はすぐ彼の傳道熱に感染されて、彼の冒険と狂想とに、喜んで随うて行くことになつたのである。殊に、彼女に説教が出来、讚美歌が歌へて、所謂「神の言葉」によつて人々を説教することが出来ると知つて、彼女は更に喜んで、この道を進むことにしたのであつた。

傳道館には、時々、小人数の人が集ることがあつた。大道から随うて来る者もあつたし、大道で此處のことを聞いて、あとから来る者もあつた。が、それらはみんな、頭の變なやくざ者であつた。クライドは、自分で獨立して働き出すまで、何時でもかうした集會に出ることを強制された。而もかうした男女——殊に、ほかに行きどころのないやうな失業労働者や、浮浪人や、酔つ拂ひや、やくざ者の男たちからは、好い感化などは受けなくて、何時でもたゞいら／＼させられるのが常だつた。而も、かう言ふ連中が、何時でも、神様は、キリストは、聖靈は、自分をこれ／＼の窮境から救つて呉

れたと證言する。——と言つて、彼等は決して、誰一人救つてやらうとはしないのである。而も、彼の両親は、それを聞くと何時でも「アーメン」だとか「神の榮光」だとかと叫んで、幾つかの讚美歌を歌つたあとで金を集めるのだ。無論、この献金で傳道館の費用を辨じて行くわけだが、クライドの計算では、そんな金は、三四度の野外傳道にも足りないのである。

両親のことで、クライドが面白いと思つて居る一つのこととは、東の方の或るところに——ユティカの近所のライカアガスとか言ふ小さい町に、父親の兄弟に當る一人の伯父が居ると言ふことである。この伯父は——サミュエル・グリフィスと言ふ名だが——彼等と違つて金持ちである。親たちの口ぶりから察すると、この伯父には、一人の世話をするくらゐは何でもなく出来るらしい。抜け目のない實業家で、ライカアガスには大きな邸宅や、カラやシャツの工場があつて、三百人以上の人を使つて居る。クライドと同じ年くらゐの息子と、確か二人の娘があつて、みんなライカアガスで贅澤に暮して居る。さう言ふ噂が、東の方から来る誰彼から、彼の耳に入つて来るのである。クライドは、自分たちの食ふや食はずの生活に比べて、この東方の伯父の贅澤さを想像する度に、何となく昔のリディヤ王を思ひ出さないのである。

しかし、クライドはすでに早くから、自分のことは自分でするよりほかに仕方がないことを知り始

めてゐた。十五になつたクライドは、自分や弟妹たちの教育が、まるで出来てゐないことを知り始めてゐた。彼等より裕福な家の子供たちが、それ／＼特殊な仕事に訓練されて居るのを見た時、彼はそれを追ひ越すことの容易でないことを思つた。一體、何處から手をつけたら好いのか？ 彼はすでに十三四歳の頃から、餘りに世俗的だと言つて家に入れられない新聞紙を読んでゐたが、それによつて彼の知つたことは、世に出るには充分な熟練が要ること、つまり、まだ何の興味もない子供のうちから、商賣を習ふことが必要だと言ふことであつた。彼は、アメリカ青年の標準から言つても、一般アメリカ人の人生に對する態度から言つても、自分を、純然たる筋肉労働者以上の人間だと感じたからである。事實、澤山の少年が店員であつたり、藥屋の小僧であつたり、書店の店番であつたり、銀行に勤めたり、地所の管理人であつたりする世の中に、彼等に劣らない彼だけが、器械を動かしたり、煉瓦を積んだり、大工職を見習つたり、左官になつたり、鉛管を埋めたりしなければならぬ理由が何處にあるだらう。一年中ほろ服を着たまゝで、朝は早くから起きて、かうした平凡な仕事をして居るなんてことは、下等であると共にまた悲愴ではないか？

クライドは、貧乏ではあつたが、また、見榮坊で、傲慢であつた。彼は、自分を、彼の家族とは別なものだと思つて居る。自分を生んで呉れたものに對して責任のない人間だと思つて居る。そればかり

りではない、彼には自分の両親を研究する傾きさへある。皮肉や悪意はないのだが、しかし、可なりはつきりと、彼等の性質や能力を知つて居る。しかし、これほど批評的でありながら、彼は決して——少くとも十六歳になるまでは——何の策略をも考へないで、たゞ、中途半端に、ぶら／＼と過して來たのである。

が、その頃になつて、性的誘惑や性的要求が、彼にも漸く現はれて來た。彼は、異性の美しさやその引力に烈しい興味を持つと共に、少からず惱まされるやうになつた。従つてまた、自分の着物だの容貌だのが、ひどく氣にかゝり出して來た。自分はどんな風に見えるだらう。ほかの少年はどんな風に見えるだらう——などと考へ出す。今や、彼には、着物のちやんとしてゐないことが苦しくなつて來た。自分の容貌が、望み通り立派でないことも苦しかった。貧乏人に生れて來て、而も誰も構つて呉れ手がなく、自分でもどうすることも出来ないなんて、何て厭なことだらう！

彼は、たまに鏡を見つけると、しゆく／＼と自分の顔を眺める。まつすぐな高い鼻、白い高い額、浪のやうに房々とした黒い髪、時にはむしろ憂鬱に見える黒い眼——そんなにひどい顔ではないなと思ふ。だが、彼の家族の不幸さを考へ、かつて本當の友達と言ふものゝなかつたことを考へ——事實、この両親の職業では、そんな友達などは出来ないのである——そんなことを考へると、彼は次第に憂

鬱と絶望に陥つて行く。そのために彼は、時には反抗的になり、時にはまた無感覺になつたりする。實際、彼の顔は、多くの青年の顔よりも親しみ易いし、引きつけるところを持つて居る。だから時には、行きすりの娘たちから、流し目を送られる。それは、相手の意中を計るやうな、疑ひながら招いて居る目色なのだが、自分の両親のことを考へる彼は、何時でもそれを誤解するのである。

而も、それでゐて、一文なしの彼が何時でも考へることは、もつと立派なカラア、もつと立派なシヤツ、もつと立派な靴、もつと好い洋服、最新流行の外套！ おう、美しい着物よ！ 立派な家よ！ 時計よ！ ビンよ！ 彼の年頃の少年は、みんなそれを持つて居るではないか！ 現に或る親たちは彼と同年輩の子供に、自分用の自動車を與へるではないか。このカンサス市の大通りには、さうした自動車が、蝶のやうに飛び廻つて居る。美しい娘たちも同乗して居る。而も彼には何も無い。絶対に彼には、あり得ないのだ。

而も、世間には、なすべき仕事に充ちて居る。無数の人々が、こんなに幸福に、成功して居る。彼は何をなすべきだらうか？ どんな道に進んだら好いのか？ 何を取り上げて勉強したら、何處かへ行き着けるのだらうか？ 彼には何も言へない。はつきりしたことが解らないのだ。而も、この奇體な両親は、彼を教へる術さへ知らないのである。

三

丁度、クライドが、自分の身の振り方をつけやうとして、いろいろと考へて居る時であつた。グリフイス一家の絶望は素よりであるが、クライド自身も亦暗澹たる氣持にさせられた一事件は、彼が少からず興味を持つてゐた姉のエスタが、その頃カンサス市で演じてゐた或る役者と出来合つて、騙け落ちをしたことであつた。

實を言ふと、このエスタは、随分嚴格に育てられても來たし、その宗教的・道徳的な熱心さは、時に性格的にさへ見えることがあつたのであるが、しかし、事實、彼女は、自分が何を考へてゐるかさへ解らないやうな、ひどく官能的な弱い娘だつたのである。彼女を圍繞するものを輕蔑して居た彼女は、本質的にその空氣の外にあつた。毎日毎日、同じ獨斷説や信條を繰り返して居る人は誰でもさうであるが、彼女も亦、子供の時から、いろいろの習慣と擬態とを續けるだけで、その意味などはまるで知らなかつた。自分で考へる代りに、いろいろの教訓や規律や「天啓」の眞理を教へ込まれる彼女は、他の理窟や境遇や、外部的・内部的の衝動や性格がそれらと衝突して來ない限り、安全だつたのである。しかし、一度、さう言ふ衝突が起つて來ると、性格的にも信念的にも何の根柢を持たない彼女の宗教的觀念は

めちやく／＼にこはされてしまふ。その思想感情は、たゞふらく／＼と、戀愛や享樂に引きつけられる。そこにはたゞ、夢の親和力が働いてゐるだけである。

無論、クライドも、その點では、姉と同様であつたが、たゞ、彼女には、クライドほどの熱意がない代りに、また、それに對する抵抗力も弱かつた。ぐうたらな彼女は、たゞほんやりと美しい着物や帽子や靴やリボンを欲しがつてゐながら、宗教的觀念によつて、それを押へつけて居る。而も、彼女の眼前には、朗かに明るく朝夕の街路が横つて居る。そこには、澤山の娘たちが、手をつないだり、囁き合つたりして走り廻つて居るし、少年は少年で、道化た眞似をしながら、對手欲しきを見せつけて居る。彼女は、街の隅にうろ／＼して居る戀人たちを見たり、自分に送られる求めるやうな目つきを見たりするたびに、その心を怪しく搔き亂されるのだつた。

實際、その頃すでに娘ざかりであつた彼女に取つて、かうした目ざしは、見えない光のやうに鋭いものだつた。而も、對手の氣持はすぐ彼女の氣持に通じることだつた。

そこで、或る日、彼女が學校から歸つて來る途中で、例の「女たらし」と言はれる種類のやさ男が彼女に話しかけて來た。好色ではないが、しかしすなほな彼女は、ちよつと立ちどまる。無論、家庭の訓練によつて、相當な身だしなみを知つて居る彼女には、そのまゝ、すぐ放埒に落ちるやうな危険は

なかつたが、しかし、一度あつたことは二度ある。二人目、三人目の男が話しかけるやうになると、彼女もちよつと對手になる。次第に、その身だしなみの城壁も落ちて行き、恥かしさも薄れて行つて、やがて、誰かとの輝かしい戀を夢見るやうになる。

丁度かうした時期に、この役者は、彼女の前に現はれて來たのだつた。無論、男は、何の道徳心もないし、趣味もなければ禮儀作法も知らないやうな、たゞ美しいばかりのけだものであつたが、その手管は、たつた一週間、二三度會ふうちに、思ふまゝに彼女を操るやうに、させてしまつたのだつた。無論、彼は、彼女を愛して居るのではなかつた。たゞ、彼女がちよつと可愛らしくて、見たところ官能的で、おほ／＼で、わけもなく騙されさうなところが、彼には珍らしかつたに過ぎないのである。

男の言葉によると、彼女のなすべき唯一のことは、今すぐ駆け落ちをして、彼の花嫁になることであつた。かうして二人が會つた限り、躊躇は無用だと言ふのである。或る事情で此處では結婚が出来ないが、セントルイスに行けば知り合ひの牧師が居るから、そこで結婚式を挙げやうと言ふのだつた。それは、彼女に取つては、かつて知らない新しい着物を着ることであり、香はしい冒険を犯すことであり、戀を得ることであつた。さうなれば、彼女は、彼と一緒に旅行して、廣い世間を見るで

あらうし、彼のことのほかには何も心配することはなくなるであらう。男がかつて幾度か使つて成功した甘言——口だけの誓ひの言葉が、今やすべて彼女には眞實であつた。

かうして、氣まづい朝と晝と夜との一週間の後に、この化學的な手品は完成された。

四月の或る土曜日の夜、その晩の傳道會から逃れやうと思つて、町の方に散歩に行つたクライドは、その晩おそく歸つて來ると、エスタの行くへを心配して居る親たちを發見した。その晩、彼女は平常通りにオルガンを弾いたり、歌を歌つたりして、ちつとも變つたところを見せなかつた。集會が濟むと、彼女は、少し氣持が悪いから早寢をしようと云つて、寢室に引き上げて行つた。しかし、十一時頃、クライドが歸つて來た時、母親が偶然彼女の部屋に行つて見ると、彼女の姿が見えなかつた。部屋の中ががらんとして、こま／＼した飾り物だの着物だのが動かしてあるし、昔から見馴れた衣裳カバンがなくなつて居る。それが、先づ彼女の注意を引いた。そこで、家ちうを捜して見たが、彼女はない。時々往來に出て、一人で傳道館の前に立つてゐるのであるが、アサが外に出て見たが、矢張りゐないので、今度はクライドと二人でミゾリイ通りの邊まで行つて見たが、エスタの姿は何處にも見えなかつた。十二時頃、二人が家に歸つて來てからは、當然、彼女への疑惑が刻々に深まつて行つた。

最初はみんな、彼女が何處かへ説明の出来ない散歩に行つたのだらうと思つてゐたが、十二時半になつても、一時になつても、とう／＼一時半になつても歸つて來ないので、止むなく警察に知らせやうと思つて居る時、彼女の部屋に入つて行つたクライドが、枕にピンで止めた彼女の手紙を、發見したのである。彼はすぐ寄つて行つた。すべてが解つた氣がした。と言ふのは、彼自身も、自分がこつそりこの家を逃げ出す時、どうして親たちにそれを知らせたら好いかと、しば／＼考へたことがあつたからである。無論、これも、さうした書き置きに違ひなかつた。彼はそれを取り上げると、よつほど讀んで見たい氣がしたが、丁度その時、母親がその部屋に入つて來て、「何だね、それは？ 手紙かい？ あの娘のだね」と叫んだ。彼が渡すと、母親はそれを開いて、素早く讀んだが、さつと顔色を變へて、隣の部屋へ歩き出した。その時、彼女は大きい口を屹と食ひしばつて、手紙を持つ手をぶる／＼と震はしてゐた。

「アサ！」叫びながら、隣の部屋によろけ込んだ彼女は、父親の蓬髪を見下しながら、「これを讀んで御覽なさい」と言つた。

クライドもすぐその部屋に入つて行つたが、父親の厚い手は、多少神經的に動いたゞけだつた。

「チエツ、チエツ、チエツ」

父親は先づ舌打ちをしたが、クライドには何となく弱々しく不十分なものに思へた。「チエツ、チエツ、チエツ」もう一度舌打ちをすると、今度は、頭を左右に振り出した。やがて「しかし、どうしてこんなことになつたのだらうね」と言つて、妻君の顔を見つめたが、彼女はたゞ黙つて、彼を見返して居るだけだつた。間もなく、彼は、手をうしろで組んで、部屋の中を歩き始めた。そして、もう一度、頭を振りながら、「チエツ、チエツ、チエツ」と舌打ちした。

グリフィス夫人の悲しみは、非常に深かつた。彼女はむしろ人生そのもの、不満にいらくして居る様子で、心痛と言ふよりも肉體的苦痛に悩んで居るかのやうに見えた。夫が立ち上ると、もう一度手紙を取り上げて見入つてゐるが、その顔は、苦痛と緊張と困惑とに彩られてゐた。それは、もつれた糸を解かうとして解き得ない様子であつたし、不平から逃れやうとして而も咄かないでゐられない様子だつた。彼女の長年の傳道や信仰は、彼等をこんな目に會はせないで置いて呉れさうに、思へてゐたからである。これほどの凶事が行はれて居るのに、彼女の神やキリストは何處に居るのだ？ 神は何故彼女のために働いて呉れないのだ？ これをどう説明して呉れるつもりなのだ？ 聖書に書いてある神の約束や、神の絶えざる導きや恵みは、一體、どうなるのだ？

流石の彼女も、かうした災厄に直面しては、それをはつきり説明することが、少くとも今すぐ説明

することが困難であることを、クライドは見ないでゐられなかつた。尤も、しばらく後になつてからは、彼等も結局、或る説明を得たらしかつた。それは、凡ての宗教家が用ゐる例の二元論的な説明であつて、神は人生の最高の統治者ではあるが、不幸やあやまちや悲惨事とは無關係であると言ふ論法である。さうした不幸やあやまちの原因は、神ならぬ他の何かに求めねばならない。全能の神にさへも背く或る悪の力——人心の内部にひそむ悪——神の統治することを欲しない或る力に求めねばならないと言ふのであつた。

併し、今のこの瞬間の彼女には、アサのやうに唇を歪めたりはしなかつたが、たゞ不快と憤りとがあるだけだつた。もう一度手紙を讀んで見た彼女は、「誰かと一緒に逃げたのですね。しかし——」と言ひかけて、突然、口をつぐんだ。クライド、ジュリア、フランクの三人の子供が、びつくりしたやうに、そこに立つてゐたからである。「ちよつとこちらにいらして下さい。少し話したいことがありますから。お前たち子供は、もう行つてお休みなさい。私たちはすぐ歸つて來ますからね」

アサと彼女は、そゞくさと、物置きの部屋に入つて行つた。電燈をひねる音がして、それから、ほそそと低い聲で話すが聞えた。三人の子供は、互ひに顔を見合せてゐた。十歳になるフランクには、何のことだか解らないらしかつたし、ジュリアでさへ、まだ、事の重大さははつきりしないらし

かつたが、すでに廣い人生に觸れて来て居るクライドには、今母が言つた「誰かと逃げたのですね」と言ふ言葉で、何もかも解つてゐた。エスタも、彼と同じやうに、かうした生活に飽きて来たのだ。恐らくは誰か、しよつちう往來で見かけるあゝした道樂者が何處かにゐて、それと一緒に逃げたのであらう。だが、何處へ行つたのだらう？　どんな男と一緒にだらう？　あの手紙には、何か書いてあるに違ひないが、母が見せて呉れなかつた。何だつて僕は、一人でそつと見なかつたのだらう？

「姉さんはもう歸つて来ないつもりだと思ふかい？」

兩親が隣の部屋で話して居る間に、彼はそつとジュリアに言つた。

「私には解らないわよ」彼女は少しいらくして答へた。「姉さんは私に、何も言はないんだもの。」

屹度恥かしかつたんだわ」

エスタやクライドよりも、感情的に冷いところのあるジュリアは、普通の意味で親思ひであつたら、この場合の悲しみは彼等よりも深かつた。無論彼女には、今度のことの意味が充分にはつきりしてゐなかつたが、たまには他處の娘たちと、ごく内輪にはあるが、さうしたことを話し合ふこともあるので、多少の想像はついてゐた。しかし今、エスタがかうして彼等棄て、逃げ出したことを思ふと、そのことが兩親を悲しませ、悲しい空氣をかもし出したと言ふだけで、彼女には腹が立つた。

親たちが隣の部屋で話して居る間、クライドも亦考へこんでゐた。人生への烈しい好奇心が起つて

ゐたからである。エスタは一體、どんなことをやらかしたのだらう？

往來や學校で、少年たちがひ

そかに話し合つてるやうな、あゝ言ふ恐ろしい猥らしい驅け落ちなのだらうか？　だとすれば、何と言ふ恥かしさだらう！　彼女はもう歸つて来ないだらう。他處の男と一緒に行つてしまつたのだ。無

論、これは悪いことだ。だつて、男と女との關係は、たゞ結婚する時だけ正しいのぢやないか。而も

今、エスタは、こんなにみんなを心配させた上に、逃げて行つて、そいつをやつたのだ。無論、二人

の生活は、今だつて相當に暗黒に違ひないが、これからますます暗くなつて行くに違ひない。

間もなく親たちは出て来た。グリフィス夫人の顔はまだ緊張してゐたが、しかし多少變つてゐた。

憤りが消えて、絶望的な諦めが濃くなつてゐた。

「何れにしても、エスタは、しばらく家にゐない方が好いでせう」物問ひだけに待つて居る子供たち

を見ると、彼女は先づさう言つた。

「だから、お前たちも、姉さんのことを心配したり、考へたりすることはちつともありませんよ。姉

さんは屹度、間もなく歸つて来るからね。彼女は、或る事情で、しばらく、獨立することにしたので

すから。神様の御心でね」(「主の名に榮えあれ！」とアサが叫んだ)「私は、あの娘は此處で幸福に

思つてゐるだらうと考へてゐたのだが、さうではなかつたのだね。やつぱり、自分で、世間を見た方が好いのでせう」(こゝでアサがまたチエツ、チエツ、チエツとやつた)「しかし、まア、私たちは餘りむづかしく考へない方が好ござんすよ。むづかしく考へても、何の益もないことだし——まア、せいぜい、愛と親切を考へるのですね」さう言ひながら、彼女の聲には、まだ何處か固いところがあつた。「あの子だつて、もうすぐ自分が莫迦で無考へだつたことが解つて歸つて来るに違ひないし、今の途が巧く行く筈もないのだから。あの子は若すぎて過つたのだが、私たちは赦してやらなくちやありません。やさしく、寛大にしてやらなくちやいけません」彼女は集會の前で説教してゐるやうな調子で話したが、その顔や聲は、苦しく悲しうだつた。「さア、みんな行つてお休みなさい。私たちはただあの子に悪いことが起りませんやうにつて、朝も晩もお祈りすることが出来るだけですからね。まア、これ迄は、そんなことはなかつたと思ふけれども」子供たちが前に居ることも忘れて、彼女は、取つてつけたやうにそんなことを言つた。

しかし、アサは！

かう言ふ親爺だからね、とその後もしばくクライドは考へた。

彼は、彼自身の悲しみを他處にして、たゞたゞその妻の深い悲しみに引き入れられてゐるらしかつ

た。この間、彼はたゞ莫迦のやうに、部屋の間突つ立つて居るのだ。

「さうだとも。主の名に榮えあれ。吾々は何時でも心を開いてゐてやらなくちやならない。さうだ。

吾々は人を裁いてはならない。たゞたゞ善きものを望んで居れば好いのだ。さうだ、さうだ！ 主を

讃へよ。吾々は主を讃美しなくちやならない。ア—メン— さうだ！ チエツ、チエツ、チエツ！」

「もし誰か、あの子は何處に行つてると訊いたら」と、しかし、グリフィス夫人は、夫や子供には無頓着に話し續けた。「トナワンダの親戚に行つてると話して置きませう。無論これは本當のことで

はないけれども、私たちにも何處にゐるのだから解らないのだし、それに、あの子もやがて歸つて来る

のですから、本當のことが解るまでは、あの子の迷惑になるやうなことは、言つたりしたりしない方が

が好いと思ひますから」

「さうだ。主を讃美せよ」と、アサは弱々しく叫んだ。

「だから、何時、誰に問はれても、解るまでは、さう答へるのですよ」

「承知しました」とクライドが言ふと、ジュリアも「好いわ」と答へた。

グリフィス夫人は、黙つて、しかし辯解するやうに、子供たちの顔を見たが、アサはたゞ、もう一度、チエツ、チエツ、チエツと音をさせるだけだつた。さうして、やがて、彼等は寢臺に追ひやられ

た。

クライドは、エスタの手紙を見た気が随分強かつたが、とても見せて呉れる母でないことを知つてゐたので、再び自分の部屋に歸つて行つた。しかし、彼女を見つけて出す望みがあるのならば、何故彼等はもつと捜さうとしないのだらう？ 一體、今、この時間、彼女は何處にゐるだらう？ 何處かの汽車の中だらうか？ 無論、彼女は、見つけられたいとは思つてゐないに違ひない。恐らくは、彼女も亦、彼と同様に不満足だつたのだ。彼にしても、最近、何處かへ逃げ出すことを考へて、それが彼の家族たちにどう思はれるかを考へてゐたのだつたが、偶然、姉に先んぜられたのであつた。而もこのことは、彼の將來にどう響くだらう？ なるほどそれは、彼の親たちを悲しませはしたが、しかしそれが——少くとも彼女が出て行つたと言ふことが——非常な災害であつたとは、彼には思へなかつた。それは、たゞ彼等の現状が間違つてると言ふことを示す或るものに過ぎなかつた。傳道事業なんて、何にもならないものである。かうした宗教心や説教はやくざなものである。それはエスタを救はなかつた。彼と同様に、彼女も亦それを信じてはゐなかつたのだ。

四

かうした結論に達した結果は、クライドをしていよいよ苦しませることになつた。而もその主なる結果は、彼をして一日も早く獨立したいと考へさせたことであつた。尤、これ迄でも、彼は、普通十二歳から十五歳までの少年がするやうなけちな仕事は、ちよいとやつてゐた。例へば、夏の間の新聞發送を手傳つたり、一夏ちう五錢屋、十錢屋の地下室で働いたり、冬の日曜日に箱を明けたり、荷造りをしたりするやうな仕事をすれば、その頃の彼には一財産にも思へる可なりの金高、一週間に五弗くらは、儲けることが出来たのであつた。すつかり金持ちになつたつもりのは、さう言ふものは世俗的である上に罪惡であると思へて居る親たちの目をしのいで、時々、芝居だの活動だのに行つた。彼はそれを悪いことだと思はなかつたばかりでなく、自分自身の金で買ふ權利だと思つてゐた。たまには弟のフランクを連れて行くことがあつたが、弟はすつかり喜んで、誰にも何も言はなかつた。

その年の暮、學課が非常におくれた彼は、學校を止さうと思つて、或る劇場の隣りの、ちつほけな藥屋のソーダ水賣りの手傳ひになつた。學校へ行く途で「小僧入用」の貼り紙を見て、先づ興味を持つたのだつた。その若い番頭と話して見ると、彼がもし熱練すれば、一週間に十五弗から十八弗くらゐる貰へるとのことが解つた。噂によると、バルチモア通りのストラウドの店では、これと同じ給金

を二人の番頭に拂つて居るとのことだつたが、彼が来て居るこの店では、ごく普通の給金の十二弗しか拂はないとのことだつた。

しかし、この技術を感じるには、多少の時間と、専門家の親切な指導とが要つた。もし彼が、先づ五弗の給金から始めて——いや、では、六弗にまけて置け——此處に来るならば、彼はすぐ飲み物の調合を憶えるだらうし、アイスクリームの飾り方も憶えるだらう。見習ひの間の仕事は、いろいろな道具や器具を洗ふことで、朝七時半から来て、門を明けたり掃除をしたり、主人の走り使ひまでさせられると言ふやうなことは、何も言はなかつた。無論、この番頭が急がしい時には、彼も呼ばれて、レモネードとかココロラとかの簡単な飲み物を作らなければならない。

しかし、彼は、母親とちよつと相談して、この面白い職業につくことにした。何と言つても彼には彼の大好きなアイスクリーム・ソーダが思ふ存分飲めることが嬉しかつたし、これが、彼に缺けて居る商賣と言ふもの、入口になることも嬉しかつた。それに、何よりも有難いことには、この店では、夜の十二時まではどうしても店に居なければならぬことであつた。夜、家に居ないで済む彼は、自然、日曜以外の集會には出ないで済む。尤も、日曜日でも、彼は、晝も夜も働くことにするつもりであつたからである。

のみならず、この店の一つの扉は、隣りの劇場の廊下に通じてゐたし、このソーダ・ファウンテンの番頭は、毎月きまつたやうに、その劇場の入場券を買つてゐた。劇場と密接な關係にある店で働くなどと言ふことは、クライドに取つては、大變なことであつた。

しかし、クライドに取つて何よりも嬉しかつたことは、同時に時々失望させられたことは、隣りの劇場の畫興行の前夜、小鳥のやうな娘たちが、時には一人、時には二人づれで、この店に群り來ることであつた。彼等は店臺に腰かけて、くつくと笑つたり、おしやべりをしたり、鏡の前で顔を直したりする。まだ世間を知らないクライド、殊に、異性について何も知らないクライドは、その美しさ、勇敢さ、自惚れさ、甘さを、飽かず眺めることが出来るのである。彼は、コップを洗つたり、アイスクリームやシロップを容器に入れたり、レモンやオレンジを盆に並べたりして、急がしく働しながら生れて初めて、かうした娘たちを、しゆくくと研究する機會を得るのである。何と言ふそのすばらしさよ！ 彼等の大部分は、指輪、ピン、毛皮、美しい帽子、立派な靴を着飾つたすばしこさうな娘である。彼女たちの話し合つてゐることは——夜會、ダンス晚餐、芝居。近いうちに遊びに行く筈のサス附近のあちこちの話、去年と今年との流行の相違。この町に來て居る、來る筈の役者や女優、殊に役者の噂ばなし。一つとして、今日迄、彼の家庭では、聞いたことのない話しなのだ。

而も、かうした美人は、しばし、盛装の男子と連れ立つて来た。夜會服、ドレス・シャツ、絹帽子、蝶形ネクタイ、白革手袋、エナメル靴。それらはすべて、當時のクライドには、榮華と幸福の最後のものに思へたのだつた。こんな服を、こんなに樂々と平氣で着て居られるとは！　こんなに悠揚として、かうした令嬢と話して居られるとは！　一體、成功とはどう言ふことだらう？　クライドには、かう言ふ服装をしてゐない限り、美しい娘は見向きもして呉れないやうに思へた。こいつだけは、是非必要だ。而も一度、さう言ふ身分になつて、かうした着物が着られさへすれば、すべての幸福が集つて来るのではないか？　さうなれば、あらゆる人生の喜びが、彼の前に擴げられる。親しい微笑、秘密な握手、抱擁、接吻、結婚の約束——それから、それから。

今日まで、年がら年ちう道ばたの祈禱を聞かされたり、傳道館でやくざ者の告白を聞かされたりしてゐた彼に取つて、これらすべては輝かしい光りのやうに思へた。而も、今、彼は、それらから逃れ出ようとして居る。お金を貯めて、何かにならうとして居る。全く、これら凡俗なもの、單純な牧歌的な合成物が、今や、精神的變貌の驚きと光りとを帯びて、心願的になつたのである。しかし、かうして、飲み物の調合を憶えて、最後に十二弗の給金を得ることが、さう容易に出来ることでないことも、彼にはすぐ解つて来た。と言ふのは、彼を使つて居る番頭のジイバリングが、

なるべく物を教へないやうにすると共に、自分は樂な仕事だけをやるやうに心を決めてゐたからである。のみならず、彼も亦藥屋の主人と一緒になつて、一日ちう、使ひ走りにつき使つたからである。

この調子で行けば、彼には、好い着物を着る望みはまるでなかつた。それに、金もなく、他人との接觸もない彼は、自分の家庭以外では、ひどく淋しい思ひを、しなければならなかつた。而も、彼の家庭とても、今は、少からず淋しかつた。エスタが逃けて行つたことは、この家の傳道事業に、一沫の不安を投げかけてゐた。もし彼女が歸つて来なければ、デンヴァかコロラドに移らう——さう言ふ相談までされて居ることを、クライドは耳に入れてゐた。しかし、クライドは、彼等と一緒に行かうとは思つてゐなかつた。そんなことが何になるんだと思つてゐた。その地へ行つたところで、やつぱり同じやうな傳道館があるだけではないか。

彼はこれ迄、あの傳道館のうしろの、彼の家庭にばかり住んでゐたので、十一歳になつて以來は、友達を家に連れて来ることを恥ぢてゐた。そのために、友達を作ることを避けてゐた彼は、たつた一人で遊ぶか、さもなれば、弟たちと遊ぶかよりほかに、何もしなかつた。

しかし、今、十六歳になつて、自分で自分を處理するやうになつた彼は、何とかして家から出たい

と思ひ出してゐた。而も、彼の収入と言へば、殆んど何もなかつた。一人立ちをすれば、食へること
も出来ない。而も、もつと好い仕事に變るには、熟練も足りないし、勇氣もなかつた。

しかし、デンヴァに移らうと言ひ出した親たちは、彼にも其處で仕事についてはとすゝめ始めた。
彼は、デンヴァに行きたくないとは決して言はなかつたが、しかし、此處に落ちついてゐる方が好い
と言ふことを、言葉のはしぐしに示すやうにした。自分はカンス市が好きなのだ。土地を變つたつ
て何の益があるだらう。自分も今はつまらない店に居るが、そのうちにはもつとましな仕事にありつ
けるだらう。しかし、エスタのことを考へて居る親たちは、若いクライドを一人で置いて置くことの
結果について、少からず疑念を持たないでゐられないのである。彼等が行つてしまつてから、クライ
ドは一體何處に住むだらう？ 誰と一緒に暮すだらう？ 誰が、彼等に代つて、彼と相談したり導い
たりして呉れるだらう？ こいつは考へて見なければならぬ。

しかし、デンヴァへの移轉は、だん／＼近づいて來るらしかつた。それに、それから間もなく、あ
の番頭のジイバアリングが、餘りに露骨な情事のために、この店を首になつた。別の番頭がクライド
の上に来ることになつたが、この番頭は、クライドを使ふことを嫌がるらしかつた。それやこれや
でクライドも、たう／＼、外に使ひに出たついでに、ほかの仕事の口を捜して見ようと決心した。丁

度、ある日、そこ／＼と捜して歩いて居る時に、彼は、その町一番のホテルの中にある或る藥屋のソ
ーダ水部で、聞いて見ようと思ひついた。その十二階の大ホテルは、何時も、重さうな窓掛けに垂れ
こめられては居るが、そのすばらしい女關や、棕櫚を植ゑ込んだ廊下の様子は、如何にも贅澤さうで
あつた。彼は、このホテルの前を通るたびに、一體、こんな家の中には、どんな生活があるのだらう
と、子供らしい驚きと疑ひに捕はれるのが常だつた。無数の自動車が、何時も、その戸口に待つてゐ
た。

その日、彼は、自活の必要に驅られて、その建物の一隅の、藥屋に入つて行つた。戸のそばのガラ
スの中に、一人の娘が帳場に坐つてゐたので、こゝのソーダ・ファウンテンの主任のことを聞いて見
た。彼のおづ／＼した様子や、訴へるやうな目つきに興味を持つた娘は、彼の用向きを本能的に察し
て、

「セコアさんなら、あそこにいらつしやいますよ」と、丁度今化粧品を並べて居る三十五六の男の方へ
うなづいて呉れた。クライドはその男に近づいて行つたが、どう話し出して好いか解らないし、その
男も自分の仕事に氣を取られて居るので、彼のそばでぐ／＼して居ると、辛と誰か々來て居ること
を察したらしい男は「え？」と、彼の方へ向いてたづねた。

「このソーダ・ファウンテンに助手が要るやうなことはないかと思つて伺つたのですが。もし何か仕事がありましたら、やとつていたゞき度いのですが」

クライドの言ひたいことは、彼の目つきだけでもはつきりしてゐた。

「いや、ないね」せつかぢらしいその男は、さう言つて其處を去らうとしたが、クライドの顔に浮んだ絶望の色を見ると、また向き直つて言つた。「これ迄、かう言ふ店で働いたことがあるのかね」

「いえ、こんなに立派なお店ではまだ働いたことがありません。今働いて居るのは、クリンクルさんと言ふ店なんです、出来るならばもつとましなお店で働きたいと思ひまして」

「なるほど」男は、自分の店がほめられたので、多少嬉しいらしかつた。「それはまア一理窟だが、今は丁度、何も仕事がないところだ。しかし、お前さんがもし走りボーイにでもなりたいと言ふなら、一つ教へて上げてほしいよ。丁度今、このホテルで、ボーイを一人捜してると言ふ話を、ボーイ長がこなひだ話してゐたからね。あそこで働くのも、こゝで働くのも、大した違ひはないと思ふが」

しかし、さう聞いて急に顔を輝かしたクライドを見ると、その男はまたかう附け加へた。

「しかし、私はまだお前さんと言ふものを知らないのだから、私から言はれてホテルへ来たやうに言つて貰つては困るよ。たゞ、その梯子段の下のスクアイヤさんのところへ行つて、さう話して御

覽。向ふでも、また何かそのことを話して呉れるから」

それはクライドに取つて、思ひも染めない話しだつた。グリーン・デビッドソンのやうな、こんな大きなホテルに入れるなんて、考へるだけでからだが震へる思ひがした。そこで彼は、この忠告者にその親切を謝して、この店からすぐ續いて居るホテルの廊下に入つて行つた。入つて見ると、あたりはこれ迄見たこともないほど、きらびやかに磨き立て、あつた。足の下には、黒白まんだら大理石があつたし、頭の上には、銅や金や、さまざまな色で彩つた天井があつた。而もそれを支へる杏のやうな黒大理石の柱は、鏡の面のやうに磨き立て、あつた。その大理石の柱は、左と右と表立關へと、三方に擴がつてゐるが、その間に、ランプ、彫像、毛氈、棕櫚、椅子、床几などが、贅澤に置き散らばせてあつた。それは、かつて或る皮肉家が言つた「大衆への排斥」を、わざ／＼やつて居るとしか思へない贅澤物の寄せ集めであつた。實際それは、アメリカの成功した大商業都市の随一のホテルとしても、まだ餘りに贅澤すぎるものだつた。

クライドが立つてあたりを見廻すと、そこには澤山の人が——女や子供もまじつてゐるが、大部分は男で——立つたり坐つたりして、話し合つてゐた。あちこちに、贅澤な敷物を敷いた凹みがあつて、そこには物書き臺だの、新聞綴ぢだの、電信局だの、小間物店だの、花賣りだの、群がつてゐた。

その日はこの町の齒科醫の會議が此處であつたので、中には妻君や子供まで連れて集つてゐたのだが、そんなことを知らないクライドには、これが日常のこのホテルの様子のやうに思へたのだつた。

しばらく、クライドは、おづくくと物珍らしげに見廻してゐたが、やがてスクアイヤの名を思ひ出して、例の「梯子段の下」を捜し始めた。見ると、彼の右手の方に、一つの梯子段があつた。それは二段に廻轉した大きな梯子段だつたが、その梯子段と梯子段との間がこのホテルの帳場であるらしく、澤山の事務員がそこにゐた。しかし、その梯子段のうしろの、壁のそばのところに、一脚の高い机があつて、その前で彼と同年くらの青年が一人、金ボタンに土人服の制服を着て、小さい丸薬箱のやうな帽子を斜にかぶつて、急がさうに何か帳簿に書き入れてゐた。そのそばのベンチにも、彼と同年くらの同じ制服の少年が澤山ゐて、あちこちと走り歩いたり、紙きれだの鍵だのを持つて來てこの青年に渡したりして、また次の番を待つらしかつた。机の上の電話が、引つきりなしにかゝつて來る。と、その青年が用向きを聞いて、机の上の小さい呼鈴を鳴らしたり、「次ぎ！」と叫んだりする。すると、そのベンチの端にゐる少年が立ち上つて、それ／＼の梯子段やエレベエタアや入口の方へ急いで行く。そして大抵、誰かを案内しながら、カバンだの外套だの、ゴルフの杖だのを携けて來

ると、中には、盆に載せた飲み物だの、紙包みだのを持つて、上の部屋に上つて行くのもある。幸ひにして彼がこのすばらしい仕事に關係出來るとすれば、かう言ふ仕事をやらされるのであるらしい。彼はこの活氣のある仕事ぶりを見て、忽ち自分も、この仕事にありつきたいものだと思つた。しかし、彼のやうなものに、こんな仕事が出来たらうか？ 一體、スクアイヤさんと云ふ人は何處に居るのだらう？ 彼はその小机の青年に近づいて行つた。

「スクアイヤさんは何處にいらつしやるのでせう？」

「そこに來られましたよ」

青年は、不審さうにクライドを見つめてさう答へた。

見ると、快活な詭辯家らしい顔つきの三十近い男が一人、こちらにやつて來るところだつた。ごつごつに瘦せた男で、立派な着物を着てゐるが、クライドにはすぐ怖い男だと言ふ氣がした。ひどく鋭さうな、狡猾らしい男だつた。鼻も目も唇も頤も、變に薄くとがつてゐた。

「おい、今、スコツチの辨慶縞の肩掛けをかけた白髪頭の大きい男が、此處を通つて行くのを見なかつたかい？」

彼は立ちどまつて、机の前の青年にさう話しかけた。青年がうなづくと、

「おい、あの人はあれでランドレイルの伯爵ださうだよ。今朝方、トランク十五ばかりと、召し使ひを四人連れて着いたばかりなんだ。あれでもスコットランドでは、何とか言はれる人ださうだが、旅行中は名前を變へてるんださうだ。うちの宿帳にはブランドと書いてあるが、あれでもイギリスでは相當なものらしいな」

「左様でございますか」と、青年はうやくしく答へた。

彼は初めてクライドに目をやつたが、知らない顔をして居た。と、例の青年がクライドに口添へをした。

「此の若い人があなたを待つて居るんですが」と、説明して呉れた。

「僕に會ひたいんだつて？」

ボーイ監督はクライドの方を見て、その見すほらしい着物を眺め乍ら、同時に疑はしげに彼を見て言つた。

「實は、あの藥屋の旦那から聞いて來たのですが」と、クライドは出来るだけ快活さうに言ひ始めた。「若し此方でボーイがお入用であつたら、使つて戴きたいと思つて伺つたのですが。私は今クリ

ンクルの店で働いて居るのですが、其處を出て、此方で働きたいと思つて居るのです」言ひ乍らクライドは、その男の冷たい試めす様な眼付きの前で、息も出来ない程、度を失つて居た。

彼は自分が位置を得ようと思ふならば、他人からよく思はれねばならない事——彼等に氣に入る様な事を言つたり爲たりしなければならぬ事を、生れて始めて感じた。そこで彼は、一生懸命作り笑ひをして、「若し僕の様な者でも入れて戴けるんですしたら、どんなにでも、一生懸命働くんですけれど」と、言ひ足した。

其の男は冷たい眼付きでクライドを眺めて居たが、元々、狡い慾深い彼は、人並みの外交家らしく頭を否定的に振る代りに、「しかし、お前さんは未だこんな仕事をやつて見た事はないのだらう」と、言つた。

「え、しかし、一生懸命やれば、直ぐ憶えられるんではないでせうか」

「さう。然し」と、ボーイ監督は曖昧に頭を搔いて、「今日は時間がないから、月曜の午後來て見て呉れたまへ。その時に遇ふ事にするから」

彼は向ふを向いて歩き去つた。取り残されたクライドは、何の事だか解らないで、ほんやりと立つて居た。月曜日にまた來いと言

つたが、一體それは本當なのだらうか。そんな事があり得るだらうか。——彼は全身に浸み渡るものを感じて、急いで外に出て行つた。僕は今、カンサス市第一のホテルに仕事を探しに來たのだ。而も月曜日に又來いと言つて呉れた。一體之はどう言ふ意味なのだらうか？ こんな素晴らしい世界に、こんな理由もなく這入れるのだらうか？ 本當にあり得ることだらうか？

五

こんなにも素晴らしいホテルで働けるのだ。——その夢の中で飛び交はすクライドの空想は、全く名状し難いものであつた。これまで、極端に押へつけられて、想像より外に何も知らなかつた彼に取つて、贅澤と言ふ觀念は、極端に誤られ、出鱈目なものになつて居たからである。彼は以前の藥屋に歸つて行き、暫くして自分の家に歸つて行つたが、その後の金曜、土曜、日曜、月曜は、まるで空の中を歩いて居る調子だつた。彼の心はもう、彼の仕事の中にはなかつた。彼は何度となく藥屋の番頭から「確かしろ」と言はれた。彼は仕事が済んでも、眞直ぐ家へは歸らないでホテルの方へ歩いて行つて、其れを眺めて居た。其處には夜中でも、その三つの玄關の前に、金釧の土人服の制服を着た門番が立つて居た。しかも内部には、その贅澤さうなフランス絹の窓掛けを通し

て、未だ、ぎらぎらと明りが輝いて居たし、地階の Grill や一品食堂は、未だ戸を開いて、其の廻りに澤山のタクシーや自動車が集つて居た。そして絶えず、何處からともなく音樂の音が聞えて居た。かうして月曜の午後になると、彼はまたスクアイヤ氏を尋ねて行つたが、彼の事をすっかり忘れて居たスクアイヤ氏は、酷く無愛想に彼を迎へた。しかし、その時は丁度、ボーイが要る時であつたし、クライドが役に立ちさうにも見えたので、彼は直ぐ例の梯子段下の小さい事務室に連れて行つて、酷く無頓着な、しかし勿體振つた調子で、彼の両親の事や、住所や、之までの經歷や、父親の職業やについて聞き始めた。彼の両親が大道で説教して居る事を認めるのは、クライドにとつて誇りでもあり、恥辱でもあつた。そこで彼は、いくらか眞實でもあつたので、自分の父は洗濯機を賣る勧誘員で、日曜日には説教もすると答へて置いた。之は幾らか保守的で、家庭思ひの此のボーイ監督にとつては、全く不愉快な事ではなかつた。身許證明のことも聞かれたが、無論、わけのない話しだつた。スクアイヤ氏は、そこで、此のホテルが非常に嚴格である事を説明し出した。彼の説明によると、かうしたけばくしい所であるし、見馴れない贅澤に接する爲めに、多くのボーイが間違ひを起し易い。餘分な金が多少とれる爲めに、間違ひをしでかして、解雇されるボーイが絶えずある。誰にも親切で、禮儀正しくすばしいボーイをこのホテルでは欲しがつて居るのだ。ボーイ達は、何時も身綺麗

にして、働き易い様にして居なければいけない。少しの金が出来たと言つて、娘達とふざけたがつた
り、夜遊びをしたがつたりして、時間に遅れたり、仕事に疲れたりする様な者は、此處に長くは居ら
れない。ボーイ監督は肝癪持ちである。馬鹿けた事は許さない。それだけは何時でも心得て置いて貰
はねばならないと言ふのだつた。

聞き乍らクライドは、幾度も背いて見せたり、「え、え」とか、「い、え」とか、力の籠つた短い言葉を
挟んだりして、結局、さうした大それた行ひや不品行は、彼の心持や性質として出来ない事をはつき
りさせた。そこでスクワイヤ氏は更に、此のホテルのボーイは誰でも一ヶ月十五弗の給金である事、
食事は地階の雇人テーブルで食べる事などを説明した。しかしクライドにとつて何よりも素晴らしい
事に思へたのは、どんな客でも、ボーイ達が何かしてやりさへすれば——例へば、靴を運ぶとか、水
を持つて行くとか、その他何に對しても、十仙、十五仙、二十五仙、時には其れ以上の心付けを呉れ
ると言ふ事だつた。而も驚く可き事には、かうした心付けは、そつくりボーイの物になる事で、其の
金高も、一日四弗から六弗に登るとの事だつた。クライドは、これだけの大金を考へるだけで、胸が
躍り息が詰まるのを感じた。四弗乃至六弗とは——それでは一週間で二十八弗から四十二弗になるで
はないか。彼はそれを信ずる事さへ出来なかつた。而も其の上に、十五弗の月給と賄があるのだ。更

にその上に、スクワイヤ氏の説明によれば、ボーイ達の美しい制服も、持出す譯には行かないが、向
ふ持ちであつた。彼等の勤務時間は——月曜、水曜、金曜、日曜は、朝の六時から正午まで、それか
ら六時間を休んで、夕方の六時から夜中まで働かなければならない。火曜と木曜と土曜日には、正午
から六時まで働けばいいのだ。従つて、一日おきには午後夜の休みが来るわけだつた。しかし、食
事はすべて、かうした勤務時間外に採らねばならなかつたし、定刻の十分前には制服着用で出揃つて
監督の點検を受けねばならなかつた。

その時、クライドには未だ聞いて見たい色々事があつたが、スクワイヤ氏は何も言はなかつた。
多分誰か話して呉れるのだらうと彼は思つた。しかしスクワイヤ氏は、押つかぶせる様に、茫然と
坐つて居るクライドに言つた。

「で、どうだね。お前さん、今から直ぐ働くつもりで居るのだらうね」

「え、どうぞ。え、どうぞ」

「宜しい」言つてから、彼は立上つて戸を開けて、「オスカア」と、ベンチの端に坐つて居る一人のボ
ーイを呼んだ。その聲に應じて、ぴつたり身に合つた小ざつぱりした制服を着た、脊の高い若者が快
活さうに立上つた。

「此の若いの——クライド・グリフィスと言ふ名前だつたね。確か——これを連れて、十二階の衣裳室に行つて、此の子に合ふ服があるかどうか、チェゴプスに聞いて御覽。若しなかつたら明日までに直して置く様に言つて。多分、シルスビーの着てゐた奴が、合ふだらうと思ふが」

言つてから今度は、それを眺めて居た助手の方に向いて、「兎に角、使つて見よう。今夜でもいい、し、何時でもいい、から、誰か一人、此の子に教へるボーイを附けて呉れ給へ。オスカア、行つてもいいよ」

彼は、クライドを預つたボーイにさう言つたが、二人がエレヴェーターの方へ行つてしまふと、「あいつ未だ新米だが、役には立つだらう」と言つた。やがて彼は、クライドの名を、支拂簿に記入する爲に立ち去つた。

一方、クライドは、此の新しい師匠に曳かれ乍ら、これ迄耳にした事もない色々な事を、それからそれへと聞かされて居た。

「君、こんな事、始めてゐないのだつたら、びくつく事はねえだよ」と、その若者は言つた。後に知つた事だつたが、此の若者は、ヘッグランドと言つて、ニュージャージー市のジャージー市から流れて、來た男で、言葉付きにも身振りにも、それらしい訛りを持つて居た。脊の高い、活潑な、髪の色茶色な

雀斑の多い男で、口は達者だが親切だつた。二人は「使用人」と貼り紙してあるエレヴェーターに乗つた。「何でもねえだよ。僕だつて、三年前、バッファローで此の商賣をおつ始めた時にや、何にも知らねえだつたよ。何アに、他人のする事さ、見てせえ居ればえ、だぞよ、ね？」

此の男よりは幾らか教育のあるクライドにとつて、かうした訛りだけの言葉遣ひは随分をかしくも思へたが、かうした彼の親切に對しては感謝しないでは居られなかつた。

「何せ、初鼻には、人のする事せえ見て居りやい、だよ。それだけだよ。鈴が鳴つた時に、お前さんがベンチの端に居たら、それがおめえさんの順番だ、直ぐおつ立つて行くのだ。何せ、此處では素早しけえが第一だから。誰か玄關から這入つて來るとか、靴でも持つて、エレヴェーターから出て來るとかした時、お前さんが若しベンチの端に居たら、鈴が鳴らうが鳴るめえが「つぎ」と言はれ様と言はれめえが、直ぐにおつ立ち上るが、だよ。皆忙がしいだ、解らねえ事があるだ、だよ。何せ、素早しけえが一よ。靴さ持つてやらねえと、チップさよこさねえから。靴でも何でも提げてるが最後、客がいらねえと言はねえ限り、持つてやるだ、だよ。だが、客が這入つて來てもよ、部屋の書入れが濟まねえうちは、帳場の側で待つて居なくちやな、ねえだよ」

エレヴェーターが上つて居る間、彼はそんな事を言つた。「大抵の人が部屋さ取るだよ。さうすると、

帳場がお前さんに鍵を渡すので、それと靴を持って部屋さ行くだアよ。部屋さ行つて見て、風呂場や便所があつたら、一番に其の電気をつけるだよ。さうしねえと、何處にあるだか解らねえだからな。そいから直ぐ晝だつたら、窓掛けを上げるし、夜だつたら其れを下けなきやなんねえし、手拭があるかどうかも見なくちやなんねえ。若しなかつたら、女中にさう告げるだよ。それで若し客がチツプを呉れねえなら、歸つて來なきやなんねえだが、お前さんがどうしても欲しいなら、こつそり其の邊にぐづぐづしてゐて、鍵をいぢるとか、窓を動かして見るとかするだアよ。さうすれば大抵の客がチツプさ呉れるだが、それでも呉れねえなら、お終えだから歸つて來るがい、だよ。そんな時、痛ましけな顔さするでねえだ。あとは早や、急いでベンチに歸つて來るだけの話よ。だが、何時でも、早くせんけりやいけねえだよ。他の奴に代られては詰まんねえからな。それだけの話よ」

「それから、お前さんの制服が出來て、働く様になつたら、仕事の後で一弗づつ、監督にやる事を忘れてはいけねえだよ。二番勤めた日にや二弗、一番勤めた日にや一弗やるのが、此處のしきたりになるとるだよ。俺等はみんなさうしてゐるで、お前さんもさうするがい、だよ。ざつとまア、そんなもので、後はお前さんの勝手だよ」

クライドには解つた。

二十四弗乃至三十二弗の金の中から、高々十二弗の金が消えて行くと言ふのだ。それがどうしたと言ふのだ。後に未だ十二弗から十五弗が残るのではないか？ その上に、賄と制服があるのだ。有難い！ 何と言ふ天國だらう。何と言ふ豪遊だらう。

ジャーシーのヘツグランドは、彼を十二階の或る部屋に連れて行つた。一人の萎みきつた灰色頭の怪しげな老人が居て、クライドに合ひさうな服を出して呉れたが、別に仕立替へる必要もなさうであつた。色々な帽子を被つて見ると、中の一つ合ふのがあつた。彼がそれを横被りに被つて見せるとヘツグランドが言つた。

「お前さんの頭は、後の方を刈り込むとよくなるづら。それでは餘り長過ぎるで」

クライドには、言はれなくとも解つて居た事だつた。確かに彼の頭は、此の新しい帽子には不似合だつた。階下に行つて、スクワイヤ氏の助手であるホイップル氏に報告すると、彼も「よし、よし。よく似合ふぢやないか。では、六時から働き給へ。五時半に出て來て、服を着て五時三十五分に検査を受けるんだ」と言つた。それからクライドは、ヘツグランドに言はれて、地階の更衣室に行き、戸棚の鍵を受取つてから、大急ぎで外に出て行つた。何よりも先づ髪を刈らねばならなかつたし、自分の大幸運を家の者に知らさねばならなかつたから。

彼は大ホテル、グリーン・デビッドソンのボーイになるのだ。彼は美しい制服を着る事になったのだ。しかし、彼が先づ母親に言はなければならぬ事——少くとも十一二弗の収入がある事は、はつきりと言へなかつた。自分の家族の爲めと言ふよりも、寧ろ彼自身の爲めに、先づ経済的に獨立したいと思つてゐる彼は、本當の給金を言つて仕舞つて、色々厄介な要求をされる事を怖れたからだつた。然し食事はいらぬ事——つまり、他所で食べて來られる事だけは話した。其の上に彼は、此のホテルの輝かしい空氣の中で、生活するのだ。十二時には望んでも歸られないのであつたし、よい着物を着れるのであつたし、恐らくは、面白い仲間も出來るであらうし、愉快な時も持てるのであつた。

而かも、かうして急がしく走り歩いて居る間に、偶然、彼の頭に浮んで來た最後の素晴らしい考へは、時には外泊して芝居だの何だのに行つてもいゝと言ふ事であつた。仕事をして居ると言つて下町に泊ればいゝのであつた。而も其の上に、食事も勝手だし、よい着物も着られるのだ！
かうした事の總ては、唯考へるだけで彼の驚異に値した。彼にはもう何も考へられなかつた。彼は唯、時の來るのを待たねばならない。此の完全な驚異の世界の中で、どれ程のものがやつて來るか、それを待つ計りであつた。

六

かうしたクライドの夢は、相手が経済的にも社會的にも、全然無經驗なグリフィス家の人達——アサ及びエルピラであるだけに、全く誂へ向きのものであつた。アサにしても、エルピラにしても、クライドがこれから始めようとして居る仕事の實際の性質を、少しも知らない。それがクライドにとつて、道徳的に、空想的に、経済的に、何を意味するかに就いても、クライド自身と同様に、何も知らないのであつた。彼等は曾て四流どころ以上のホテルに泊つた事がなかつたし、貧乏人専門の食堂以外では、食事を採つた事もなかつたからだつた。彼等の知つて居るボーイの仕事と言へば、ホテルの門から帳場まで客の荷物を運ぶ事だけで、其れ以上の事は考へられなかつた。無論、それに支拂はれる報酬も極く僅かで、高々一週五六弗に違ひないと、素朴にも考へて居るのだつた。

然し其の父に比べて、何時でも實際的であり、子供達の経済的な幸福に熱心である母親は、クライドがどうしてこんなに此の新しい地位に變る事に熱心であるのかを、實際に疑つて居た。と言ふのは、クライド自身の話に依ると、勤務時間も長かつたし、と言つて別に高い給金が取れるわけでもなかつたからである。なるほど、クライドの話に依ると、其のうちに、事務員か何かの、もつといゝ位

置につける筈であつたが、それは何日の事だか解らなかつた。それよりも寧ろ、従來の仕事の方が、將來の當がある筈だつたからである。

しかし、月曜の午後、飛ぶ様にして歸つて來たクライドが、彼がいよくその地位を得た事を話し、タイやカラーを變へ、髪を刈つて歸つて來た時には、彼女にも悪い氣はしなかつた。クライドがこんなに熱心になり、こんなに満足して居る事を、彼女は曾つて見なかつたからである。

しかし、クライドの説明に依ると、そこには朝の六時から夜中までの勤務時間があつた。而も、クライドは、氣が向くと、早退きをしたと言つて宵の中に歸つて來た。而も、寝る時と着物を更へる時との外に、まるで家へ寄りつかない彼のかうした生活は、母やアサをまごつかせないでは置かなかつた。ホテル―ホテル！ 彼はホテルに入浸つて居る。彼の報告する事は、唯々、それが好きである事、萬事がうまく行つて居る事、唯それだけであつた。それはソーダ・ファウンテンで働くよりいゝ仕事である。やがては金も出来るであらう。――だが、其れ以上の事は何も言へなかつたし、言ひたくも思はなかつた。

かうした間にも、グリフィス家の親達は、例のエスタの事件の爲めに、此のキャンサスを去つて、デンバーに行く事を考へ續けて居た。しかし、クライドはこれ迄にも増して、此のキャンサス市を去りた

くないと主張し始めた。みんなが去るのはいいが、自分は此處に残つて居たい。彼等が去つても、自分は何處かに部屋を借りよう。それがいいのだ。――だが、此の考へは親達には一向、得心が行かなかつた。

しかしかうした間にも、クライドの生活には烈しい變化が起つて居た。最初の晩、五時四十五分にホイップル氏の前に現はれて、試験濟みになつて以來、彼の世界は全く變つた。帳場の後の下男部屋で、外の七人と並んで、ホイップル氏の検査を受けた彼は、六時が打つと同時に、列を作つて廊下に入つて行つた。其處にはホイップル氏の机があつて、其の側に長いベンチが置いてあつた。ホイップル氏に代つて、監督助手の机についたバーンス氏が、直ぐにあれこれと指圖を始める。と、ホイップル氏が、勤め濟みの一隊を率ゐて、下男部屋に入つて行く。彼等は其處で御用濟みになるのである。

「チリン」

部屋番の掛りの鈴が鳴る。先頭のボーイが出て行く。

「チリン」又鳴ると次のボーイが立上る。

「つぎ！」――「真中の扉」と、バーンス氏が呼ぶ。と、三番目のボーイが、長い大理石の床を滑る様

にして、這入つて来た客の靴を持ちに行く。其の客の白い顔髪や、立派なスコッチの服が、百尺も離れたクライドの馴れない眼にも見える。不思議な、だが神聖な幻よ——チップ!

「つぎ!」バインズ氏は又叫んだ。「九一三號を伺つて呉れ。——屹度、アイス・ウオーターだよ!」そこで第四のボーイが出て行つた。

クライドは、師匠役のヘツグランドの隣りで、全身を眼にし、耳にし、神経にして居た。彼は今や息も出来ない程緊張して、わく／＼して居たが、其れを見たヘツグランドは「何さ、そないに興奮してはいけねえだよ。理由のねえ仕事だから、じつとして居ればいゝだよ。僕も始めの中はさうだつたが、それではいけねえだよ。理由のねえ仕事だよ。何を見ても、平氣な顔さしてるだよ。唯、自分の番にだけ氣をつけてりや好いだから」

「つぎ!」バインズ氏がまた叫んだ。クライドには、ヘツグランドが言ふ事などを考へては居られなかつた。「一五で紙とペンが要りだよ」五番目のボーイが出て行つた。

「紙やペンを持つて来いと言はれたら、何處から取つて来たらいいのです」
クライドは、死にかけて者が聞く様な調子で、彼の師匠に尋ねて見た。

「あの鍵機へ行つてさう言へば渡して呉れるだよ。それから若し、アイス・ウオーターが欲しかつた

ら、俺等が先刻並んだ部屋さ行くだよ。そら、あすこに小せえ扉があるだらう。あの端に行つて、其處の男に十仙白銅を渡すだよ。さうしねえと機嫌が悪いだからな」

「チリン」部屋番の事務員のベルが鳴つた。六番目のボーイが黙つて其の方に立つて行つた。
「それからもう一つ言つとくだが」既に次の番に迫つて居るヘツグランドは、之が最後だと思つて言ひ足した。「若し何かの酒が欲しいと言ふだつたら、グリルに行かなくちやなんねえだ。酒の名を直ぐ言はねえと機嫌が悪いだよ。若し部屋へ案内するだつたら、日覆ひを下して電燈を點けるだよ。食堂からの用事だつたら、給仕長の所に行くだよ」

「つぎ!」彼は立上つて去つた。
今やクライドが一番目だつた。而も四番目までが既に腰かけて、抜目なく邊りを見廻して居た。

「つぎ!」バインズ氏が言つた。クライドが立上つたが、誰も這入つて来た様子はなかつた。何か彼に解らない仕事なのではないだらうか?
「八八二の御用を伺つて」クライドは今日十二階に上る時に乗つた使用人用のエレヴェーターに行かうとしたが、丁度其の時、急用エレベーターから出て来た他のボーイが、彼の誤りを注意して呉れた。
「部屋に行くのかい。それならば、客用エレヴェーターを使ふんだよ。荷物を持つた人は、誰でも其

れを使ふんだから」

クライドは直ぐそのエレヴェーターに乗つて、「八階」と叫んだ。そのエレヴェーターには、彼の他には誰も居なかつたので、其れを扱つて居る黒奴のボーイが、直ぐ彼に話し掛けた。

「お前さん、新來だね。之まで見た事がねえだからな」

「うむ、這入つた計りだよ」とクライドは答へた。

「此處は悪くねえ所だよ」と此の若者は、親し氣な調子で説明した。「此の家を悪く言ふ人は何處にも居ないよ。八階だと言つたね」

エレヴェーターが留ると、クライドは外に出た。すつかり興奮して、方角を聞くのを忘れた彼は、そこで、部屋の番號を探し始めたが、直ぐに自分が間違つた廊下に居る事に氣付いた。彼の足の下には軟かい蔦色の敷物があつた。穩かなクリーム色の壁。天井の雪の様に白い丸電燈——總てが殆んど、信じがたい完全と、社會的優越との一部分に思へた。

やがて八八二を探し當ると、彼は畏る畏る扉を叩いた。開かれた扉の中に、青と白との斑のコンビネーションを着た、頑丈らしい身體の一部分と、丸い緒ら顔の半分とが見えた。

「此處に一弗札があるからね」と、肥つた赤い手が紙幣を突出し乍ら言つた。「之を持つて雜貨店へ行

つて、靴下止めを一つ買つて來て呉れないか。——ポストン靴下止。絹だよ。——急いでね」

「かしこまりました」と答へてクライドは其の札を取つた。扉がしまると、彼は既にエレヴェーターの方に走り出して居たが、雜貨店とは何だらうと考へ始めて居た。彼は既に十七歳であつたが、其れは始めての言葉だつた。そんな言葉は之までに聞いた事もなければ、眼についた事もなかつた。其の人が若し小間物屋と言つたのであるなら、彼は直ぐ氣がついたに違ひなかつたが、雜貨店と言はれたので解らなくなつたのだつた。冷たい汗が彼の額に浮んで來た。彼の膝は震へ出した。畜生！ どうしたらいゝだらう。誰かに、ヘツブランドにでも、聞いて見たものだらうか。それとも——

彼はエレヴェーターの鎖を押した。車が降りて來始めた。雜貨店！ 雜貨店！ 突然、或る分別が湧いた。無論、雜貨店の意味は解らなかつたが、何れにしてもその客は、絹のポストン靴下止を欲しがつてゐるのだ。絹のポストン靴下止なら、勿論それを賣る店へ行けばいいのだ。つまり小間物屋ではないか。小間物屋に行けばいいのだ。そこで、エレヴェーターを降り乍ら、掛りの別の黒奴に「何處か此の近くに小間物屋はないかい」と聞いて見た。

「此の家の南廊下の外にあるよ」と黒奴が答へたので、クライドは安心して、其處に走つて行つた。然し自分のきつちりした制服や、妙な形の帽子の事を考へると、一寸恥しい氣がした。其の小さい帽

子が頭から落ちさうな気がして仕方がないのだつた。彼は急いで小間物屋に行つて叫んだ。「絹のボストン靴下止を下さい」

「へえ、へえ、かしこまりました」と金縁眼鏡を掛けた、緒ら顔の、禿頭の、口の軽さうな男が答へた。「ホテルのお客様のでせうな。それなら七十五仙です。それから、この十仙を君に」品物を包み乍ら、其の札を計算箱に落して言つた。「あなた方、ボーイさんに對しては、私は何時もかうしたいんですよ、何しろ、いゝお得意さんですからね」

クライドは何の事だか解らない乍らにその十仙白銅と、紙包みとを取上げた。靴下止めは七十五仙に違ひない。だから二十五仙だけ、あの客に返せばいいのだ。すると此の十仙は自分の物だ。而かも其の上に、未だチップを呉れるつもりなのだらうか。

彼は急いでホテルに引返して、エレヴェーターの所へ行つた。何處かのオーケストラの響が、喜ばし氣に廊下に響き渡つて居た。往來でも、何處でも見られない様な美しい着物を着た人達が、あちらこちらに動いて居た。

エレヴェーターの扉があいた。色々な客が這入つた。クライドと今一人のボーイも其の中に這入つた。六階で、そのボーイは出て行つた。八階で、クライドと一人の老貴婦人とが、エレヴェーターを

出た。彼は急いで自分の客の扉口に行つて、それを叩いた。扉を開いた男の着衣は、前よりも進んで居た。彼はズボンを穿いて、顔を剃つて居た。

「買つて来たか」

「はア」クライドは答へて、其の包みと釣銭とを渡した。「七十五仙ださうでございます」

「畜生ッ、取りやがるな。尤も、釣銭はお前さんの物だから、どつちにしても同じだが」言ひ乍ら、客は、其の二十五仙を渡して、扉を閉ぢた。一瞬間、クライドはほんやりと、其處に佇んで居た。「三十五仙だよ。三十五仙だよ」然かも、これッほちのお使ひではないか？ しかし、之が普通なのか知ら？ そんな事はない。こんな事がしよつちうある筈がない。

軟かい絨毯の上に立盡した彼は、ポケットの中のその金を握り乍ら、大きい聲で叫ぶか笑ふかし出しさうな氣がした。だつて、あれッほちの用事で、而かも三十五仙ではないか。自分は何もしないのに、十仙の上にもまた二十五仙が来るのだから。

彼がエレヴェーターから出ると、其處には未だ恍惚とさせる音楽、身震いをさせる美服があつた。彼は直ぐ以前のベンチに歸つて行つた。

その次に呼ばれた時、彼は百姓らしい老夫婦の三つの鞆と二本の日傘とを運ばねばならなかつた。

此の夫婦は、五階に、客間と寢室と浴室とを取つたのだが、其の部屋に行く途中は、しげく、と彼の顔を眺めたゞけで、何も言はなかつた。しかし其の部屋に這入つて、電燈を点けたり、日覆ひを下したり、鞆を網棚に置いたりして仕舞ふと、此の中年のいくらか醜男の亭主は——思ひ切り嚴つて髭男だつたが——更にしげくと彼の顔を見た末に言つた。「成程、仲々快活さうな好いボーイだ。」

お前さんの様なボーイは他には餘りないからな」

「しかし、私は、若い者がホテルで働くのには餘り感心しませんね」忙し気に隣りの部屋などを見廻つて居た妻君が、男の胸の所で喋り出した。「私だつたら、家のどの子にも、こんな處では働かせませんね」

「然し、若い」と亭主は外套を脱いで、ジボンのポケットを探し乍ら言つた。「すまないが、下へ行つて、此處にある夕刊三四枚と、アイスウォーターを一杯取つて来て呉れないか。歸つて来たなら十五仙やるからね」

「此のホテルは、オマハのホテルよりはよござんすですね、父さん。絨毯だつて、窓掛けだつて、みんな上等ですよ」妻君が言つた。

新米のクライドも、之には密かに笑はないでは居られなかつたが、上面だけはお面の様に嚴肅にし

て、其の金を取つて出て行つた。暫くして彼は、アイスウォーターと、ありつた夕刊を持つて歸つて行き、突ひ乍ら其の十五仙を貰つて、其處を出た。

しかしこれは其の晩の唯の手始めに過ぎなかつた。もとのベンチに歸つて来て、坐つたか坐らないかに、彼はまた五二九號室に呼ばれた。それは唯、バーに行つてジンジャーエールと炭酸水を持つて来るだけの用事だつたが、其の部屋にはすつきりした着物を着た若い男女の一群が、笑ひさゝめいて居た。彼に用事を言ひ付ける時、其の中の一人が僅か計り扉を開けたゞけだつたが、暖炉の上の鏡で中の様子が知れた。白衣、白帽の美しい娘が、椅子の端に坐つて居る側に、一人の青年が凭り掛る様にして腕を廻して居る様子などが鏡に寫つてゐた。

クライドは、素知らぬ顔で其れを見詰めて居た。彼にとつて、それは天國の門を覗いて居る様なものだつた。此處には、彼といくらも違はない若い男女が、笑ひさゝめき乍ら飲んで居る。アイスクリームソーダなどと言つた様な飲み物ではない。彼の両親がいつでも人を破滅に導く物だとして反對して居る種類の飲物である。

彼は急いでバーに行つて、其の飲物と受取書とを持って来た。支拂は二十五仙のチップを入れて一弗半であつた。彼はもう一度、中の様子を瞥見した。一組の男女が、他の連中の歌や口笛に合はせて

ダンスを踊つて居た。

しかしかうして色々な部屋に行つて、色々な人を見るのと共に、更に彼に興味があつたのは、階下の廊下で動いて居るパノラマ——色々な掛りの事務員の性格であつた。其處には、客室掛り、鍵掛りの郵便掛り、出納掛り等の事務員が居たし、あちらこちらに切花店、新聞賣り、タバコ屋、電信局、タクシー掛り等の店があつて、それらに其の場の空気で一ぱいの奇妙な人物が配してあつた。しかも其處には、流行で身を固めたきらびやかな老若男女が、満足しきつた様子でうよくして居る。食事時になると、無数の自動車が集つて来る。ボーイ達は彼等の外套や毛皮を持つて、それら自動車へ運んだり、食堂へ持つて行つたり、エレヴェーターに持込んだりしなければならぬのだが、それは何と言ふ厚ほつたい布地だらう。成程、之が金持と言ふものなのだらう。それは何でも出来ると言ふ事だ。他人に傳づかせると言ふ事だ。かうした總ての贅澤を言ふ事だ。好き勝手に何でも振舞へると言ふ事だ。

七

かうして、いろ／＼な影響が、一時にクライドに働きかけることになつた。それは彼の成長の助け

にもなつたが、また、害にもなつた。殊に、その贅澤さときらびやかさとで、アメリカ中部随一と言はれるこのグリーン・デビッドソンの如きは、クライドの性格から言つて、最も危険なところであつた。深々としたクシヨンと、暗い着色電燈とのその喫茶室は、達ひ引きには持つて来いの場所だつた。それは無経験なおほこ娘を、その贅澤さで引きつけるばかりではない。相當に経験のある、多少色香の秘めかけた女たちにも、その薄暗さを利用させた。無論、さまざまな年齢、地位の野心家の男たちも、一日に一度は必ず現はれて、地廻りだとか、金持ちだとか、趣味があるとか、面白いとかと言ふ評判を取らうとするのだつた。

さうしたさまざまな現象を、クライドは、同じベンチに待つて居るボーイたちから、毎日のやうに教へられたが、或る日には、彼等ボーイたちを監禁して、或る不法な關係をつけやうとする不道德的な變態的な男たちの話を聞いた。それを聞いた時、クライドには、初め、何のことだか解らなかつた。考へたゞけで、氣持が悪くなつた。而もあるボーイたちは、少くともその中の或る一人は、「それにかつた」と言ふ話だつた。

實際、食堂や客室内での話は兎も角として、廊下やグリルで行はれて居るおしやべりを聞いて居る限り、無経験で無分別な少年たちが、多少金や地位を持つて居る人の人生の主要な仕事を、観劇や、

野球見物や、ダンスや、自動車乗りや、宴会や、旅行やだと思ふのに無理はなかつた。而も、これ迄
娯楽だとか趣味だとかの素養をまるで持たないかうしたボーイたちは、クライド同様に、彼等の目に
觸れるもの、價値を徒に誇張して考へるばかりでなく、自分たちにもすぐそれが出来るやうに考へる
のである。一方では無一物の人間もあるのに、他方でかうした金を持つて居る彼等は、一體誰である
のか？ かうした贅澤をするために、彼等は何をして來たのか？ かうした成功者は、彼等貧乏人と
どんなに違つて居るのか？ それはクライドには解らなかつた。しかも、かうした考へだけが、ボー
イたちの頭に閃き過ぎるのだつた。

同時になほ驚くべきことだが、或る種の婦人や娘たちは、財産は持ちながら、社會的環境に抑壓
されて居るために、かうした場所にまで浸入して來て、金や手管を使つて、幾らか面白さうなかうし
た若者を口説き落す——と言ふやうなことも、書き加へて置かなければならない。

かうして、彼がこのホテルに勤め出してからすぐ翌日の午後だつた。彼がベンチに腰かけて居ると、
すつかり毛皮につままれた一人の金髪の三十女が、小犬を抱いてそこに出來た。と、彼の隣りに坐
つて居るラツタアと言ふボーイが、先づ彼を肘でつつづいてから、目顔でその女を指して囁いた。
「ね、見給へ。あいつ、とてもすばしいんだぜ。今度ひまの時に話してやるがね。ふん、とても、

凄え女だぜ」

「どうしたんだい？」

烈しい好奇心で、クライドは聞いた。彼には、その女が、すばらしく美しいものに思へたからだつ
た。

「なアに、僕が此處に來てからだけで、もう八人の違つた男としけ込みやがつたと言ふだけの話さ。

ドイルの奴も、しばらく、あいつのものになつてやがつたが、今ではまた變つてるんだ」

ドイルと言ふのは、チエスターフィールド型のすばらしい美男ボーイであることを、クライドもすで
に知つてゐた。

「本當かい？」

そんな幸福が、彼にも來るのだらうかと、驚き怪しみながら、クライドは聞いた。

「本當だとも、あの女なぞ、まるで鳥のやうなものさ。決して落ち着かないからね。何でも、御亭主
と言ふのが、このカンサスの何處かに大きな材木屋をやつてるんださうだが、今はもう一緒に住んで
るないんだつて。あの女のお氣に入りの女中を一人、六階に連れて來てるんだが、あの女はその部屋
に殆んどゐないさうだよ」

このラッタラアは、背の低い、ぐんぐんした青年だったが、ひどく愛嬌のある、もの柔しい男だったので、クライドはすぐ好きになつた。ラッタラアもまた、クライドの無邪氣でおほこらしいところに惹きつけられて、何かと彼に親切にしてやらうと思つて居るのだつた。

やがてその會話が用事のために遮られて、それっきりその女に就ては聞かなかつたが、しかしそのクライドに及ぼした結果は大きかつた。その女は器量もよかつたし、身なりもすばらしかつたし、肌も綺麗だし、眼も美しかつた。あんなに美しい女に、ラッタラアの言ふやうなことがあるのだからか？ 彼は坐つてその女を見て居るうちに、かつて思ひもそめなかつたそのまほろしに、髪の毛の根元まで熱つて來る氣がした。

さて、かうしたボーイたちの性質や哲學はと言ふと——小男のキンセルラは、少しばかり氣が利かないが、顔も綺麗だし、男らしくもあるし、賭博にかけては魔法使ひだと言ふ噂だつた。さう言ふ時には三日間もそれに没頭して、相棒のヘッグランドに指圖をして居ると言ふ話だつた。彼はヘッグランドに比べれば幾らかやさしくて、口數も多かつたが、しかしクライドの見るところでは、ラッタラアのやうな親切心はないらしかつた。

例のドイル——これは最初からクライドの興味を引いた人物で、その顔の美しさや、姿のよさや、

動作の優雅さや、聲の美しさには、クライドも少からず嫉妬を感じた。彼があちこちと動いて居る様子には、誰でも惚れ惚れとさせるやうなところがあるので、帳場の中に居る事務員ばかりでなく、外から來た客までが、何かと彼に話しかけるのであつた。その靴やカラアの綺麗さばかりとして居るのは勿論、頭は流行通り刈り込んで、巧くなでつけて居るし、どう見ても活動俳優そっくりなのだ。その褐色の着物や、それにしつくり合つた帽子、タイ、靴下——その服装の好みは、最初から、クライドを惹きつけてしまつた。クライドは、自分もあゝ言ふ褐色の外套や褐色の帽子を着なければならぬと思つた。無論、服も、あんな風に仕立てなければならぬ。

しかし、クライドに對して少からず重大な、しかし多少變つた方面の影響を與へたものは、例の最初の師匠役であるヘッグランドであつた。彼は他のボーイ達に比べて経験者でもあり、年長者でもあつたし、更に、ホテルの仕事以外には何に對しても、快活で、向ふ見すであつた爲めに、何かにつけて、他のボーイに感化を及ぼして居た。ヘッグランドは、他のボーイの様な教育も容貌も持つて居なかつたが、その快活な爆發的な性質に加へて、萬事が自由で勇敢で實行的であつた點で、ドイルやラッタラアやキンセルラを押へて居た。其の實行力や勇敢さが、時には理性の域を全く越えることがあつたが、其處にまたクライドを烈しく惹きつける點があつたのである。彼がクライドに話した所に

依ると、彼は或る瑞典人のパン焼職人の息子であつたが、ジャーシー市に來た時、父親が母親を乗せて逃出して以來、彼等は自活しなければならぬのであつた。その結果として、彼は妹のマルサと同様に、何の教育も受けず、何の社會的經驗も得られないで、十四歳の時ジャーシーを去つて以來、こんな仕事をして居るのだつた。あらゆる幸福に對して、不健全な程の渴望を持つて居る彼は、それを得る爲めにあらゆる冒險を試みる。而かも、クライドと違つて、その結果に對して何の怖れも抱かないのである。ヘッグランドにはまた、スパーサーと言ふ、いくらか年長の友人があつた。彼は此のカーサスの町で、或る富豪の運轉手をして居る男だが、時々、主人の自動車を盗み出して、あちこちへヘッグランドを連れ廻るのを常として居た。其れは随分亂暴な不忠實な話だつたが、ヘッグランドは常にそれを徳として居た。

ドイル程好男子でない彼には、娘達の關心を得ることは、さう容易でなかつたし、例ひ成功をして、大して素晴らしい收穫がある譯でもなかつたが、彼はいつも得々としてさうした交渉を自慢するのが常だつた。無經驗なクライドは、それを信するより他になかつたが、それがまた、ヘッグランドをして、殆んど最初からクライドを好きにならせる原因になつた。

彼はベンチに並んで居るクライドを見ては、絶えず色々な事を教へて呉れた。彼の話に依ると、此

のカーサス市は、やり方次第では、非常に面白い土地だと言ふのだつた。此の町に來るまで、彼はバツファロウ、クリーブランド、デトロイト、セントルイス等、色々な町で働いて來たが、何處の町でも、此の町程に好い事はなかつた。彼は、皿洗ひ、自動車掃除夫、鉛管人夫等の仕事を、次々とやつた末に、バツファロウでホテルの仕事に入つたのだつたが、最後に、此の町に居る、或る若者に奨められて、此のカーサス市に來たのだつた。而かも、來て見ると――

「ねえ、此のホテル位チップの取れるホテルはめつたにありはしねえだよ。それに、此處の人はみんな好い人だでな。こつちがするだけの事は、向ふもして呉れるだからな。僕は之でもう一年以上にならぬが、未だに何の不平もないだよ。あのスクワイヤだつて、こつちさへちやんとしとれば、悪くはねえだからな。あれで随分難し屋だが、あいつも商賣だから仕様がねえだよ。あれで、理窟に合はねえ事は言はねえだからな。それに、他の連中だつて、みんな悪くねえだし、仕事せえ濟めば後はこつちの時間だし、おいらの仲間だつて、みんな愉快な野郎だしよ、本當にけちな偶人棒などは一人も居ねえだからな。おいらが何かやらかさうと言ふ時には、みんな一人残らず出て來るだし、何か起つたつて、別にぐづぐづ言ふ者もねえしよ。僕はもうみんな知つとるんだ」

その話に依ると、かうした若者達は皆親友であるらしかつた。唯、ドイルだけがいくらか仲間外れ

であるらしかったが、誰も「あいつには澤山女があるんだから」と言つて許してゐた。彼等は時々、一緒にダンスホールだの、料理屋だの、博奕場だのに行くらしかつたし、ケート・スイニーと言ふ娘達を置いた或る歡樂境等にも出掛けるらしかつた。クライドは、かつて聞いた事もないさうした場所の事を耳にして、様々に考へもし夢想もし、疑ひもしたのであつた。彼は、自分にもそんな事が出来るのだと思ふだけで、怖くもあれば嬉しくもあつた。

いま一人のトーマス・ラッタアは、誰の眼にも一眼見たゞけで、害のないお人好しである事が解る様な若者だつた。彼は中肉中脊の、髪は黒い、肌の滑らかな男であつて、其の眼は水の様に澄んでゐた。彼も矢張りつまらない家の息子で、社會的にも、經濟的にも酷く恵まれない青年であつたが、不思議に誰からも好かれて、色々な相談を持掛けられる程だつた。ウイツチカの生れで、近頃、カンサス市に來た計りだつたが、妹と二人で寡婦の母親を養つて居た。お人好しで親切な母親は、彼等が未だ若い頃に、無情な夫に棄てられたのであつたが、二人の兄妹は心から彼女を愛して居た。彼等には、時に食べる物もない事があつた。家賃が拂へなくて追出された事も、一度や二度ではなかつた。あちこちの小學校に通つたが、何處でも長續きはしなかつた。とう／＼、十四歳の時、彼は單身カンサス市に來て、様々な小店で働いた末に、此のグリーン・デビッドソンに這入る事に成功したのであつた。

だが、それと同時に、其の母と妹とを呼寄せたのであつた。

しかし、此のホテルのかうした贅澤さや、かうした若者達の生活にも増して、クライドに深い印象を與へたものは、彼の右のポケットに流れ込んで來る、あの夥しいチップや釣錢であつた。五仙、十仙、二十五仙、五十仙……さうした小錢が、第一日の九時には、既に四弗以上もポケットに溜つて居たし、更に十二時になつて、彼の仕事が終わつた時には、それは既に六弗半を越えて居た。それは、これまでの一週間の収入ではないか。

無論、此の中から一弗だけは、スクワイヤ氏にやらなければならぬが、それでも尙五弗半が残るではないか。而かもそれが一晚の収入である。——さうだ、何と言ふ喜ばしい愉快な仕事だらう。彼には殆んどそれが信じられなかつた。全く夢の様な氣がした。しかし、十二時になると、何處かで銅羅の音が響き渡つた。足音が近づいて、三人のボーイが現はれて來た。一人がバーンスの机につくと他の二人が御用を待つのだ。バーンスの命令で、八人は立つて歩み去つた。廣間に行くと、クライドはスクワイヤ氏に近づいて行つて、一弗の銀貨を渡した。スクワイヤ氏は唯「宜しい」と言つたゞけだつた。他の連中と一緒に更衣室に行つて、着物を變へたクライドは、やがて暗い街路に出て行つたが、彼の胸は、現在の幸福の感じと、將來に對する責任の感じとで、震へてゐた。

とうく、俺はこんな仕事にありつけたのだ。これから毎日これだけの収入があるのだ。家に歸つて行く道すがら、彼が先づ思つた事は、今夜よく眠つて明日また働かねばならぬと言ふ事であつた。しかし、明日は十一時半までにホテルに行けばいゝのだと思つた彼は、ふらくと終夜營業の喫茶店へ這入つて、珈琲とパイとを食べる事にした。彼は明日は、正午から六時まで働けばいゝのだと思つた。それから翌朝の六時まで自由なのだ。而かも、その後でまた金が儲かるのだ。それが皆、勝手に使へるのだ。

八

今のクライドにとつて一番嬉しい事は、その儲けた金の大部分を自分で持つて居られると言ふ事であつた。これまでの彼は、その僅かな収入の少くとも四分の三は家に出さねばならないのであつたが、今彼が一週間に少くとも二十五弗の収入があつて、その上に更に一ヶ月十五弗の報酬と賄とがある事を告げるならば、彼の両親は十弗乃至十二弗の金を彼に拂はせるに違ひなかつた。

しかし、これまで長い間、今少し好い着物を着て、人並みの恰好をつけたいと望んでゐた彼は、今此の機会に於て、出来るだけ早く服装を整へたいと言ふ誘惑に、抵抗する事が出来なかつた。そこで

彼は、自分の母親には、一日一弗のチップしか貰へないと言つて置く事に決心した。そして自分の時間を浪費かす爲めには、勤務時間を長く話す計りでなく、病氣その他の用事で缺勤する他のボーイの代りをするのだと言ひきかせた。彼はまた、此のホテルでは、ホテル外に於ても、相當な服装をする様に、ボーイ達に言ひ付けて居ると説明した。しかし、母親を餘り驚かさなない爲めに、さうした物が總て一時拂ひでなく買へる所がある事も言つて置いた。

疑ひ深くない母は、かうした事を總て信じた。しかしそれだけではなかつた。彼はかうした若者達との毎日の接觸に依つて、かつて知らなかつた様々な形式の道樂や罪惡に就いて知る様になつた。ヘツグランの話を依ると、彼等の大部分も、月給日の夜には、世間並みの道樂に出掛けるのだと云ふことだつた。彼等はその時の懐工合に従つて、相當有名な、しかし、いかゞはしい終夜食堂の二軒の中のどちらかに行つた。彼等は先づ其の家で飲んだり食つたりした後、下町の或るけばくしいダンスホールに行くか、さもなければ、或る有名な女郎屋に行く。それは普通、下宿屋の様に見せかけて居るが、彼等の自慢する所に依れば、彼等程度の金があれば、「どんな女でも買へる」と言ふ家だつた。無論かうした家では、かうした無知な、自由な、陽氣な、美しい若者達を、其の經濟的理由の爲めに大歓迎するのである。

享樂に渴いて居るクライドは、かうした物語りに對して、最初から熱心に聞耳を立てた。無論彼はかうした享樂を承認して居るわけではなかつた。事實、最初の中は、かうした總てが餘りに遠く彼の教養とかけ離れて居る爲めに、不愉快な氣持さへした程であつた。しかし同時に、餘りにも烈しいかうした變り方は、また彼をして、様々な空想の中に、それらを渴望させもした。彼はその頭で否認して居る時にも、尙同情と渴望とを以つて耳を傾けた。而かも、かうした彼の同情と渴望とを見て取つた彼等は、次々に彼を誘つて、見世物だの、料理屋だの、彼等の家庭の博奕だの、いかゞはしい家だのに誘ひ入れ様とし始めた。最初、クライドは、それを拒むつもりであつたが、ヘッグランドやラッタラア等との親しみが次第に深まるにつれて、とう／＼一度、彼等の所謂「憂を晴し」に出かける事に決心したのであつた。

「クライド君、明日の晩、僕達の今月の憂を晴しが、例のフリッセルである筈なんだがね。君、出て見ないかい。君は未だ、らう」

或る日、ラッタラアがクライドにさう言つた。

その頃のクライドは、もう最初の様なむつそりした青年ではなかつた。彼は注意深い研究の結果、何もかもドイルの眞似をして、新しい鳶色の着物、帽子、外套、靴下、ピン、靴でその身を裝つて居

たからである。彼は見違へる程好い男になつて居た。彼の両親ばかりでなく、弟妹達までが、其の變り方に少からず驚いた程だつた。

どうしてクライドはこんなにも早く、こんな着物が着れたのだらう。一體それはいくらか、つたのだらう。先々の収入を抵當にでも入れたのだらうか。だが、これからだつて、金があるだらうし、他の子供達だつて欲しい物があるだらうのに。あんな場所で、あんなに遅くまで働くのに、あれッほちしか収入がないなんて、一體どうした事なのだらう。

それに對して、彼は、大して烈しい働きではないと答へて置いた。彼の着物だつて、決してよ過ぎる譯ではないし、金だつてそんなに使つてる譯ではない。それに、此の着物は、長い間に拂ふ事になつて居るのだ。

しかし、今、此の晩餐會の事は、流石の彼にも別個の問題になつて來た。其の會が非常に遅くなつた時、彼はどうして母親に説明したらいい、だらう。ラッタラアの話では、それは三時四時までも續くらしい。無論、好きな時に歸つていゝとは言つたけれ共、そんな事がどうして出來よう。彼等は皆、何も考へないで酒を飲む。だが、少し許りの酒を飲むのに、何處に危険があるのだらう。のみならず飲みたくなければ、飲まなければ好いではないか。自分が行かう。そして、若し何か家で言はれたら

仕事が遅くなつたのだと言はう。たまに歸りが遅くなる事が何だ。俺はもう大人ではないか。家中の誰よりも金を儲けて居るのではないか。而かも尙、自分の勝手には振舞へないのだからうか。今や彼は、個人的自由の喜びを感じ始めて居た。かくはしい夢の香りを嗅ぎ始めて居たのだ。母親の教へも、今はもう彼を引返へさせるに足りないであらう。

九

かうしてクライドの出席すべき愉快な晩餐がやつて來た。それはラツタラアが言つた様に、あのフリツセルで行はれたが、かうしてみんなと親しい仲間になれると言ふ事が、クライドを此の上もなく嬉しくさせた。二三週間前まで、いつでも一人ほつちで、一人の友達さへなかつた彼が、今や、此の愉快な仲間と共に、此の立派な晩餐を共にし様として居るのである。

若者たちのまほろしには、フリツセルの店は、實際以上にすばらしいものに見えてゐた。それは舊いアメリカ式の一寸した小料理屋で、その壁には、色々な役者や女優のサイン入りの寫眞や、芝居の繪番付等が貼り付けてあつた。これでも昔は、食べ物美味しくと言ふ理由で、通りすがりの役者だの、政治家だの、實業家だのが來たものであつたが、今はもう、その噂だけで、客を集めてる

に過ぎない。

かうしたボーイ達も、無論その噂を聞いて、此處を會場と決めたのであつたが、此處ではどんな食事でも一皿が六十仙から一弗までかゝつた。カフェやお茶も、一杯賣りはしなかつた。無論、酒類は望みのまゝだつた。廣間に向つて左手に、天井の低い暗い部屋があつて、男だけが坐つて煙草をすつたり、新聞を讀んだりする事になつて居たが、それが此の若者達の御氣に入りだつた。彼等は此處で食べて居ると、何となく大人になり、偉くなつた氣がするのだつた。

その日正午に給金を貰つて、六時に勤め仕舞ひになつた彼等は、その儘、ホテルの外の藥屋の角で勢揃ひして、よい機嫌で繰込んで行つた。それはヘツグランド、ラツタラア、ボールシール、ヒツグビ、キンセルラ、クライドの六人であつた。

「おい、あのセントルイスの客の、昨日の詐欺の事を聞いたけえ」歩き出すとヘツグランドが誰にともなく言ひ出した。

「此の間の土曜日に、セントルイスから電報を打つて、夫婦用の寢室と浴室まで取つた上に、花まで注文した男があるんだ。來て見ると夫婦とは言ふものゝ、相手は娘なのさ。とても別嬪の娘なのよ。ところが、三日計り経つた水曜日に、男の奴が降りて來てよ妻君がセントルイスへ歸るだから、も

つと小せえ部屋に變へろと言ふだよ。そして汽車の時間が来るまで、二人の荷物を新しい部屋の方へ移して置けと言ふではねえか。無論、荷物は女の物計りで男の物は一つもねえのよ。而かも女は立たねえ計りぢやねえ。部屋を變つた事さへ知らねえだよ。知つた時にはね、早や男が居ねえでねえか。そこでホテルでも慌て、女を押へたり、荷物を押へたりしたけれど、女は唯泣く計りで、あちこちの友達に電報を打つたりしてゐるが、さて、あれがどうなるだか。何しろまる三日、男の奴に飲み食ひされたのだし、その上に花代はあるしよ、可哀想な事をしやがるだよ」

「うん、そいつは僕も知つてる」と、ボール・シールは叫んだ。「僕も一度酒を持って行つた事があるが、道理で、どうも變な奴だと思つたよ。變にべら／＼と、大きな聲で話す奴だつたからな。しかも其の時のチップがたつた十仙さ」

「僕も覚えてゐる」とラッタラアも叫んだ。「僕もあいつに、月曜日のシカゴ新聞を全部買はされて、それでたつた十仙よ。僕もあいつはブラフだと思つたよ」

「全くあんな奴には引掛かるだよ。みんな今探して居るだが、どうなるだかな」

「しかし、あの娘は未だ十八九にしか見えなかつたぜ」と今迄黙つてゐたキンセルラが口を挟んだ。

「クライド、君はあの二人を見たかい」クライドを仲間に入れ様として、ラッタラアが尋ねた。

「いや、見なかつたね。覚えがないよ」

「ほう。あれを見落す様では仕様ががないな。黒い長いコートを着て、大きな山高帽を目の邊まで下して、玉蟲色のスバツツをはいてた男だよ。僕は初め、あの男が杖を持つて歩いてる様子を見た時には、イギリスの侯爵か何かだと思つた程だつた。何しろ、偉くでつかい聲で勝手な事を言つて注文しやがるんだからな」

やがて彼等は二三の町角を曲つてから、フリツセルの前に出た。明るい電燈が、その邊りの陶器や銀器や人々の顔を照して居る中に、食事客のざわめきが響いてゐた。その光景が、先づクライドの心を奪つた。彼は會つて、グリーン・デビッドソンの他にかうした場所に來た事はなかつた。而かも仲間には、こんなにも賢い、こんなにも經驗のある若者達ではないか。

彼等は革の壁掛けに面した一隅のテーブルの方へ行つた。ラッタラアやヘッグランドやキンセルラを認めた給仕長が、直ぐ二つのテーブルを接合させてから、バターだの、パンだの、コップだのを持って來た。彼等はそれ／＼に座についた。クライドが、ラッタラアやヒッグビーと並んで、壁の方に腰をかけると、ヘッグランドとキンセルラとシールとがその向ひに坐つた。

「さあ、僕は先づ例のマンハッタンとしようかな」ヘッグランドが一廉の人物にでもなつたかの様に

邊りを見廻し乍ら言つた。

するとキンセルラも、今の光榮を身にしみて感じて居る調子で、上衣の袖をちよいと引上げてから、酒類の品書に眼を通し始めた。

「さうだね、僕は先づドライマチネーから始めるとしよう」

「僕はスコッチと炭酸水だ」ポールシールが悠揚と食事の品書を調べ乍ら言つた。

「僕は今夜はコクテルは御免だ。今夜は餘り飲まないつもりだからね。まア、ライン葡萄酒とセルツアとを呉れ結へ」

「おい、冗談ぢやねえぜ。お前がライン葡萄酒だつて？ どうしたんだい。今夜は愉快にやるんだと言つてたぢやねえか」とヘッグランドが叫んだ。

「無論やるさ。然し、愉快にやるからと言つて、此處にある物をみんな飲まなければならぬわけもないだらう。僕は今夜は酔ひたくないのだ。朝になつて、階下から呼び降すのなんざア、よして呉れよ。此の前の時にはまるで正體もなくなつちやつたからな」

「本當だ」とキンセルラが叫んだ。「僕も今夜は、正體がなくなる程には飲まないよ」と言つて、今から心配するがものはないが」

「ヒッグビーはどうするんだい？」とヘッグランドが言つた。

「マンハッタンを言つてるところだ」答へてから、彼は給仕の顔を見て、「どうしたい、デニス。例の景氣は」

「いや、文句も言へねえ。此頃はもう散々でさあね。どうです、ホテルの方では」

「景氣がいよ」と、ヒッグビーは品書を見乍ら嬉しうに言つた。

「それで、グリフィスは何を飲んだよ」幹事役のヘッグランドが尋ねた。

「誰？ 僕——あ、僕は」叫ぶと共に、クライドは少からず狼狽した。彼は今日まで、いや此の瞬間まで、曾つて珈琲やアイスクリームソーダ以上の強い飲物を飲んだ事がなかつたからである。彼は、かうして若者達が、如何にも愉快けにコクテルやウイスキーを注文するのを見て、少からずたじろがざるを得なかつた。彼にはそんな事はとても出来さうになかつた。しかし彼が若し何も飲まないとしたら、彼等は何と考へるだらう。今日までの彼は、出来るだけ世間人らしく見せかけて来たからである。而かも今、彼の脊後には、多年教へ込まれて来た飲酒への驚怖があつた。彼は既に多年の間、さうした謂れない教訓に對して、密かに輕蔑を感じて居たのだつたが、いざとなると、しかし、なほ躊躇する傾きがあつた。酒は飲む可きだらうか、それとも飲む可からざるものだらうか？

これだけの事を一瞬間に考へた彼は、一寸躊躇した後に言つた。

「あゝ、僕——僕もライン葡萄酒とセルツァにしよう」

かう言ふのが一番安全だと彼には思へた。ライン葡萄酒とセルツァとが、どんなに弱いものであるかは、既にヘッグランドや他の連中の話で解つてゐたからである。ラッタラアが既にそれを飲んで居る事——それも彼の撰擇の滑稽さを緩和した。

「おい、おい、聞いたかい？」ヘッグランドは、しかし大袈裟に叫んだ。「クライドも矢張り、ライン葡萄酒とセルツァだつてさ。此の調子では、今夜は八時半にはお開きになるぜ。もつとも、それだけでは済まねえだから、それでいゝやうなものだが」

すると、見掛けに依らず騒ぎ屋のヒツグビーがラッタラアに向つて、「全く、どうしたんだい、トム。今からライン葡萄酒なんて。今夜はもう遊ばないつもりかい？」

「いや、實は此の前例の家へ行つた時、僕は四十弗計り持つて居たのだが、翌朝になると、一文もないのだよ。だから今夜は、どんな事をしやがるんだか見て、やらうと思ふんだ」

「例の家」とクライドは考へて居た。無論、これは此處で飲んだり食つたりした後、彼等が行くつもりの家には違ひない。勿論悪い家だ。悪い女の居る家だ。無論彼も一緒に行くつもりにされて居るのだ

が、併し行けるだらうか——行けるだらうか。

生れて初めて、彼は、此の蠱惑的な神祕の前にたじろいで居る自分を見た。女と言ふ者について、幾度となく考へて來た彼ではあつたが、未だ曾つて實際の女に接觸した事はなかつたからである。

突然、彼は、或る冷然とした戦きが全身に走るのを感じた。顔や手が段々熱くなつて汗ばんで來た。

と、頬や額が赤くなつた。それが彼にも感じられた。變にそのかされる様な、だが困つた事の様な氣持が彼の意識を掠め過ぎた。或る歡樂の繪が頭に浮んだ。彼は急いでそれを頭から追出さうとしたが無駄だつた。様々な光景が次々と頭に押しかけて來る。それが嬉しい様でもあり、また怖い様でもあつた。畜生！俺にはその勇氣がないのだらうか。他の連中はみんな平氣ではしやいで居るではないか。だが、此の事を若し母が知つたらどう思ふだらうか。あゝ母よ！ 彼は此の際、父や母の事を考へまいとした。そして、思ひきつて頭の中から追出した。

「うむ、キンセルラ」ヒツグビーが話し掛けた。「君は、あの大手通りの家に居た赤毛の女の事を覚えてるか。シカゴに墮落しようなんて言はれてたぢやないか」

「覚えてなくつてさ」キンセルラは、持つて來た計りのマルチニを取上げながら答へた。「あいつは僕に、ホテルをよして別の仕事を始めようとまで言ひやがつたよ。(さうすればあんた、遊んでても食は

して上げるわよ」と抜かしやがつたからな」

「うむ、遊んで食へる方法がたつた一つあるね」とラッタラアが言った。

給仕がクライドの側にライン葡萄酒とセルツアとを持って来た。飲んで見ると、ひどく軟らかで口當りがよかつたので、彼は一度に飲み乾してしまつた。酒を飲んだ氣なぞは一向しなかつた。

「見事、見事」とキンセルラが勵ますやうな調子で言つた。「君は好きらしいね」

「うむ、悪くないな」とクライドが答へた。その様子を見てヘッグランドも、此の新米を煽てねばならないと思つて「おい、ジェリー、もう一杯、大きい奴で持つて来て呉れ」

かうして饗宴が進んで行つた。そして十一時近くなると、もうみんなの話の種も盡きたらしかつた。

その間、クライドには、ゆつくりとかうした若者達の事を考へる餘裕があつたが、その結果として、彼は自分も思つた程馬鹿ではない事、少くとも頭だけはよさうだと考へないでは居られなかつた。

一體此の連中は何を考へ、何を望んで居るのだらう。ヘッグランドは唯、賑やかだと言ふだけで、直ぐに丸め込まれて仕舞ふ馬鹿者だ。ヒッグビーやキンセルラは、成程面白い青年ではあるが、それだけの話だ。自動車の事を多少知つて居るとか、博奕が多少巧いとかに過ぎないのだ。ラッタラアやシルに至つては、唯ホテルボーイで満足して居るだけの話で、そんな事は、彼には考へる事さへ出来

なかつた。

しかし、こんな事を考へ乍らも、彼はまたこれからの冒険について、ぐづぐづと考へ續けて居た。

此處を出た後で自分だけ歸らうかしら。それとも、一緒に暫く歩いてから、そつと逃出して歸らうかしら。彼は既にかうした場所にある、あの恐ろしい病氣の事を聞いて居たからである。さうした賤む可き所業の爲めに、悲惨な死を遂げる者さへあると言ふではないか、彼は、自分の母が、極く抽象的にではあるが、それについて演説してゐるのを聞いた事がある。しかも此處では、そんな事にはまるで無頓着に、さうした悪所の事を話合つて居る。

事實、ラッタラアは幾度もクライドを肘で突つついて笑ひ乍ら言ふのだ。

「どうしたい、クライド。今夜行くだらう？」

クライドが黙つて考へ込んで居ると、彼はまた言つた。

「あいつらだつて、噛み付くわけぢやないからな」

と、ヘッグランドもラッタラアの言葉を受けて「さうだとも。大丈夫だよ。面倒が起つたつて、俺

達と一緒に居るんだもの」

だがクライドは、段々いらく／＼して來て答へる。「いや、解つてるよ。よして呉れ。君達が僕より物

識りな事は解つてゐるんだから」

すると、ラッタラアはヘッグランドを眼で抑へておいて、クライドに囁やく、「まア、まア、さう怒るなよ。みんな冗談さ」そこでクライドもラッタラアへの親しみから、そんな事を言ふのではなかつたと思ふ。

しかし、とうとう十一時が来ると、既に飲食にも話にも倦きた彼等は、ヘッグランドを先立ちにして此の家を出た。色々と熟慮したり反省したりしなければならぬ、ひそやかな嚴肅な時であるにも拘らず、彼等は唯賑やかに笑ひふざけて歩いて行つた。實際クライドは、彼等が或る思ひ出を話し始めた時には、少からず驚きもし、不愉快にもなつた程だつた。それはベツチナと言ふ、かうした種類の家に行つた時の話らしかつたが、其の時、すつかり酔つ拂つてしまつたヘッグランドは、普通の人はとても出来ない様な亂暴な悪戯を働いて、みんなであやふく拘留されさうになつたと言ふのだつた。その悪戯は、聞いたゞけで氣持が悪くなるやうな種類のものだつた。

「さうく、あの時、二階の女の野郎が、僕が出て行く時、水をぶつ掛けやがつたつけ」とヘッグランドが心から笑ひ乍ら言つた。

「あの時、二階に居た大男の野郎が、門の處まで見に来たぢやないか。きつとあれは、火事が暴動か

が起つたと思ひやがつたんだぜ」とキンセルラも笑つた。

「それからラッタラア、あの時の君と、あの肥つちよのピツギーの事を覚えてるかい」とシールも咽ぶ程に笑ひ乍ら叫んだ。

「あの時、ラッタラアが荷物を脊負つた恰好つたらなかつたぜ。それから、二人が階子段を滑り落ちた恰好もよ」

「ありやみんなヘッグランド、君が悪いんだよ。君さへあんな亂暴をしなければ、僕達は何にも突出される事はなかつたんだ」

「何しろ僕は酔つてたからね。あそこで飲んだ『赤眼』が悪いんだよ」

「あの時、あそこに居たあのテキサスの髭男の事は、君も一生忘れられないだらう。あいつは始めから僕達の味方だつたからね」

「兎に角、あの時往來に投出されたり、檻禁されたりしなかつた事だけは見付けものだよ。實際、えらい晩だつたからね」

話して居る中に、彼等は或る暗い大通りの或る家の前まで行つた。その邊りには、馬車や自動車があちこちにあつて、若い男達の姿もちらほらして居た。その向ふには二人の巡査が呑氣さうに話し乍

ら過ぎて行くのが見えた。無論、何處の窓にも火などはともつて居なかつたが、不思議にも盛り場らしい感じが潜んで居た。舊式の馬車やタクシーが二三臺、カーテンを下してうろ／＼して居るのも見えた。どの家の扉も、ぴしりと閉めてあるが、それが時々開け立てされる。と、内部の強い明りが陰鬱な街路に流れ出して、また消える。この夜、空には無数の星がきらめいて居た。

やがてヘッグランドは、ヒッグビーやシールと一緒に、黙つてこの家の女關に行つて鈴を鳴らした。殆んど同時に扉が開いて、赤い着物の黒奴娘が現れた。

「今晚は、さア、すつとお這入りなさい」

女に言はれると、その儘六人は重い天鵞絨のカーテンを潜つて、廣間の中へ這入つて行つた。気がつくくと、クライドも、様々な裸體畫や壁鏡を掛けた明るいきら／＼した廣間の中へ這入つて居た。其處には厚い赤毛氈を敷きつめて、澤山の金色の椅子があしらつてあり、その後の赤い帳の向ふには、小型ピアノが置いてあつた。しかし例の黒奴娘の他には、客も誰も居ないらしかつた。

「さあ、お掛けにならない？ お樂になさいませよ、今すぐお女將さん呼びますから」

言つて置いて、左手の梯子段を駆け上ると、彼女は呼び始めた。

「マリーさん、サデイさん、キャロリスさん。廣間に若いお客さん達が來ていらつしやいますよ」

丁度その時、後の扉口から四十恰好の脊の高い瘡形の、顔の青い女が出て來た。非常に賢さうな確り者らしい上品な女で、地味な輕衣を纏つて居たが、直ぐに愛嬌笑ひを浮べて、

「おやまア、オスカアさん。あなたでいらつしたの。おや、ポールさんも、デビスさんも。さアどうぞ御遠慮なく。今直ぐフアンニイが參りますよ。何かお飲み物を持つて來ますから。今日はセントジョーから來た黒奴のピアノ弾きを雇つた計りですからね、聞いてやつて下さいな。それはそれは、おつそろしく器用なんですよ」

彼女は元の入口に這入つて、「サム」と呼んだ。

と同時に、様々な年頃の——とは言へ、どれも二十四五以上とは見えない九人の女達が、ひどく嬉しげに笑ひさゝめき乍ら、一方の梯子段から下りて來た。彼等の着物は、クライドが曾つて見た事もないやうな、派手な透通る長衣であつたが、誰一人恥かしさうな顔もして居なかつた。その容貌は種類雑多で、瘡せたのも居れば頑丈さうなものも居り、高いのも居れば低いのも居り、黒いのも居れば白いのも居た。だが、どんな年頃にしても、みんな若さうに造つて居た。彼等は親しげに笑ひ掛け乍ら、

「おや、まア、あなただつたの。一緒にダンスを踊らない」とか、「何かお飲みにならない」とか言つた。

かうした事柄に對して、極端に反對に教育されて來たクライドではあつたが、元々官能的でロマンチックな性質を持つて居る上に、女に對して餓えて居る彼は、かうした光景を見ては、氣持が悪くなるよりも、寧ろ惹きつけられてしまつた。實際それは、どんな愚鈍な非ロマンチックな頭をも惹きつけずには置かないやうな、肉感的な壓力を持つて居た。しかもそれに打勝たうとするのは困難であつた。見ると、その中の一人の黒と赤との着物を着て、赤いリボンを額に巻いた、非常に美しい娘は、ヒッグビーとは既に仲好しであるらしく、何時の間にか向ふの部屋に行つて、ひどく亂暴なピアノの音に合はせてダンスを踊つて居た。

ラッタラアはと見ると、彼も既に椅子に坐つて、其の膝の上に髪の明るい眼の青い、脊の高い女を乗せて居たが、女は煙草を吹かし乍ら、金色の上靴をピアノのメロデーに合はせて居た。それはクライドには、アラデインの場面でも見て居るやうな、驚く可き光景に見えた。ヘッグランドはと言ふと、彼の前には既に一人の獨逸系かスカンヂナビヤ型の肥つた女が、腕を組み、足を開いて立ち乍ら「あんた今夜、あたしの戀人になるでせう」と尋ねて居た。しかし、ヘッグランドが興味もなさう

に頭を振ると、彼女は直ぐにキンセルラの方へ行つた。

しかし、彼がかうして眺めたり考へたりして居る時、どう見ても二十四よりは若くない——しかしクライドにはもつと若く見えたが——非常に人好きのする金髪の娘が、彼の側に腰掛けた。

「踊りにならない？」

彼は神經的に頭を振つた。

「では、教へて上げませうか」

「いや、此處では嫌だよ」

「だつて、やさしいのよ。踊りませう」

彼はかうして親し氣にして來る彼女に、嬉しさを感じたが、しかし踊る氣はなかつた。

「では、何かお飲みになる？」

「あゝ、どうぞ」

彼は敢然として承知した。女が例の黒奴娘に合圖すると、直ぐに小さいテーブルが運ばれて、その上にウイスキーと炭酸水とがのせられた。それを見てクライドは、口も利けない程驚いてしまつた。彼は今、ポケットに四十弗計り持つて居た。しかも、話に依ると、此處では一杯三弗以上を拂はねば

ならない筈であつた。かうした女の爲めに、こんな金を拂はなければならぬとは！ しかも、彼の母や妹や弟は、家に居て、食ふや食はずで居るのではないか。でも、彼は怖ろしい無駄使いをして居ると思ひ乍ら、五六杯の散財をした。此處へ来た限りは止むを得ないと思ひ乍ら。

しかし、見て見ると、此の女は本常に美人であつた。天鵝絨の青い夜着を羽織つて居るのが、上靴や靴下ともよく合つて居たし、首や肩や腕の皮膚もひどく滑かたで、小肥りに肥つて居た。一番困つたのは、彼女の胴着がひどく長いのである事と、頬紅や口紅が餘りにもあくどくて、どう見ても赤い女としか見えない事であつたが、しかし、非常に積極的な女とは見えなかつた。事實、彼女は非常に謙遜で、寧ろ好ましさにクライドの黒眼勝ちな神経質な眼を見詰めて居た。

「あなたも矢張りグリーン・デビッドソンで働いていらつしやるんでせう？」
「うむ」クライドはこれが始めてではない——つまり、何度もこんな所へ来た事があると見せ掛ける事に努め乍ら答へた。「どうして解つたんだい？」

「だつて、オスカー・ヘッグランドを知つて居るんですもの。あの人、ちよいと此處へ遊びに来るのよ。あなたのお友達でせう？」
「うむ、一緒にホテルで働いて居るんだもの」

「でも、あなたはこれ迄、此處にいらつしやるなかつたわね」
「うむ」クライドは一寸、魔誤ついた調子で早口に答へた。

「あたしもさうだと思つたわ。だつて、他の方達にはみんな會つて居るのに、あなたは始めてなんですもの。屹度未だ、近頃あのホテルにいらつしたのね。さうぢやない？」
「さうだよ」クライドは彼が神経質になつて居る時の特徴として、眉毛を上下に動かし乍ら言つた。「しかし、それがどうしたのだい？」

「うむ、何でもなしの。唯、見掛けなかつたと言ふだけの話よ。でも、あなたは他の方達とは少し違つてるのね。そんな風に見えるわ」

女は幾らか取入るやうに變に笑ひ乍ら言つたが、その氣持はクライドには通じなかつた。
「どう違つてるの？」彼はコップを取つて飲み乍ら眞面目な顔で聞いた。

「い、事を言ひませうか」女は彼の質問を全く無視して言ひ續けた。「あなたは私達の様な女には全く興味がないのでせう。ではなくつて？」
「いや、そんな事はないさ」と彼は逃げる様に言つた。

「い、え、さうだわ。それは請合つてもいいわ。でも、私はあなたが好きなのよ。あなたの眼が好い」

の。他の方達とは違つてゐるんですもの。もつと垢抜けてゐるわよ。本當よ。變つてゐるわよ」

「さうかね。僕には解らないが」クライドはすつかり悦に入つて答へた。確かに此の女は思つたよりも悪くなかつた。ほかの女に比べれば、幾らか理性的で、而も上品であつた。その着物もひどく下品ではなかつたし、ヘツグランドやヒツグビーやキンセルラやラツタラの女達の様に、膝に乗つて来る様な事もしなかつた。事實、彼等の殆んど全部が今、椅子や床几に腰掛けて居たが、その膝の上にはみんな女が居た。そして誰の前にも小さいテーブルがあつて、其の上にウイスキーが一本宛のつて居た。

「見ろよ。ウイスキーを飲んでるぜ」キンセルラがクライドの方に眼をやつて、みんなの注意を向けさせた。

「でも、あなたはちつとも私を怖がる必要はないわよ」クライドがその女の腕や首や、はだけて居る胸を眺めて、すつかり間違つて居る間に、女は言ひ續けた。「私だつて、そんなに長く此の商賣をして居たわけではないのですもの。不幸さへなければ、こんな處には來たくなかつたのよ。私、出来る事なら、家に居たかつたんですもの。でも、今になつてはもう歸して呉れないけれど」

彼女は寧ろしんみりと床の上を見詰めて居たが、心の中ではクライドの青二才である事や、彼のボ

ケットに相當な金のある事や、同時にまた彼が可愛い、青年である事などを考へて居た。一方、クライドは、その時直ぐエスタの事を思ひ出して、何處に行つて居らうと考へ始めて居た。一體、エスタはどんな目に遇つたのだらう。どうされたのだらう。此の女もエスタと同様に不幸な經驗を経て來たのだらうか。次第に同情を感じて來たクライドは、「可愛想に」と言ひたけに女の顔を見た。しかし今は、そんな事を言つたり、聞き正して見たりする氣はしなかつた。

「でも、こんな所にいらつしやる方は、誰でも私達の事を悪く思つていらつしやるのね。あなただつて屹度さうよ。だけど、私達だつて、あなた方が思つてらつしやる程、悪い人間ではないわよ」

クライドの眉毛が動いた。多分彼女は、彼が考へて居る程悪い女ではないであらう。無論彼女は賤しい女だ。だが美しい。事實、部屋の中を見廻した所で、どの女も、此の女程には迫つて來るものを持つてゐなかつた。しかし、女の方でも、彼を、他のボーイ達よりも好い人だ、上品だと、言つて居るのだ。その解釋は當つて居る。

見ると彼女は、コップに酒を注いで、彼に獎めて居た。すると、別の一組の客が着いたらしかつた。他の女達が、例の神祕な入口から挨拶に出て來た。氣がついて見ると、ヘツグランドやラツタラアやヒツグビーやキンセルラは、何時の間にかこつそりと重たいカーテンの向ふの裏梯子の中に消え

て居た。他の客が入つて来ると、女は、後の部屋に行かうと言つた。それはカーテンで續いて居る薄暗い部屋だつた。

しかし此の部屋に来ると、彼女は近々と彼の側によつて彼の手をとつたが、やがて腕を廻してすり寄つて、二階の部屋を見に行かないかと誘つた。見ると、仲間はすべて去つて、此處には唯彼一人が残つてゐたし、女が優しく彼により掛つて来るので、彼もとうとう、二階に連れて行かれる事を許した。その間、彼は絶えず、これが危険と滅亡の始めである事、悲惨に終らねばならない事、怖ろしい病氣にかゝるかも知れない事、有り金で足りない程の金を取られるかも知れない事——それらを絶えず考へ續けて居た。彼には、彼女も彼自身も、あらゆるものが喘ぎ震へる程怖かつた。而も、怖いながらも、女について、赤と青とで装飾した小部屋に行かないでゐられなかつた。部屋に這入つた。鍵が掛けられた。と、此のふくよかな優しい女神は、全身を寫し出す大きな鏡の前で、靜かに着物を脱ぎ始めた。……

十一

この冒険のクライドに及ぼした結果は、かうした世界に對してまるで他人であつた者に豫期し得る

ものと、餘り變らなかつた。無論、彼は、さうした世界に對して、烈しい好奇心と、深い渴望とを持つてゐたが、同時に、その道德的觀念は、子供の時から養はれてゐたものであつたし、その神經的な潔癖は、彼の特性をなすものであつた。その結果、彼は、これらの凡てを、徹底的に下等な罪深いものだと、思はないでゐられなかつた。彼は、その兩親が、これらのすべてを卑しい恥しいものだと説教するのを、本當だと思つた。しかし、また同時に、一種の下等な美しさや、卑しい魅力が、それらの冒険の中にあることが感じられた。従つて彼は、何か他の興味がそれを掻き消して呉れるまでは、可なりな興味や喜びをさへ持つて、その夜のことを思ひ出さないでゐられなかつた。

のみならず、彼は今、何と言つても、自由に使へる相當な金を持つてゐた。彼が望みさへすれば、何處へでも行ける。もつと高等な、もつと上品なところへだつて行ける筈だつた。彼はもう、あの仲間と、あそこへ行かうとは思はなかつた。むしろあのドイルやジイベルリングのやうに、たゞ一人の娘を、搜して來たいものだと思つた。彼は、過ぎし夜の思ひ出に惱まされながら、早くもすでに此の新しい享樂に向つて、あえぎ始めた。彼は何處かで、自由な異教的な娘を一人搜して來て、その女のために金を使はねばならないと思つた。而も、さう思ひ出すと、彼はもう、都合の好い機會などは、待つて居られない氣がした。

而も、それに就て都合が好いことには、その後、ヘツグランドとラッタラアとが、次第にクライドに興味を持つて、何かにつけて、彼を仲間に引き入れやうとし出したことだつた。

それは、あの遊蕩をやつて間のない頃であつたが、或る日、クライドは、ラッタラアの家に招ばれたことがあつた。行つて見ると、それは、教理と説教で固められたクライドの家庭とは、正反對の家庭であることが解つた。母親と妹との三人暮しのその家庭には、何かの道徳がないわけではなかつたが、これと言ふ宗教的の信念は、誰にもなかつた。一口に言つて、それは寛大な家庭であつたが、道徳家に言はせれば、だらしが言はれる種類の家だつた。そこには何等の主義もないし、厳しい道徳もない。従つて、ラッタラアも、二歳年下のルイスも、自分の勝手に振舞へるのであつたが、たまたまルイスは氣むづかしやで、自分本位の娘であつたために、誰の手にも落ちないと言ふだけのことであつた。

かうした凡ては、時に、クライドをして、顔をしかめさせることがなくもなかつたが、しかもなほその自然さと自由さとは、彼を引きつけないでは置かなかつた。殊に、彼に取つて何よりも嬉しく有難かつたことは、彼を引きつける若い娘に對した場合の、彼の神經過敏や不安に對して、或る訓練が得られると言ふことであつた。實際、彼は、今日まで、あんな惡所に行つた後の今日でさへ、女に對

しては何の手管も魅力もない自分であることを信じてゐた。女のそばへ行つたと言ふだけで、すでにもう精神的に退いで、動悸が高まつて来る彼は、冗談はおろか、口を利くことさへ出来なくなつて来るのである。しかし、今、ラッタラアの家に來た瞬間に、彼は、さうした内氣や不安を試して見る夥しい機会があることを發見した。

實際、この家は、ラッタラアや妹を中心として、お互ひに似たり寄つたりの男女の、集會所のやうな觀があつた。そこでは、ダンス、トランプ、情事が、大ツびらに行はれてゐたが、ラッタラアの母親は、全然無關心に見過してゐた。自分の家で行はれる亂暴な情事に對して、素知らぬ顔をして居る母親なんて、彼はこれまで想像することさへ出来なかつた。

その後數回招かれて行くうちに、彼は間もなく、この仲間の一員になつた。それは、或る意味で輕蔑すべき仲間であつたが、その自由さと、面白さで、彼を引きつけた。其處では、たゞ勇氣さへあれば、自分の女を作ることを許されて居るからである。而も、ラッタラアや妹たちの巧みな配慮は、すぐにそれを成就させて呉れるのである。事實、それは、彼の最初の訪つれに於て、すでに始められかけたのであつた。

その頃、ある呉服屋に勤めてゐたルイスは、夕食に遅れて歸る事が屢々であつた。此の日も彼女

は、七時頃までも歸つて來なかつたので、此の家の夕食も延ばされて居た。丁度その間に、ルイスの二人の友達が、何かの相談にやつて來たが、ラツタラアやクライドが居るのを見ると、すつかり腰を落着けて彼等と話し始めた。女が好きであるくせに、恥しがり屋であるクライドは、何となく神經的に黙り込んで居たが、其の様子が、娘達の眼には、何となく優越を感じて居る人の様に見えて、クライドに或る興味を感じさせたのであつた。そこで娘達の方でも、自分達の面白い女である事を示して、多少彼を捕へ様と努め始めた。クライドにとつても、娘達の露骨な亂暴さや賑やかさが、たまらなく面白く思へたので、彼は直ぐにその中の一人、ホルテンス・ブリツグスに惹きつけられてしまつた。ホルテンスも、ルイスと同じ様に、或る大きな店の賣子であつたが、何處かに自信のありさうな美しい娘であつた。しかし、彼女が少からず下品で、荒ッほい娘である事、彼が夢想して居た様な型の娘でない事も、最初から認めないで居られなかつた。

「おや、未だ歸つて來ないの？」

這入つて來るなり、ホルテンスは窓の近くに居るクライドの方を見ながら言つた。「困つたわねえ。でも少し待つてるわよ。お差支へがなかつたら」

さう言ひ捨て、彼女は火のない暖炉の前に行つて、鏡の中に覗き込んだ。

「さうね、待つてませうよ。だから追出さないでね。私達はもう、御飯が濟んだのだと思つて來たのだから」と今一人のグレタ・ミラーも言つた。

「追出すなんて誰も言つてやしないぢやないか。蓄音器でもかけて遊んで居給へよ。もう直ぐ御飯だからね」

ラツタラアはクライドを娘達に紹介してから、讀みかけの新聞を取る爲めに食堂の方へ行つた。忽ちクライドは、此の二人の娘の前で、海圖のない海に投出されたボートの様な氣がした。

「私達は御飯はい、のよ」グレタ・ミラーは、クライドを、相手にとつて不足かどうかを見極める様に、ちつと眺めながら叫んだ。「今夜は未だこれからアイスクリームだのお菓子だのバイだのサンドイツチだのを、うんと食べなくちやならないのだから。だつて、今夜はキティ・キーンの誕生日でせう。

大きなお菓子だの何だの澤山あるのよ。だからルイスにも、餘り澤山食べない様に言はうと思つて來たの。あんたも今日は後から來るんでせう？」

「いや、僕達は今日、飯が濟んだら何處か見世物にでも行つて見様と思つてるんだ」ラツタラアが靜かな調子で言つた。

「馬鹿ねえ」ホルテンスは鏡の前から特にクライドに笑ひかけ乍ら、グレタからの注意を奪ふ様な調

子で言つた。グレタがクライドを釣つてゐる様に思へたからだつた。今夜はダンスが出来るんぢやないの？ そんなのこそ阿呆だわよ」

「ダンスと聞くと、君達は眼がないんだからなア。しかし、どうして君達はそう飛び廻つて計りぬいたのだらうね。僕なんかは、一日立つてゐるんだから、たまには坐つて居たい氣がするんだがね」

「まア、私たちに、ぢつとしてゐるなんて、よして頂戴」グレタ・ミラーが、足でダンスの調子をとりながら、昂然とした微笑で言つた。「今週は米だうんと約束があるんだから。全く素敵だわよ。ねえホルテンス。木曜、金曜、土曜、日曜と毎晩あるんぢやないの」指を折つて數へながら、彼女はクライドに同情を求めるやうな微笑を投げて言つた。「ねえ、トム、此の間の晩、私達どこに行つてたと思つて？ ルイスとラルフソープとホルテンスとベルト・ゲットラアと私と、それからウイリー・パシツクとこれだけで、ウエブスター通りのベッグレーンに行つたのよ。行つて見るともう人で一ぱい。あんなに見せたかつたわよ。サム・シヤフアやチリー・バインスも行つてたわ。とう／＼、朝の四時まで踊つちやつただけど、あの時は私、足が折れるかと思つた位よ。あんなに疲れた事つてないわ」

「本當！」とホルテンスが芝居がかりに両手を舉げて言つた。「私、翌日はもう働けないかと思つたわ」

よ。だつてお客様の顔がほんやりとしか見えないんですもの。家の母なんぞ、馴れないもんだから、ぶつ／＼言ふツたらないの。それは母だつて、土曜や日曜の晩ならば何とも言はないのだけれど、他の日には私が七時に起きなきゃならないのでせう？」

「それはお母さんがぶつ／＼言ふのが當然ですよ」その時、丁度、馬鈴薯とパンを持つて入つて来た母親が言つた。「あんな／＼つて、ルイスだつて、少しはからだを休ませなきゃ病氣になりますよ。何度も言つて居る事だが、あの娘ももつと眠りを取らなきゃ、身體が續かないだらうと思ふんですよ。でもトムにしても、あの娘にしても、まるでできないんだから」

「しかし、僕達に早く歸れと言つたつて、それは無理ですよ」

ラツタラアが言ふと、ホルテンス・ブリツグスも「私なんか、一晩でも家に居れば死んじまふ事よ。一日中働いてるんですもの、少し位楽しみがなくなつちや」

何と言ふ呑氣な家庭だらうとクライドは思つてゐた。何と言ふ自由さと無頓着さではないか？ これ程色づいた綺麗な娘達なのに、親達はそれを何とも思つて居ないのだらうか？ そして彼は、このホルテンス・ブリツグス程の綺麗な娘が、自分のものになるんだつたらなアと思つた。

「私なんぞ、一週に二度早寝をすれば、それでもう澤山なの。だから、父なんぞは、私の身體が狂つ

てるんだらうと言ふのだけれど、それ以上も寝たら病氣になるかも知れないわ」とグレッタ・ミラーが可笑しさうに笑つた。随分亂暴な話し振りだが、クライドには深い印象を與へた。此處に若さと快活と自由と愛とがある。

丁度その時、表の扉が開いて、ルイス・ラッタラが急いで這入つて来た。彼女は中柄のすつきりした元氣さうな小娘で、赤い縁のマントを羽織り、軟らかい青いフェルト帽を目深に被つてゐるが、兄とは違つてひどく元氣なしなやかな美しい娘だつた。

「まア、二人とも来てたの？ 遅くなつて御免なさい。今夜は一寸帳簿が間違つちやつて、私、會計課まで行つたりしたものだから。でも、私の間違ひぢやなかつたの。向ふが讀み違つてたのだから」言ひながら、始めてクライドが居る事に氣付いて「おや、私存じてますわ。グリフィスさんでせう？ トムがしよつちう、お噂してゐるんですの。何だつてもつと早くお連れしなかつたんでせうね」

クライドはすつかり間諜ついて、自分もさう思つて居る旨を、辛じて言つた。

三人の娘達は、或る相談をする爲めに、一寸の間次の部屋に行つたが、また歸つて來ると、しきりに引止められて、とうとう食後込残る事になつた。さうなるとクライドも、一生懸命で彼女達の氣に入らうと努めたし、三人の娘達も、彼が面白い若者である事を發見したので、しきりに彼の氣を引か

うと努めた。その結果、クライドも生れて始めて、女の前で樂々と口が開ける様になつたのだつた。

「今夜はあんたに餘り食はない様にと言ふつもりで來たくせに、私達はまた食へかけてるわね」グレッタ・ミラーは、ルイスの方を向いて、心から笑ひ乍ら言つた。「でも、キッティの所にはバイだのお菓子だの色んな物がある筈なのよ」

「でも、何と言つても矢張りダンスだわ。今夜も踊れるんだと思ふと、私とても嬉しいの」とホルテンスが言つた。

クライドには、彼女の口の可愛さ、殊に笑つた時に一寸歪めるその口つきが、ほ、ほ、とする程嬉しかつた。彼女は心の底から嬉しさうであつた。それに見とれて、彼は危く珈琲を咽喉に塞らせ様とした程だつた。彼は抑へきれない嬉しさで、大きい聲で笑つた。

「おや、噎せていらつしやるのね、御免なさい」素早くホルテンスが見付けて、彼に向つて言つた。

「いや、あなたのせるではないんですよ」クライドは突然何かの天啓を感じた様に、大膽になつて言つた。「僕は綺麗な人を見ると、何時でもわく／＼しちまうんですから」

「おい／＼、クライド。こんな連中に、そんなに早く甘い顔を見せては駄目だよ。今からそんな事を

しようものなら、その中に何處へお供をさせられるか解らなくなるからね」

事實、ラッタラアが言った通り、ルイス・ラッタラアが直ぐと、「グリフィスさん。あんたダンスをおやりになるんぢやない？」と聞いた。

「い、え、駄目なんです」突然現實に歸つたクライドは、自分の此の弱點に對して、烈しい残念さを感じながら答へた。「しかし、非常にやりたいとは思つてゐるのですが」彼は始めて大膽に、寧ろ訴へる様に、ホルテンスの顔を見て、それからグレッタやルイスに顔を向けた。その様子で、クライドの選擇がホルテンスに落ちたことが解つたが、みんな知らない顔をしてゐた。それは彼女にとつても、決して悪い氣持ちではなかつた。

「それは困つたわね」彼女は多少無頓着に、しかし自分の優越を自覺した調子で言つた。「あなたがお踊りになるんだつたら、みんなが一緒に行けるんですけれど。今夜はキティの家で盛んに踊る筈になつてゐるんですもの」

クライドは忽ち萎れ返つた。こんなに自分を參らせた娘が、かうも無造作に自分を棄て、自分の夢と望みとを棄て、しまふ事を考へると、彼は何だか堪らない氣がした。しかも、それは唯、彼が踊れないと言ふ理由の爲めだ。その責任は彼の呪はれた家庭の教育にある。彼は破られ欺かれた氣がした。

ダンスが出来ないなんて、何て言ふ鈍間に、俺は見える事だらう。ルイスはいくらか興醒めな顔をしてゐるが、しかしグレッタ・ミラアは、直ぐ彼の應援にやつて來た。

「でも、ダンスなんて、そんなに難かしくはないですよ。二三分も教はればいゝんですもの。若しよかつたら、御飯の後、教へて上げませうか。少し計りステップの踏み方を知つてれば、それでも何處へでもいらつしやれるのですもの」

クライドは有難く思つて、直ぐにダンスを習はうと決心した。彼は、何故、これまで、ダンスの學校に行かなかつたのだらうと思つた。しかし、ホルテンスを好きだと言ふ事を明かにさせた今、彼を最も苦しめた事は、ホルテンスが彼に冷淡に見える事であつた。彼は先刻ホルテンスが、ベルト・ゲットラアと一緒にダンスに行つた事を聞いたが、して見ると自分はもう駄目なのかも知れないと思つた。矢張り今度も失敗するのだらうか？

しかし、夕食が濟んで、他の連中が話し合つて居る時、先づ第一にレコードを掛けて、手を擴げて出て來たのはホルテンスであつた。彼女はクライドに、特別の興味を持つたわけではなかつた。少くとも、グレッタの様な氣持ちではなかつたのであるが、かうしてグレッタが進出して行くのを見ると、そのままにはして置けない氣になつたのだつた。急に變つた彼女の態度を見て、クライドは直ぐ、自分が

考へてるよりも彼女は自分を好いてるのだと誤解したが、その間にもう彼女は、彼の両手を取つて居た。彼の右の手を彼女の腰に廻し、他の手で彼女の手を取らせると、彼女は彼の注意を足の方に向けさせて、二三の簡単な動作を説明し始めた。しかし、餘りにも恐縮し、餘りにもおどろいて居る彼女を見ると、彼女は寧ろ滑稽に思へて、ひどく好きになる氣にはなれなかつた。だが同時に、少し應援してやらうと言ふ氣も起らないではなかつた。間もなく彼は樂々と動き廻れる様になつた。續いてグレッタやルイスとも踊つて見たが、これで澤山だと言はれるやうになつた。

その晩、ラッタラアは、間もなく誘ひに来る筈のベルト・ゲットラアと一緒に、或る芝居に行く事になつて居たのだつたが、クライドはその氣になれなかつた。彼女と一緒に踊れると言ふ事が、すっかり彼を引つけて居たのだつた。無論、ラッタラアも、彼の氣持を察して、芝居行きをよしたが、外に出ると、ホルテンスはゲットラアと一緒に歩き出した。クライドは悲しかつたが、しかしルイスやグレッタに親切にすることに努めた。ラッタラアは、クライドがすっかりホルテンスに參つてゐるのを見てとつて、一寸の間、彼を呼んで言つた。「君、あのホルテンス・ブリッグスには餘り近づかない方がいい、ぜ。あいつは餘り好い女ぢやないんだよ。ゲットラアもさうだし、他にも男があるんだからね。あいつは唯、君に擲擄つて居るだけなんだから、本氣にしては駄目だよ」

しかし、クライドには、かうした有難い注意も何の効果もなかつた。彼女の美しさと、笑ひと、魔力と、輕快さと、若さが、すっかり彼を捕へてしまつて、その一顰一笑を得るためには、何事でもしようと言ふ氣にさせて居たのだつた。その娘が、火の周りを飛び周る蛾のやうなものである事や、快樂や美服の爲めには、どんな青年をも利用しようとする娘である事などは、今、彼の問題ではなかつた。

此の會合は、唯、色氣盛りの奔流と言ふより他に、言葉がなかつた。キティ・キーンの家は、或る貧弱な街の小さい小屋に過ぎなかつたが、クライドには、突如として湧いて來た此の美しい娘への情熱の爲めに、まるで夢の國の様な色と形とを帯びてゐた。其處で會つた娘や若者たちは、總てラッタラアやヘッグランドやホルテンス等と同じ型の連中で、何れも奔放自在の特質を供へて居た。而も、不思議にもクライドは、此の新しい仲間に入ると共に、多少の含羞を感じながらも尙、完全に彼等の騒々しさの一員になつた。

しかも此處では、これまでクライドが見た事もない様々な事が行はれて居た。例へば、ルイスやホルテンスやグレッタなどが、平氣で或る種の肉感的なダンスを踊つてゐたし、誰も彼もウイスキーの小瓶を持つて來て、自分が飲む計りでなく、他人にも、誰彼となく飲まして居るのであつた。

かうして其の歡樂に油をそ、がれる彼等は、その油が加はるにつれて、次第に亂暴になつて來た。

ホルテンス、ルイス、ゲレタなどが痴話狂ふかと思ふと、また時には喧嘩をし始める。若者と娘とが扉の陰で抱き合つたり、隅ツこの椅子で、娘が男の膝に乗つたり、ソファアの上に寝轉んで、ひそひそと囁き合つたりする事は、クライドの見たところでは、極く普通の事であるらしかつた。ホルテンスには、そんな事はなさうであつたが、でも、男の膝に乗つたり、扉の影で囁き合つたりする事は躊躇しなかつた。それを見てすつかり失望したクライドは、もう／＼こんな女とは關係しない。餘りに安ッほく下等だ。——と感じないで居られなかつた。

しかし同時に、彼も次第に酔つて來た。遂に彼らしくなく勇敢になつて來た彼は、とう／＼彼女に近づいて行つて、半ば懇願する様に、彼女の餘りにだらしない所業を責めて見た。

「あなたは仲々偉いんですね。誰が嬉しがらうと、問題にしないでせう？」その時は既に一時を過ぎて居たが、彼女は例の賑やかな色ツほい調子で、彼に新しいステップを教へ様として居た。

「偉いつてどう言ふ意味？」

「どういふ意味つて」クライドは多少、むツとして居たが、曖昧な微笑で答へた。「僕、あなたの事を聞きましたよ。あなたはみんなを喜ばしてゐるんださうぢやありませんか」

「私が？」すつかりいら／＼して彼女は答へた。「つまり、あなたを喜ばさうとして居ないとおつしやるの？」

「いや、決して」彼は餘りに言ひ過ぎて、彼女から見棄てられはしまいかと怖れながら、半ば頼むやうに、半ば叱るやうに言つた。「そんな意味ぢやないんです。唯、此の連中が皆あなたに惚れても、あなたは平氣でいらつしやると言ひたかつたんですよ。兎に角、みんなあなたを好きらしいですね」

「え、それはみんな好いてゐるわよ。だつて仕方がないぢやないの」

「言つて置きますがね」と、彼は突然、熱情を籠めて、傲然として言つた。「僕には此の連中の誰よりも、あなたの爲めに金が使へるんです。僕はそれだけ持つてゐるんですから」

彼のポケットにある五十五弗の札が、ふと彼の頭に浮んだのだつた。

「まア、私知らないわよ」と彼女は答へたが、しかし此の露骨な申出は、少からず彼女の心をそ、のかすと同時に、かうして殆んどあらゆる若者が、自分に熱中するのだと言ふ事實によつて、少からずいい氣持になつたのであつた。實を言ふと、彼女は多少、薄馬鹿で、ふらく／＼した娘なのだ。自分の美しさに好い氣になつて、鏡さへあれば覗き込んで、自分の眼や髪や首や手や顔立ちに見とれながら、例の妙な笑ひ顔をして見る様な娘なのであつた。

同時に、彼女は、クライドが未だ新米ではあるが、少からず美男子である事に、多少動かされて居た。彼女は、かうした初心者を擲擲ふのが好きであつた。彼は多少馬鹿であるかも知れないと、彼女は思つてゐた。が、兎に角、グリーン・デビッドソンに勤めて居るのだし、好い着物も着てゐるのだから、相當の金は使へるのだらうと思つた。彼女の好きな連中には、そんなに金の使へる男は居ないのであつた。

「ほかの連中だつて、私の爲めならお金を使ふわよ」と、彼女は頭を擧げ、眼をぱちつかせながら言つた。

忽ちクライドの顔は暗くなつた。彼の慾望に燃える様な眼には、再び例の人生への憤りが現はれて來た。無論、彼女の言つた事は、本當であるに違ひないと思つた。自分より金持ちで、自分より金の使へる奴がほかにあるのだ。自分がこんなに威張るなんて、滑稽な笑ひ者かも知れないと思つた。

「それはさうでせう。しかし、そんな連中だつて、僕程には、あなたを好きではないと思ひますね」この馬鹿らしい程な正直さが、少からず彼女に媚びた。彼女は此の男も満更ではないと思つた。彼等は音樂の續く間、靜かに滑りつゝけた。

「でもね、私は何處でもこんな調子だとは限らないのよ。だつて、此の連中はみんな、お互ひに知り合つてゐるんですもの。何處へでも一緒に行く仲間なんだから、今日の事を氣にしていましては駄目なんですわ」

しかし、彼女の巧みな嘘は少からず彼を慰めた。

「實際僕は、あなたの爲めにはどんな事でもしますよ。あなたの様なハイカラな人を、僕未だ見たことがないんです。これから、僕と一緒に御飯を食へに行つたり、芝居を見に行つたりして下さるでせう？ 明日の晩はどうです？ でなかつたら日曜日は？ 其の二晩だけ、僕、空いてるんですから」

しかし、その時も未だ、此の接觸を續けたものかどうかを考へてゐた彼女は、始めの中は躊躇してゐた。他の連中は兎も角も、例のゲットトラアが、やきもきして彼等に注意して居たからである。たとひ金を使つて呉れるにしても、その爲めに面倒が起るのは有難くなかつたからでもあつた。相手がこんなに熱心であるからには、何かの問題が起りさうであつたからだ。だが、同時に、生來の浮氣者である彼女は、此のまゝ男を見棄てるのも忍びない氣がした。うつちやつて置けば、グレタやルイスの手に落ちるにきまつてゐるからである。そこで、彼女はとう／＼、次の火曜日に會ふ事に話をきめた。無論今夜はゲットトラアが居るから、家に送つて貰ふことさへ出來ないが、次の火曜日には、六時半にグリーン・デビッドソンの近くで會はう。そして先づフリッセルで夕食を濟ませて、リビイに行つて喜

歌劇「コルセア」を見やうと言ふ約束をした。

十二

かうした接觸は、或る人達にとつては極めて些細な事に見えるかも知れないが、クライドにとつては非常に重大な事件だつた。今日まで彼は、これ程の魅力を持つた娘で、いやしくも彼に眼を呉れる女などは、見た事がないのである。而かも今、彼はそれを見つけたのだ。彼女は美しい、一緒に何處に行つても恥しくない娘である。無論彼女は浮氣者であるだらう。誰をも本氣では愛さないだらう。彼に對しても、最初は熱心でないかも知れない。だが——その先の事が誰に解るだらう？

かうして約束通り、次の火曜日に、彼はグリーン・デビッドソンの近くの或る街角で、彼女に會つた。彼はどうしてか、か解らない程有頂天になつてゐたが、それでも自分を立派に見せる爲めに、素晴らしくハイカラに髪を刈つて居たし、蝶型ネクタイや、新しい絹の首巻きや、絹の靴下を、特に今日の爲めに買つて置いた。

しかし、一度ホルチンスに會ふと、こんな物がみんな無駄であつた事が解つた。彼女の興味を牽く物は、彼女自身の容貌ばかりであつたからである。のみならず、あの後になつて、彼に會ふ事が餘り

有難くなくなつて來た彼女は、態と時間を遅らせて、殆んど七時近くまで彼を待たしたのであつたが、その爲めに彼は少からず失望した。彼には、彼女の様な美しい女は、彼がどんなにいゝ着物を着ても、どれ程金を使つても、興味を持つて呉れない様に思へたが、しかし、美しい女を持つ事は嫌だと思つた。ラッタラアやヘッグランドは、女の美醜を論じないらしく見えるが、彼にとつては、それが一個の熱情であつた。美しくない女に満足して居るなどと言ふ事は、彼にとつては堪へ難い嫌惡であつた。

その夜、彼女は鳶色のカラーとカフスを着けた黒い天鵞絨のジャケットを着て、同じ天鵞絨の大黒帽を被つてゐた。頬と唇に少し紅をさして、眼は生々として居た。例に依つて、すつかり自分に満足してゐる様子だつた。

「やア、遅くなつたわね。でも仕方がなかつたの。私ね、今日はもう一人、男のお友達と會ふ約束をしてただけで、すつかり忘れてたの。それを思ひ出したのが六時なんでせう。私すつかりまごゝしちやつて、どつちにしようかと思つたのよ。よつほどあなたのお所へ行つて、別の日にお約束をしようかと思つただけで、六時過ぎてはもうホテルにいらつしやらないと思つたから、チャアリーの處へ行つたの。あの人だつたら、六時半まではオルフィヤの店で、煙草賣場に居る筈だからと思つて。

チャアラーも矢張り、御飯を食べて芝居へ行かうと言つてたんだけど、それを他の日に變へて貰つて来たのよ。だからあんた嬉しいでせう？ チャアラーの様なあんな綺麗な人を斷つて、あんたに来て上げたんですもの」

彼女が他の男の事を言ふ時、クライドの眼に混乱と嫉妬と恐怖との閃めくのを、彼女は見て取つた。そして、男を嫉妬させて居ると思ふ事が彼女を喜ばせた。彼女はクライドがすっかり彼女に參つて居る事を知つた。で、笑ひ乍ら頭を擧げて、一緒に歩き出した。

「いや、本當に来て下すつて有難う」彼は、チャアラーと言ふ名前を聞いて、何だか胸が塞がる思ひがしたが、強ひてさう言つた。そして、一體どうしたら、こんなに美しい、こんなに我儘な娘を、手に入れる事が出来るだらうと考へてゐた。「今夜は實にハイカラですね。帽子も着物も、實によく似合ふぢやないですか」彼は自分でもいさゝか驚きながら、大膽に彼女の顔を見詰めて言つた。こんな美しい口に接吻をする事が出来たらと、ひそかに思ひながら。

「しかし、あなたの様に綺麗な人としては、少し位約束が間違つても、無理だとは言へないかも知れませんね。薔薇はいらない？」

丁度花屋の前を通つてゐたので、それを買つてやらうと思つたのだつた。

「えゝ、どうぞ。私、薔薇は好きよ。でも、此のバイオレットの方が好いかしら。随分綺麗なぢやないの。此のジャケツに似合つてよ、屹度」

クライドが、花の事に氣付く程如才なく親切である事は、彼女を幾らか喜ばせた。が、同時に、彼が未だ子供であると言ふ事も、見抜かないでは居られなかつた。彼女にすれば、こんなに容易く惚れ込んで仕舞ふ男よりも、もつと経験のある大人の方が望ましいのであつた。が、兎に角、クライドが他の連中よりも幾らかましな、幾らか上品な青年である事だけは、認めないで居られなかつた。彼女は今少し辛抱して、相手を見てゐてやらうと考へるのであつた。

「まア、随分粹ぢやないの。私、これにするわ」

彼女はさう叫んで、一つの大きなバイオレットの花束を取つて、胸に差した。クライドが金を拂つてゐる間、彼女は鏡の前に立つてそれを直して居たが、すっかり似合つたのを見ると、さあ行きませうと彼の腕を取つた。

クライドは、彼女の元氣さと平氣さとに壓迫されて、一寸口がきけない形だつたが、しかし心配する事はなかつた。彼女の人生に於ける最大興味は、彼女自身にあつたのだから。

「ねえ、あんた。私、先週は随分忙がしかつたのよ。毎晩三時までだし、日曜日は殆んど朝までなん

ですもの。でも、此の間の晩は随分亂暴だつたわね。あんた、ビッグブリユウのバケットに行つた事がある？ 随分粹な處よ。夏はダンスがあるし、冬になるとスケートをやつたり、氷の上で踊つたりするの。オーケストラだつて、随分粹よ！

クライドは、彼女の口の動き方や、眼の綺麗さや、動作の素ばしこさを眺めて居るだけで、言つて居る事などは殆んど考へて居なかつた。

「ワレエス・ツロロンもしよつちう私達と一緒にだけど、あいつ、あれで随分滑稽屋よ。ダンスが濟んで、みんなアイスクリームを食べてると、何時の間にかあいつ臺所へ行つて、顔ぢうを眞黒に塗つて、給仕人のエプロンを着けて出て来たものよ。それはとても愉快なの。皿だのスプーンなので、いろんな面白い事をして見せるんですもの」

クライドは自分にはとてもツロロンの様な才能はないと思つて溜息をついた。

やがて、二人はフリツセルの店まで来た。クライドは、生れて始めてかうした場所に女を連れて来た事に満足した。彼にとつて、それは、経験らしい経験の最初のものであつた。彼は、彼女から、いろいろの事を聞くにつけて、自分が、これまで、殆んど世間と言ふものを知らなかつた事を感じた。そして彼女が食べたいものを注文して居る間、彼は自分の財布の事も考へないで、只々、彼女の顔や

姿や手の形や腕の丸さや胸のふくらみや、眉毛の恰好や、滑々した頬を眺めて居た。彼女の滑らかな聲の調子も、彼にとつては嬉しいものであつた。あゝ、こんな女が自分一人を思つて呉れるのであつたら！

しかし彼女は、此の家に來てる事などは一向問題にならない様子で、自分の事はばかりを喋り續けた。そして、鏡を見て居ない時には獻立表を見詰めて、自分の欲しい物を決めようとしてゐた。彼女は羊の肉や鰯肉や葷やセロリやカリフラワや雑多な物を注文した。クライドは、何を食べさせるよりも、少しの酒を飲ませるのが効果が多い事をヘッグランドから聞いて居たので、それとなくコクテールを飲む事を奨めた。そして一杯、二杯と飲んで行くに従つて、彼女は段々機嫌がよくなり、お喋りになつたやうだつた。

しかしかうして居乍らも、彼女のクライドに對する態度は、寧ろ他處々々しいもの——無頓着である事にクライドは氣付いた。そこで彼は話を自分達の方に向けて、自分の彼女に對する深い興味や、彼女の興味を引いて居る他の若者が居るかどうかなどと聞いて見たが、彼女は唯、「みんな好きだわ」と言つて突離してしまつた。みんなが彼女に親切だ。若し親切でなければ、こちらも相手にしないだけの話だ。「みんなに鐘をくゞりつけてるんですもの」と、一度彼女は口外して、誇らしげに頭を振つ

て見せたことがあつた。

しかし、かうした彼女の様子が、總て、クライドを虜にしてしまつた。彼女の動作や様子や態度は色ッほくて思はせ振りであつた。彼女は何となく思はせ振りに、或る結論に到達しさに思はせて置いて、而も後になつて何もなかつた様な顔をする。——總ては無意識にやつたのだと見せ掛けるのが好きであるらしかつた。しかし、さうとも知らずクライドは、唯、彼女の近くに居ると言ふ事だけで、わく／＼したり嬉しがつたりしてゐた。それは一つの苦患であつたが、尙甘美な苦患である事を失はなかつた。彼は彼女に近々と寄つて、その口に接吻する事さへ出来たら、どんなに素晴らしいだらうと思ひ詰めて居た。今や彼の唯一つの夢は、何とかして——容貌でもいい、金でもいい——何とかして、彼女に好意を持たせたいと言ふ事であつた。

かうしてその晩は、芝居に行つてから、彼女の家まで送り届けて行つたが、二人の間には、何の特別な進行があつたとも思はれなかつた。リビー座で「コルセヤ」を見て居る間も、彼女は唯芝居に見とれて、さうした話をする計りであつたが、クライドは唯それを聞いて居るより他に仕方がなかつた。しかも一方、彼女は彼女で、もう少し此の男を征服してやつても好いと考へてゐた。此の男の金をもう少し使はせるまで引付けて置いてやらう。が、同時に、自分は自分の道を進むのだ。出来るだけ

他の連中と楽しんで、その合間々々にクライドをおびき出して、色々のものを買はせてやらう。——と考へてゐた。

十三

少くとも四ヶ月の間は、同じやうな状態が続いた。彼は彼女に會つて以來、休みの日の大部分を捧げて、せめて他の若者並に、彼女に好意を持たせようと努めたが、彼女が誰かに特別の愛情を持ち得るかどうかさへ、彼には解らなかつた。と言つて、これらの總てが無邪氣な交際であるとも、信じ得なかつた。しかも彼女の彼に對する様子には、どんなに悪く考へても、最後には彼に好意を見せさうなところがあるのだつた。彼女の移り氣や色ッほさに捕へられ、その動作や氣分や聲や着物に魅せられてゐる彼は、どうしても彼女を思ひきる氣がしないのであつた。

實際彼が彼女を追駈ける様子には、馬鹿の様な處があつた。そしてそれを見た彼女は又、彼を馬鹿にし遠ざける様にさへして、無理にも僅かな恩恵で満足させる様にした。が、また他方では、色々他の男達との事を話して、次第に彼を此の儘では堪へられなく感じさせる様にも努めた。さうした時、彼は怒りを含んで、もうあいつとは會はない、と自分に叫ぶのであるが、その次に會つて、彼女のあら

ゆる好意や、言葉の冷たい無頓着を見ると、その勇氣が挫けて了ふのである。

しかし彼女は、自分の欲しい物の事を言ふ際には、ちつとも遠慮しなかつた。それも最初は、極く些細な物で、例へば白粉刷毛とか、紅棒とか、白粉箱とか、香水とかに過ぎなかつたが、後には極く暖味な嬉しげな言ふとか、意味ありげに寄りかゝつたりした後で、財布だとか、ブラウスだとか、上靴だとか、靴下だとか、帽子だとか、次第に様々な物を買ひたいと言ひ始めた。そこで彼は、時には相當に苦しい事もあり乍ら、自分から進んでそれを買つて、彼女の歡心を得ようとした。しかし四月の終りになつても、彼等の關係は一向進んで居ない事を、彼は知り始めたのであつた。

その間も、グリフィス家の中では、絶えず不安と絶望とが續いて居た。殊にエスタが居なくなつて以來、両親の絶望はいよく募つて行き、一種の神秘ささへ、その焦燥の中に加はつて來た様に見えた。性の問題に關する限り、グリフィス家の親達程氣難しい人達は居なかつたからである。

暫くの間、エスタの行方は依然として解らなかつた。クライドの知る限りでは、手紙一本來ない様子であつた。その爲めに、親達は非常に苦しみもし、心配もした様子だつたが、それから二三週間も経つと、突然親達が心配しなくなつた事に氣付いた。彼等は既にあきらめて、餘り心配しない事にしたらしい。すると、それから暫く経つた或る日、クライドは偶然、自分の母親が珍らしく誰かと文通し

て居るらしい様子に氣付いた。

それはクライドがグリーン・デビッドソンへ勤め始めて間もない事であつた。或る日の午後、割に早く歸つて來た彼は、明らかに今着いた計りの手紙を、一心に讀んでゐる母親を發見した。彼の姿を見ると同時に、それを讀むのを止して、何も言はないで立上つた母の様子では、それは秘密を要するものであるらしかつた。即座にクライドは、それがエスタの手紙であるらしい事を察した。無論母は、それについては何も言はなかつた。それを聞かれる事も嫌さうであつた。クライドは唯疑つたゞけで、やがて忘れるともなく忘れ去つて居た。

しかしそれから一月ばかりの後、クライドが漸くグリーン・デビッドソンの仕事にも馴れて、ホルテンスへ興味を持ち始めた頃の或る午後、母が不思議な相談をクライドに持かけて來た事があつた。その時母は何の説明もしないで、仕事から歸つて來たクライドを集會室に呼び入れたが、暫くじつと彼の顔を見詰めてから、興奮した様子で言つた。

「ねえ、クライド。私は今直ぐ百弗計りの金が欲しいんだが、どうしたら好いのか、お前、解らないだらうかねえ？」

クライドは自分の耳が信じられない程に驚いた。僅か二三週間前だつたら、四五弗の話が出たにし

でも、突飛に思はれる彼だつたからである。それを知らなくはない母が、明らかにクライドに出来る筈だと言ふ顔付きで、かう言ふのであつた。しかも彼の此の頃の着物や様子を見れば、其處により好い時代が来て居る事は明らかであつた。

その時、クライドが先づ感じた事は、自分が収入を誤魔かして居る事を母が見て取つたのではないかと言ふ事であつた。事實、此の頃のクライドの様子の變り方を見て居る彼女は、次第に彼への態度を變へる事を餘儀なくされ、今後の制御について、少からず考へ始めて来て居るのだつた。實際、此の職業について以來、彼は急に利口になり、確りして来て、自分の了見でやつて行けるらしく見えて来たのである。それは或る意味で、彼女を心配させもしたが、また或る意味で、彼女を喜ばせもした。これ迄の神經質と落着きなさとの代りに、兎も角もかうして面白い變り方をしつゝあるクライドを見る事は、彼女にとつて何ものかであつたからである。無論、彼の最近の此のおめかしは、彼女をして彼の仲間への疑ひや心配を抱かせるに足りたが、あれ程長い時間を働かされるのであつて見れば、どれ程の金を着物に使つたとしても、彼女がつぶやく可き理由は何もない筈だと感じて居た。多分彼は、幾らか利己主義になり始めたのだらう。自分自身の樂しむばかりを考へる様になつたのだらう。だが、これまでの長い貧乏暮らしを考へれば、此の位の樂しみをぐゞ言ふにも當らない。——母はさうも

思つてゐるのだつた。

母の眞意を解しないクライドは、唯彼女の顔を見詰めて叫んだ。

「百弗ですつて？　しかし僕にどうして出来るでせう」

こんな不可解な要求の爲めに、自分の新しい収入が吹き飛んで了ふのだと思ふと、不安と失望との顔色が直ぐに現はれた。

「いや、お前にみんな作つて呉れと言ふのではないのだよ。それは私にも大抵出来さうな當はつてゐるのだけれど、お前にも少し助けて貰ひたいと思つてるのだよ。お前ももう段々大人になつて来たのだから、出来るならお父様に言はないで、濟ませたいと思つてるのさ。お前が知つてる通りに、お父さんは何も世間の事を知つていらつしやらないのだし、それに非常に心配をなさる質だからねえ」

さう言ひ乍ら、母は大きな弱々しい手で顔を蔽つた。その苦しさうな様子が、クライドを動かした。と同時に、自分が母を助けるか助けられないかは別問題として、一體何事が起つたのであらうかとの疑ひが起つて来た。百弗なんて、一體何に入るのだらう？

「それで、私の考へて来た事を話すとねえ、私は此處でどうしても百弗なくちやならないのさ。何の爲に入るかについては、お前にも誰にも言へない事だし、また聞いて貰ひたくない事なのだが、兎に

角、私の机の中には、お父様の古い金時計があるし、その他に純金の指輪だのピンだのがあるのだよ。それを賣るか質に入れるかすれば、いくら安くても二十五弗にはなると思ふし、それから例の純銀のナイフやフォークや、銀の大皿や水差しを賣つても、二十や二十五弗にはなる筈なのだよ。あの皿一つでも二十五弗はするんだからねえ。それで、私の頼みなのだが、お前、それを持つて、下町のお前の店の近くの何處かの質屋に持つて行つて呉れないか。そして、當分の間、一週間にもう五弗宛私にお呉れでないか。さうすれば私は、例のマアチさん——お前知つてるだらう？——あの人に頼んで、百弗の金を作つて貰つて、お前の拂つて呉れる金で段々返して行きたいと思ふのだよ。私も今、十弗計りは此處に持つてゐるのだから」

彼女の顔付きには、「私がこんなに困つて居る時に、まさかお前は見棄てやしないだらうね」と言ひたけな様子が見えたが、クライドはそれを聞いて、多少安心した。彼は、そのがらくたを質屋に持つて行く事も承諾したし、その借金が支拂へる迄、當分五弗を拂ふ事をも承諾した。しかし、こんな金儲けにありついてから未だ間のない今日、これだけ餘分に取られると言ふ事に、多少の憤りも感じないでは居られなかつた。彼は今、一週十弗宛を拂はねばならないのである。何時も何時も悪い方へ、悪い方へと計り家の中が進んで行く。今後はもつともつと取られるのではないだらうか。——クライ

ドにはそんな氣さへした。

彼はそのがらくたを持つて、或る恰好な質屋に行つて、四十五弗を貰つて來た。母親の十弗を加へて五十五弗になるわけであつたから、残りの四十五弗をマアチ氏から借らねばならないわけであつた。すると彼は、今後の九週間、五弗の代りに十弗を母親に與へねばならない事になる。それを考へると、これ迄の美服や享樂の渴望が、一向樂しみでなくなる氣がしたが、しかし彼はその金だけは出さうと決心した。何と言つても母には恩を受けて居るのだ。これ迄色々な犠牲を忍んで呉れた母に對しては、餘り自分勝手な事は出來ない。それではあんまりだ。

しかし、此の時彼の頭に浮んで來た最も切實な要求は、若し彼の両親が今後もかうして經濟的な援助を彼に求めるつもりであるならば、両親の方でも彼に對して、今少し考慮を拂つて呉れて欲しいと言ふ事であつた。何はさておき、少くとも夜間の出入りだけは、今少し自由にして貰はねばならないと思つた。彼は、もう自分で食つたり着たりして居る人間ではないか。それだけでも、もう少からず手助けになつてゐる筈ではないか。

ところが、それから間もなく、別の問題が一つ起つて來た。それは例の百弗の事件からさう長くない後の事であつたが、或る日クライドは、此の町でも一番見苦しい通りのモンテロース街で、母親に

會つた事があつた。それは兩側に低い二階長屋や、澤山の貧弱なアパートメントの並んで居る様な街で、グリフィス家の様な貧乏家族でさへ、さうした街に住む事を零落だと感ずる様な街であつたが、その時、母は多少ましな或る家の立關から下りて来る所であつた。その家の表窓には「家具付貸間」と貼札がしてあつた。その時クライドは、通りの向ふ側から眺めて居たのであつたが、彼女はクライドに氣付かないで、それから二三軒離れた別の家に這入つて行つた。それも同じ様な貸間札を貼り出した家であつたが、母は暫く外側から眺めた後に、石段を上つてベルを鳴らした。クライドは始め、母が誰かを探しに來て居るのだと思つた。しかし見て居ると、やがて家主の女將さんらしいのが、扉口から顔を出して、母とこんな話をし始めた。

「部屋をお貸しになるのでございますか？」

「え、」

「湯殿がありますでせうか？」

「い、え。しかし二階には一つお風呂があります」

「一週間にくらで御座いますか？」

「四弗で御座います」

「見せて戴かせようか？」

「え、。どうぞお這入りになつて下さい」

それはクライドの居る所から二十五呎とは離れない處だったので、彼女が自分に氣付きはしまいかと思つて待つて居たが、彼女は唯一寸躊躇つたゞけで、その家の中へ這入つて行つた。クライドは不思議な氣持で彼女の後を見送つて居た。母が部屋を探して居ると言ふ事も不思議であつたし、かうした町をうろくしてゐると言ふ事も不思議であつた。彼はよつほど待つてゐて、彼女に尋ねて見ようかと思つたが、自分の用事を思ひ出して、その儘行き過ぎて了つた。

その夜、自分の家に着物を變へに行つて、臺所で母に會つたクライドは、直ぐ彼女に言つた。

「僕、今朝モントローズ街でお母さんに會ひましたよ」

「さうかい」一寸經つて母が答へたが、彼女の顔には多少の驚きが認められた。母は馬鈴薯の皮をむき乍ら、不思議さうにクライドの顔を見詰め乍ら、「でも、それがどうしたのだい？」と言ひ添へた。

それは靜かな調子ではあつたが、その顔には血の氣が上つて居た。こんな母を見るのは、クライドには始めてあつたので、彼の興味は一層募つた。

「何だか、部屋かなんか探していらつしやる様子でしたね」

「あゝ。お金のない病人が一人あるのでね、その人の爲めに部屋が一つ欲しいんだが、仲々見付からないんだよ」

グリフィス夫人は、此の上話したくない様子で向ふを向いたが、クライドは言はないで居られなかつた。

「しかし、あんな街に部屋なんか借りたつて、仕方がないぢやないですか」

彼のグリーン・デビッドソンに於ける新しい職業は、既にこんな事を考へさせる迄になつてゐた。しかし母は何とも答へなかつたので、彼は着物を着換へる爲めに自分の部屋へ行つた。

それから一月計りの後、或る晩遅くミゾリー通りを束の方に歩いて居たクライドは、再び西の方に歩いて来る母親の姿を見た。両側に立並んで居る小店の燈火で見ると、長年家の中にころ／＼して居たが、誰も使つた事のない舊式な重さうな靴を提げて、母が歩いて来るのである。クライドの姿を見ると、彼女は急に立止つたが、直ぐその側の或る煉瓦建の三階のアーバートの入口に這入つて了つた。クライドが来て見ると、その扉はもう閉つてゐた。扉を開けて見ると、中には階子段がほんやりと照し出されて居る計りだつた。しかし、母が誰かを尋ねて来たのかも解らなかつたし、何處を尋ねていいのかも解らなかつたので、クライドは此の上、詮索しようとは思はなかつたが、しかし、暫く街角

で待つて居た。やがて母はまた、そこから出て来た。しかし不思議な事だが、彼女は歩き出す前に、注意深く邊りを見廻すのである。始めてクライドには、彼女が何かの秘密を持つて居ると言ふ事が解つた。

母親の奇妙な動作を見た彼は、直ぐに彼女につけて行かうかと思つたが、若し母が自分のしてゐる事を知らせたくないと思つて居るのなら、矢張りさうしない方がいい、とも考へられた。同時に、母の此の隠れるやうな動作は、彼に烈しい好奇心を湧き上らせた。何だつて母は、あの靴を持つてゐる自分を見られるのを嫌がつたのだらう？ その性質から言つて、内證事をする母ではないではないか？（それはクライドとは正反對であつた）と、忽然として、彼の頭には、モンテロース街のあの借家の石段を下りて来る時の彼女の姿が思ひ浮べられた。同時に、あの手紙を読んで居た時の母や、百弗の金を作らせた時の母が思ひ浮べられた。一體母は何處へ行つたのだらう？ 何を隠してゐるのだらう？

色々考へて見たが、彼には何も解らなかつた。すると、それから一週間計り経つた或る日、クライドがバルチモア近くの第十一街を通つて居ると、彼は思ひがけなく、エスタの姿を見た様な気がした。少くとも、彼女にひとくよく似た女を見たような気がした。それはエスタと同じ程の脊の高さで、彼女にそっくりな歩きつきであつた。唯、見た處ではいくらか老けたやうであつた。無論、人混みの

中で、ちらと見たゞけで、それを確かめようとした時には既に見失つて居たのだつたが、彼女を見た事に間違ひない氣がした。彼は急いで家に歸つて、集會所で母に會ふと、確かにエスタを見た旨を告げた。彼女は屹度、カンサス市に歸つて來て居る。それは誓つても好い。十一番街の邊りで、確かに見たのだから。しかし母は、彼女から何も知らされて居ないのだらうか？

だが、此の時の母の様子は、クライドが豫期したものとは大變に違つて居た。クライド自身の態度は、驚きと喜びと好奇心と同情との混合物であつた。母はあの百弗の金を使つて、彼女を呼び戻したのだらうか？ 彼にはそんな事も考へられたが、では何故、何處から呼び返したのか？——それは彼にも言へなかつた。しかし、若しさうだとすれば、エスタは何故自分の家に歸らないのだ？ 少くとも、自分の歸つて來た事を、何故、家族の者に知らせないのだらう？

クライドは、母が吃驚して、色々細かに聞糺すだらうと思つて居た。ところが、母はすつかりまごまごして、ひどく困つた顔付きをした。それは既に彼女が知つて居る事を聞かされて、どう言ふ態度をとる可きかと迷つて居る様子だつた。

「おや、さうかい。何處で？ たつた今だとお言ひだね。第十一街だつて？ ほう、それは妙だね。早速お父さんにお話ししよう。此の町に歸つて來てゐて、此處に來ないなんて變だからね」

彼女の眼には、驚きの代りに混亂が現はれてゐた。彼女の口は、困惑の際の何時もの様子で、妙に醜く引歪んでゐた。

しかし、どうも不思議な話ぢやないか。屹度それは、あの娘に似た人だつたかも知れないよ」一寸黙つて母はさう言ひ添へたが、クライドは、彼女が見かけの様に驚いてるとは信じなかつた。間もなく、父親が歸つて來た時には、クライドは未だホテルに出掛けないで家にゐたが、彼等がひそひそと話して居る様子にも、驚いてゐるらしい處は少しも見えなかつた。彼が見た事を説明する爲めに、呼入れられもしなかつた。

ところが、わざわざ此の神祕を解決するかの様に、彼はまた或る日、偶然、小さいバスケットを重さうに携けてスブルース街を歩いてゐる母親に會つた事があつた。近頃になつて氣附いた事であるが、母はその頃日課のやうにして、朝晩外に出かけるのである。此の日も母が、長年見馴れた一張羅の鷲色の外套を着て、重い足取りで市場通りに曲つて行つたのを見たので、クライドは道傍の新聞賣場の後に隠れて、彼女の通り過ぎるのを待つて居た。そして彼女が通り過ぎると、そつと後からついて行つた。母はダリンプルの方に這入つて行つた。其處は昔の住宅地で、今はみんな下宿屋と貸間に變つて居る處だつたが、母はそつと邊りを見廻した後に、或る家の中に隠れた。

母が這入ると、クライドは其の家に近づいて、しげくと家の様子を眺めた。一體母は、此の中で何をしてくれるのだらう？ 誰に會ひに来てるのだらう？ 彼には自分乍ら、自分の烈しい好奇心を説明し得なかつたが、既に往來でエスタに會つた事から考へて、これは屹度、エスタに關係がある事だと感じないで居られなかつた。その上にあの手紙、あの百弗、あのモントロース街の貸間の事があるではないか？

ビュードロイ街を隔て、其の家から斜めの路傍に、一本の大きな幹の樹木があつた。今はもう冬風に葉を落し盡されて居たが、此の木とそれに密接した一本の電柱とが、ほどよい隠れ場所を作つてゐた。クライドは其の蔭に立つて、向ふに氣付かれないで其の家の全景を眺める事が出来た。見ると、表窓の一つを通して、母がひどく落着いた様子で動き廻つて居る。而も暫くすると、驚いた事には、エスタが出て来て、窓側に何かの紙包みを置いたではないか。彼女は、軽い上衣か、さもなくば肩掛けの様な物を羽織つて居るらしかつた。今度こそ、彼の眼に間違ひはなかつた。彼はそれがエスタである事に氣付き、更に母が彼女と一緒に居る事に氣付くと、本當に驚いて了つた。だが、何だつて、此の街に歸つて来て居乍ら、こんなにして隠れて居なければならぬのだらう？ 彼女と一緒に逃けたあの亭主に棄てられたのだらうか？

不思議でたまらないクライドは、暫く母が出て来るのを待つて、その後でエスタに會つて見ようと思つた。彼はエスタに會ひたくて堪らなかつた。これ等總ての神祕を知つて見たくて堪らなかつた。彼は、自分がエスタが好きだつたことを思ひ出し、こんな處に隠れて居る不思議さを考へ乍ら、待つてゐた。

一時間許りして、とうとう母が出て来たが、彼女の提けてゐるバスケットは、今度ひどく軽さうであつた。彼女は、此の前の通りに、そつと邊りを見廻したが、その顔には、此の頃の例で、何か惱まし氣な、おずくした様子が見えてゐた。

クライドは、ビュードロイ街を自分の家の方へ歸つて行く母を暫く見送つてゐたが、やがてその姿が遠ざかると、木蔭を出て其の家に這入つて行つた。豫期した通りに、其處には幾つかの部屋が並んで居て、扉口に名刺などが貼りつけてあつた。エスタの部屋が表通りの南寄りにある事を知つてゐた彼は、直ぐ其處に行つて扉を叩いた。と、軽い足音が部屋の中へ起つて、何かの用意でもするらしく、一寸待たした後に、僅かに扉を開いてエスタの顔が覗き出た。最初は一寸をかし味を浮べてゐたが、直ぐに驚きの叫びを擧げると共に、すつかりあわてた様子を示した。警戒を解いた彼女は、同時に其處にクライドを発見したからである。忽ち扉が一ぱいに開かれた。

「まあ、ライド。どうして此處が解つたのよ？ 私、今も、あなたの事を考へてたのよ」

クライドは直ぐに彼女を抱いて接吻した。同時に、或る戦きと不満の感じと一緒に、彼女が非常に變つた事を感じた。彼女は瘖せて青ざめて、眼を窪ませて居たし、其の着物も昔の儘だつた。彼女は何處かいらくとして悲しさうであつた。それを見た時、クライドの念頭に先づ浮んだものは、彼女の夫は何處に居るのだらうと言ふ事であつた。何故此處に居ないのだらう？ その男はどうなつたんだらう？ 彼は邊りを見廻し、彼女の顔を眺めて、エスタが今不安と混亂との中に居る事を察した。彼女の口は、彼を笑ひ乍ら迎へたい思ひで半ば開かれて居たが、彼女の眼は、彼女が今、一つの問題を争ふとして居る事を示して居た。

「でも、私はあなたが此處へ来ようとは思はなかつたよ。あなた今——」

クライドが腕を解くと、彼女は早口にさう言ひかけたが、話してならない事を話し出して居る事に氣付いて、口をつぐんだ。

「うむ、お母さんだらう？ 會つたよ。だからこそ、姉さんが此處に居る事が知れたのぢやないか。お母さんが今此處から出て行くのを見たし、窓の中に、あなたが居るのも見えたからさ」(彼は母親をつけて来て、一時間も待つて居た事を知らせたくなかつた)「しかし何時歸つて来たの？ 僕達に

何も知らさないなんて、随分ひどいぢやないか。實際薄情だよ。黙つて行つて了つて、何ヶ月も留守にした上に、誰にも何にも知らさないなんて、随分ひどいや。せめて、僕だけにでも何か知らせて呉れてもよさうなものぢやないか。僕達これ迄、随分仲がよかつたんだもの」

クライドの眼には、何處か擲擲ふやうな、命令するやうな調子があつたが、彼女の顔には、困つたらしい様子が浮んでゐた。何と考へ、何と言ひ、何と答へたらよいか解らないらしかつた。

「私、今、誰が来たのだらうと思つたわよ。だつて此處には誰も来ないんだもの。でもクライド、随分あなた立派になつたぢやないの。着物も立派になつたし、脊も高くなつたし。グリーン・デビッドソンで働いてるんだつてね」

エスタが頼もし氣に彼を眺める様子は、クライドにもいくらか満足であつた。が同時に、彼女の此の状態から、彼の心を離すわけには行かなかつた。彼は彼女の顔や眼や、細肥りの身體から、眼を離す事が出来なかつた。その腰の様子は、やつれた顔の様子は、どう見ても不健康であつた。彼女は子供を生むのではないだらうか？——さう思ふと、再び、彼女の夫は何處に行つてのだらうと言ふ疑問が胸に迫つて来た。彼女の最初の手紙では、彼女は結婚する筈であつたではないか。しかも今、彼女が結婚して居ない事は明らかであつた。彼女は棄てられて、此の惨めな部屋に残されて居るのだ。

クライドはそれを見た。それを感じた。それを理解した。

だが、こんな事が彼の家族に起る事は寧ろ當然だと言ふ氣も、同時に、クライドの頭に浮んでゐた。彼自身は現に、世間に出て何者かにならうとして、スタートを切つた計りのところだ。エスタも亦、自分自身で何かをしようとして、其の最初の冒険の後に、此の結果になつたのだ。考へて來てクライドは、多少の不快と憤りを感じないで居られなかつた。

「こちらへ歸つて來てからどの位になるの？ エスタ」

何と言つていゝか解らないクライドは、ごまかす様にかう言つた。彼は、かうして姉に面と向つて立つて見て、自分の好奇心に軽い悔を感じた。何だつてあんなに母の後をつけたりしたのだらう？ 結果は唯、彼女を助けてやらなければならなくなる計りではないか。

「そんなに長い事ではないのよ。一月位になるかしら。そんなものだわ」

「さうだらう。僕が姉さんに十一番街で遭つたのが、矢張り一月位前だつたもの。本當だよ」エスタの顔色が變つたのを見て、一寸喜ばし氣に言つた。彼女も直ぐ背いて見せた。「僕は確かにさうだと思つたから、その時、お母さんにさう言つただけでも、お母さんはさう思はないらしかつたんだ。尤もお母さんは、僕が想像したほど驚かなかつたよ。しかし今になつて、僕にもすつかり解つたよ。

お母さんはあの時、姉さんの事を話して貰ひたくなかつたんだね。しかし僕はこれで、僕が間違つてなかつた事が解つちやつたよ」

彼は自分の目敏さを誇る様に、エスタの顔を見詰めたが、言つて了ふと何だか氣まづい思ひがした。

そんな事は、此の際のエスタに何の助けにもならない様に思へたからだつた。

しかし、自分の境遇を話す可きかどうかを知らない彼女は、どう言つていゝかに迷つてゐた。既にクライドは、彼女が危期に迫つてゐる事を知つて居る筈だから、何とか言はなければならぬと思つた。そこでとうとう、母親を辯護するよりも寧ろ自分を辯護するやうに、エスタは言ひ出した。

「でもお母さまは御氣毒なのよ。お母さまがあんたに何もおつしやらないと言つて、お母さまを變だなんて思つてはいけない事よ。どうなすつていゝのだから、お母さんにも解らないのだもの。無論みんな私の罪だわ。私さへ家を出て行かなかつたら、こんな間違ひはなかつたんですもの。それでなくともお苦しい中を、またこんな困つた事が起つて來たのですもの」

彼女は突然、向ふを向くと、その肩が震へ始めた。頭を低くうなだれて、両手で顔を被つてゐた。クライドは彼女が黙つて泣いてゐるのを知つた。

「姉さん、どうしたのよ？」と、クライドは直ぐに彼女に寄つて行つて叫んだ。「何だつて泣くのだ

い？ 一緒に行つたあの人は結婚して呉れなかつたの？」 エスタは頭を横に振つて、更に烈しく泣いた。その瞬間に、クライドには、姉の現状の心理學的、社會學的、生物學的の重要さが解つた。彼女は今妊娠をして居るのだ。而かも、金もなければ夫もないのだ。だからこそ、母が部屋を探したり、百弗の金を借らうとしたりしたので。彼女はエスタの事を恥ぢたのだ。唯に家族外の人に對して恥ぢた計りでなく、クライドや、ジュリアや、フランクに知れる事さへ恥ぢ、その彼等に及ぼす影響を恥ぢたのだ。母がそれを隠さうとして、色々な作り事を言つたのもその爲めだ。而かも氣の毒にも、隠し通す事が出来なかつたのだ。

さう考へたクライドは、再び或る困惑に陥つた。それは、唯に姉の行状を、それが彼の家族に及ぼす結果について計りでなく、此の事件に對する、母親の多少不道徳的な態度について感じたのであつた。無論母は、積極的に嘘をついたのではないが、しかしこれを隠して居たことは事實だからである。しかし同時に、クライドは、母に多少の同情をも持たないで居られなかつた。かうした種類の嘘は、たとひ誠實な宗教的な人にとつても、止むを得ない事だと思はれたからである。實際、世間に知られては悪い事なのだ。彼自身にしても、出来るならば、エスタの事を隠したいではないか。世間は何かと思ふだらう？ 何と言ふだらう？ 彼等の家族は、何時でもこんなに下等なのだらうか？——こんな

事を考へ乍ら、クライドは泣いて居るエスタを見詰めてゐた。しかもクライドが恥辱に惱んで居る事に氣付いて、彼女は一層烈しく泣いた。

「しかし、そんな事は何でもないさ。姉さんがその人を好きになればこそ、一緒に出て行つたのぢやないか」言ひ乍ら彼は、自分とホルテンスとの事を考へて居た。「僕は姉さんが可哀想なんだよ。本當に可哀想なんだよ。しかし、そんなに泣いたつて、何にもなりやしないぢやないか。何アに、世間にはいくらも男があるんだもの。その中に旨く行くやうになるよ」

「解つてるわよ。解つてるわよ」とエスタは泣き續けた。「唯、みんな私が馬鹿だつたからよ。私も随分苦しかつたわ。そして今は、こんな苦しみを、お母さんやあなたにまでさせるんですもの」彼女は咽んで、暫く言葉を切つた。「私を連れ出したあの人は、私を一文無しにして、ピッツバーグのホテルに棄て、行つたのよ。あの時若しお母さんが助けて下さらなかつたら、私はどんな事になつたでせう。私が手紙を出すと、お母さまは直ぐ百弗のお金を送つて下さつたんですもの。私は、あの人に棄てられた事なんぞ、家に知らせたくないから、出来るだけ自分で働かうと思つて、暫く料理屋で働いてたのよ。だが、段々身體が悪くなるし、結局はどうにも出来なかつたものだから——」
エスタはまた泣き始めた。クライドは母が彼女の爲にした事を考へて、自分も彼女を助けねばなら

ないと思つた。エスタも氣の毒だが母も氣の毒だ。いや、母の方がもつと氣の毒だ——と思ひ出した。エスタには世話をして呉れる母があるけれど、母には世話をして呉れる人が誰も居ないではないか。「私も未だ暫くは働けないの。お母さんも、あなたやジュリアやフランクに知らせたくないから、家へ歸つてはいけなとおつしやるの。無論、それが本當だわ。しかし、お母さまも私も無一物ぢやないの。私、此處に居て、時々、本當に淋しくなるわ。本當に私は馬鹿だつたのだもの」

再び彼女が咽び始めるのを見ると、クライドも一緒に泣きたくなつた。實際、人生には、こんなにつらい時もあるのだ。彼だつて此の長い年月、どんなにつらかつたらう。近頃まで無一物だつた彼は、絶えず家を逃出す事計り考へて居たではないか。それをエスタがやつたのだ。そして此の結果が來たのだ。クライドは、エスタが道傍でオルガンを弾き乍ら、無邪氣な顔で讚美歌を唄つて居た頃を思ひ出した。あゝ、人の世はつらい。何と言ふ心ない世の中だらう？ 何と變に移り變る世間よ！

クライドは暫く部屋の中を見廻して居たが、やがて、彼女が一人きりで居ては悪いから、之から時々訪ねて來る事や、自分が此處に來る事を母に話さないで置く事や、彼女に若し何かの必要があつたら、彼に知らせるがい、事などを話して、其の部屋を出た。彼はホテルの方へ歩き乍ら、絶えず彼女の惨めな有様を思ひ續けて居た。彼は母について行きさへしなければ、何も知らないで濟んだのにと

思つた。しかし又、ついで行かなかつたとしても、最後には解つたやうとも思へた。母が彼に隠し得ない事は明らかであつた。恐ろしくは、結局、お金を呉れると言つて來たに違ひない。だが、それにしても、あの姉を一文なしにして、見知らぬ街に見棄てるなんて、何と言ふ畜生だらう。彼は數ヶ月前、グリーン・デビッドソンの客室に、勘定まで押つけられて棄てられてゐたあの娘の事を思ひ出した。彼にしても、他のボーイ達にしても、あの時、何と言ふ猥褻さで、此の喜劇を噂し合つた事だらう。しかし、これが、さうだ、これが彼自身の姉だつたのだ！ 男は決して、姉を好いては居なかつたのだ！ だが、かうして明るい外に出て、人々が走り廻つて居るのを見ると、彼には、もう先刻ほど深く彼女の怖ろしさを感じなくなつた。まア、まア、さう悲觀したものでもない。その中に、エスタにも何かの道がつくだらう。その中に丈夫になつて、萬事がうまく納まるだらう。しかし、彼がこんなに貧しい家庭の一員で、大道説教をしたり、家賃が拂へなかつたり、敷物や時計の押賣りをしたりする父の子であり、男と逃げてこんな結果に陥つたエスタの弟である事を考へると、彼の氣持ちは腐つた。

これらの事の結果として、クライドは、これ迄にも増して、兩性の問題を考へる様になつたが、それは決して道學的なものにはならなかつた。無論彼は、かうしてエスタを棄て、行つた男に對して憤りを抱いたが、しかし彼女にも全然罪がないとは言へないと思つた。彼女の話に依ると、その男が此の街に居たのは、あの事件の前年、唯一週間だつたと言ふではないか。その時に彼は、彼女の前に現はれたのであつたが、翌年二週間、男が再び此の街に來た時に、彼女が進んで彼に會つたらしかつた。しかし、ホルテンスに對して、現在の様な氣持であるクライドには、性的關係そのものに何かの間違ひがあるとは、言ひ得ないのであつた。

クライドの見る處では、問題はかうした行爲そのもの、中にあるのではなくして、寧ろ彼女の無知や無思慮から來た結果にあると思へた。若しエスタがその男の事をもつとよく知つて居て、相手があんなつもりで接して來るかを知つて居たならば、彼女は恐らく現在の悲境には陥らなかつたであらう。確かに、之が若しホルテンスやグレタやルイスであつたならば、彼等は決してエスタの様な境遇に身を落す事を許さなかつたであらう。そんな眼に合ふには、彼等は餘りに狡かつた。エスタは今、その酬ひを受けてゐるのだ。彼女は、今少し上手に事を處理すべきであつたのだ。そんな事を考へるに従つて、彼のエスタに對する態度は、多少嚴格になつて行つたが、その感情は決して無頓着なもの

ではなかつた。

しかし、今クライドの上に、非常な力を持つて迫つて來てゐるものは、彼のホルテンス・ブリッグスへの情熱であつた。彼は數回の接觸の後、彼女の中に彼の求めて來た娘の完全な實現を見る様になつた。彼女はそれ程明るくて美しくあつた。彼女の眼には踊る火があるやうに見えた。その堪らなく可愛らしい唇や、無頓着らしく見える眼付は、時に彼を惜けさせましたが、また烈しい欲望の火を燃え立たせもした。それは苦しく切ない情熱であつたが、若さの中に掻き立てられた彼女への遠慮と尊敬との念は、抱擁や接吻以上には彼を進ませなかつた。しかも彼女が常に求めて居る種類の青年は、彼女をしてかうした見せかけの高潔や優越を振り棄てさせて、無理にも男に従はせるやうな、あの種類の青年であつた。

事實、彼女は、彼に對して、好きと嫌ひとの中間をふら／＼して居た。従つて、彼も亦、自分の地位をどう考へていゝか解らなくて、進んで彼女の手を執るわけにも行かず、と言つて彼女を全然斷念する氣持にもなれないのであつた。彼等は時々、夜の會だの、芝居だの、食事だのに行つた。さうした時の彼女は、いつも素直で優しさに振舞つて居たが、其の晩も殆んど夜中になつて、彼女の家の前まで送つて行くとか、彼女の友達の家の前まで行くとかすると、忽ち彼女は立止つて、何の辯解も

しないで、たゞ、冷淡に握手をするとか、形ばかりの接吻をするとかして、彼を追拂ふやうにするのであつた。その時若しクライドが、無理にも彼女を自分の意に従はせようとするならば、彼女は意地悪猫が怒つた時のやうに、膨れ面をして、彼のどんな要求にも反対する氣勢を示すであらう。それは、彼女自身にも解らないやうな、烈しい嫌悪に變るのである。しかも彼女に惚れきつて居るクライドは、彼女に棄てられる事が怖い計りに、強ひても彼女と別れて、暗い氣持で歸つて行くのである。

しかし、かうした目に合ひ乍ら、彼女の顔を見ないで居られない彼は、彼女と會へさうな處へは何處へでも出掛けて行つた。實際彼は、殆んど毎日のやうに、エスタに關する猥褻な夢計り見るのであつた。彼は、床に這入ると、彼女の事を考へる。彼女の顔、口や眼の表情、しなやかな姿、踊つたり歩いたりして居る時の身振り——さうしたものが、映畫のやうに彼の眼の前をちらつく。夢の中の彼女は、何時でも優しく彼に寄り添つて、全身を彼に委せて居る。しかも最後の危期に来て、彼女の全身が彼のものになりさうになると、眼が醒めて、彼女の姿は消えて了ふ。——總ては唯一つの幻に過ぎないのである。

だが、どうかすると、彼が成功するかも知れない理由も、相當になくはなかつた。第一に彼女は、彼と同様に、貧乏な家の娘であつた。父親は機械職工であつたし、母親は殆んど無一物の家の娘であ

つた。彼女は、子供の時から、やくざな飾り物や駄菓子の外には買つて貰つた事がなかつたし、その交際も、僅かに牛肉屋やパン屋の小僧共と接觸するに過ぎなかつた。だが、さうした連中でさへ、彼女に夢中になつて、中には彼女の歡心を得る爲めに泥坊さへしかねない連中があつた。

自分で働ける年頃になつてから、彼女は次第に現在のやうな青年や大人と接觸するやうになつたが、その結果、彼女は、自分の全部を相手に許さなくても、少し上手に立廻りさへすれば、相當な物をせしめる事が出来る事を知り始めた。しかも、生れつき官能的で、快樂好きの彼女は、自分の快樂の爲めに、自分の利益を犠牲にするやうな事は欲しなかつた。彼女は、自分の利用したい人が好きになつて、時々困る事があつたが、同時にまた、自分が好きになれる人に對しては、責任を負はないやうに心掛けてゐた。

クライドに對しては、彼女はあまり好きではなかつたが、しかし彼を利用したいと言ふ欲望を棄てる事が出来なかつた。クライドが、彼女の喜びさうな物は何でも、例へば手靴であるとか、スカートであるとか、財布であるとか、手袋であるとか——何でも喜んで買つて呉れると言ふ事は、彼女を少からず喜ばせて居た。が、同時に、何時か一度は彼に身を委さねばならない事——さうしなければ完全に擱むことが出来ないことは、始めから解つて居た。しかし、かうしてクライドが、惜しげもなく

彼女の爲めに金を使ふのを見た彼女は、今少し金を出さして、例へば贅澤な夜會服だとか、帽子だとか、毛皮の外套だとか、大きな店の飾り窓にさらしてあるやうな物を、買はせてやりたい欲望にかり立てられる事も、決して稀ではなかつた。

クライドが、姉のエスタに會つてから間もない或る日の事、同じ百貨店に勤めて居るドリスと言ふ娘と一緒に、バルチモア街を歩いて居たホルテンスは、一軒の手頃な毛皮屋の店先で、海狸の毛皮で造つた一着のジャケットに眼を止めた。それは非常に高價な物とは見えなかつた。高くて百弗を越えない物らしく見えたが、それを着たらどんなに立派に見えるだらうと思へる様な品に、彼女の眼には見えた。

「まア、何て素晴らしい外套だらう。こんな様な外套、私生れて始めてだわ。ねえドリス、あの袖口を見てご覧よ。いゝ色ぢやないの。それにあのポケットさ。毛の色と言ひ、縞と言ひ、何とも言へない程綺麗ぢやないの。私もう何時からか、こんな外套の事を考へて居ただけけれど。まア、欲しいわねえ」

丁度その時、此の店の主人の長男のイサドア・ルベンスタインが、店先に立つて居たが、彼女が手を叩いて騒いで居るのを見て、これは少し高過ぎるわいと考へて居た。少く共二十五弗か十五弗は此の

娘には高過ぎる。だが、こんな娘だから、此の外套一枚の爲めに身を賣るやうな事もしかねないかも知れない。——等と密かに考へて居た。しかし、ホルテンスには、晝休みの時間が過ぎて、店に歸つて行つてからも、此の外套の事が一刻も念頭を去らなかつた。で、翌日またその店先に出掛けて、今度は一人で暫く眺めてゐたが、どうしてそれを買つたものだから、見當がつかなかつた。彼女はそれが非常に安かつた時の事を考へ、ほんやりと思ひを廻らして居たが、その日もルベンスタインが店先に立つて居るのを見ると、とうとう堪らなくなつて、店先に這入つて行つて了つた。

「いらつしやい。あの外套を御覽になりたいでせう」ルベンスタインは抜からずさう言つて迎へた。「いや、あれに眼をお付けになるんでは、仲々眼が肥えていらつしやいますですよ。あんな高尚な外套は、私の店でも始めて、すからね。あれこそ、本當に立派だと言へる外套ですよ。それに、あんな様な綺麗なお嬢さんには、どんなによく似合ふか知れませんか」言ひ乍ら彼は、飾り窓から取出して、彼女に見せるようにしたが、貪欲らしい眼の色を浮べて、「お嬢さんは、昨日もあれを眺めていらつしやいましたですね」と言つた。

「ええ」
ホルテンスは、何だか多少望みが出て來たやうな氣がして、曖昧に答へた。

「まア、
ねえ」

「いや、あの時、私もさう言つた事ですよ。あのお嬢さんには、本當の外套の良悪が解るんだつてね」

さう言はれると、ホルテンスは我にもなく嬉しくなつた。

「まア、一寸見て御覽なさい。此のキャンサスの何處の店に、これ程の外套がありますか。此の縁の絹はみんなマリソンの絹ですし、此のポケットを御覽なさい。それから此の釦を。別誂へですからね。何處の店に行つたつて、こんな外套はありませんよ。此の一着だけをわざ／＼手前共で裁たして、二度と再び同じ物は作らないことにしてるのですからね。まア、手前共の店でお客様を保護してるようなものですよ。まア、こちらに入らしつて御覽なさい」(彼はホルテンスを鏡の前に連れて行つた)

「實際、之をお召しになると、丸でお人が違つたやうに見えますからね。まア、一つ、着て見て御覽なさい」

ホルテンスは、巧みにあしらはれた光線の前で、此の外套を着た自分の姿を見る特權を得た。彼女は頭を振つて見たり、曲けて見たり、小さい耳を毛皮の中へ埋めて見たりして、しげ／＼と眺めて居たが、ルベンスティンも、その側で少からず驚いて、揉手をして居た。

「如何です。何か御不足がありますか？ あなたに打つてつけぢやありませんか。こんな外套は、

此の街にはもう御座いませんよ。他にあつたら、これを差上げてもし、位のもですよ」

彼は近々と寄つて、彼女の肩を叩いて見せた。

「全くよく似合ふわね。私には矢張りこんなのがいゝのね」彼女は側に番頭がある事も、こんなに欲しさうな顔をしては金をほられる事も忘れて、尙も惚々と自分の姿を眺めて居たが、やがて言ひ添へた。「お幾らですの？」

「實は、二百弗なんで御座いますが」ルベンスティンは狡さうにさう言つたが、ホルテンスの顔にあきらめの影がかすめるのを見ると、急いで言ひ足した。「しかし、手前では無論そんなには戴きません。百五十弗が手前の御値段でございます。しかし、これを若しジャレクの店でお買になるとすれば、どうしてもそれだけは戴かなきやなりませんからね。いや、手前の店は、これで地所持で御座いますから、高い地代を拂はないで済むからで御座います。普通の値段から言へば、どうしても二百弗戴かなきやならないので御座いますよ」

「まア、何て高いんでせう」ホルテンスはその外套を脱ぎ始め乍ら、悲しさうに叫んだ。「だつて、ビツグの店だつたら、それだけ出せば、貂の外套だつて買へるぢやないの」

「いや、御尤ですが、しかし此の外套は違ひますですよ。まア、今一度よく御覽になつて下さい。此

の色で御座いますからね。之と同じ外套があのお店にあるとおつしやるので御座いますか？ 若しあつたら、私の方で買取つて、あなたに百弗で賣つて上げてよござんすよ。何しろこれは別誂で御座いますからね。この夏の未だシーズンに入らない前に、紐育にあつた一番新しい外套の型を真似たものですか。

「どちらにしても、百五十弗ではとても私には拂へないから」

彼女は悲しげに言つて、自分の古い木綿のジャケットを着て、扉口の方へ行かうとした。

「一寸まアお待ち下さい」ルベンスタインは、何處かの男にでも買つて貰はなければ、百弗でも此の女には高過ぎると思ひ乍ら、如才なく呼止めた。「いや、只今も申上げたやうに、此の外套は本當は二百弗で御座います。手前共では、百五十弗で差上げてもし、事になつて居るので御座いますが、折角のあなたの思召しでございませうから、百二十五弗だけお持ち下されば、之を差上げることに致しませう。あなたの様な美しいお嬢さんですもの、それッほちの金の事ならば、どんな男だつて、自分で買つてあなたに差上げさうなものではありませんか。私でも、あなたのお情が得られることならば、喜んで買つて差し上げますですよ」

彼は取入るやうに、彼女の顔を覗き込んだ。その言ひ分に、ホルテンスは多少、むつとして、から

だを引いたが、しかし、全然不愉快なわけでもなかつた。が同時に、物さへ呉れれば、誰にでも身を委せるやうな彼女でもなかつた。委せるならば、誰か彼女の方でも好いてる人でなければならぬ。少くとも、彼女の奴隷になる男でなければならぬ。

その瞬間に、彼女の頭には、此の小外套を買つて呉れさうな色々な男の姿が走り過ぎた。彼女は、オルフイアの煙草店に居る例のチャアリー・ウイルキンスの事を思ひ浮べた。確かに彼は、どんな事でもして呉れさうであつたが、しかし、して呉れたが最後、どんな報酬を求められるかも知れないと思へた。

ロバート・ケーンも矢張り彼女に野心のある青年であつたが、何しろ或る電気會社の受付けを勤めて居るやうな男であつたから、その収入の點で、とても駄目らしく思へた。絶えず將來の事ばかり話して居る彼は、その上に酷く貯め込み屋でもあつた。

その他には例のベルト・ゲットラアが居たが、これも唯一緒に跳ね廻つて居る計りで、こんな時に頼りになる男ではなかつた。彼は靴屋で、一週二十弗位は儲けるらしかつたが、自分の金に對しては吝嗇であつた。

そこで、彼女の爲めに喜んで自由に金を使へる唯一の男として、クライド・グリフィスの事が頭に

浮んだ。彼女は素早く彼の事を考へて見た。しかし、幾ら彼だつて、これ迄あんなに冷淡に扱つて来た彼女に對して、即座にこれ程の大金を出すなんて事があり得るだらうか？ 彼女には自信がなかつた。が、それでも、かうして此のコート的美しさと、その値段とを思ひ比べて居る彼女の頭には、クライドの事計りが浮んで来た。

「いや、お嬢さん」さうした彼女の氣持を薄々察し乍ら、彼女を見詰めて居たルベンスタインが、やがてかう言ひ出した。「如何でせう。あなたも此のコートがお好きなんですし、私の方でも何とかしてあなたにお賣りしたいと思つて居るので御座いますから、かう言ふ事に致しましたら、此の二三日の中に、百十五弗だけ持つて来て戴くので御座います。此の二三日の中に——月曜でも、水曜でも、金曜でも、何時でもよろしう御座います。その時に、この品が未だ此の店にありましたら、あなたに差上げる事に致しましては。いや、もつとまけて、今度の水曜か金曜日まで、私が品物をお預り申して置く事に致しますが、如何でせう？ さうすれば、どなたか、何とかなさりさうなものぢや御座いませんか」彼は、肩をゆすり、作り笑ひをして、大變な厚意を示して居る様な様子を見せた。

ホルテンスはやがて、其の店から出て来たが、此の外套が百十五弗で買へるならば、大した拾ひ物であるやうな氣がして居た。あの外套さへあれば、彼女はカンサス第一の美人になれると思つた。あ

あ、百十五弗の金さへ、次の水曜か金曜までに出来るのであつたら！

十五

そのうちに、彼女の最後の讓歩を求めクライドの氣持は、日に日に募つて来て居たが、ホルテンスは、他の二人には許して居る最後のものを、クライドには許さなかつた。二人が會へば、クライドは何日でも彼女の最後の奥底を知らうとして、言ひ争つた。彼女が若し多少でもクライドを好いて居るのならば、何故あんなに色々の事を拒むのだ。何故望みのまゝに接吻をさせないのだ。何故満足が行くまで抱擁させて呉れないのだ。他の二人とは何時でも逢引の約束をして居乍ら、彼に對してだけは、何故あんなに拒んだり、すつほかしたりするのだ？ 他の二人との關係は、一體何處まで行つて居るのだ？ 彼女は本當に彼よりも他の連中を好いて居るのだらうか？ 二人は何處に行つた時も、此の最後の問題に觸れるのであつたが、何時でもいゝ加減にごまかされて了つて居た。かうして彼が酬ひられない欲望の爲めに苦しんで居るのは、彼女にとつての樂しみであつた。彼を苦しめますも喜ばすのも、皆な自分の心一つにあるのだと考へる事が、彼女には快樂だつたのである。

しかし、此の外套の問題が起つて來ると、彼女の彼に對する態度は、急に變り始めて來た。彼女が

クライドに、今度の月曜日までは會へないと言つたのは、未だ昨日の朝の事であつたが、かうなると彼女は、何とかして彼に會つて、直接交渉を始めようと、熱心に思ひ始めた。何とかして彼に、その外套を買はせようと、固く決心をしたからである。勿論、それには、彼女の態度を極端に變へねばならなかつた。もつと優しく、もつと懇ろにしてやらねばならない。無論、彼女から進んで彼女の全部を委せようとは思はなかつたが、根本的にはその決心もついて居た。

彼女は、それをどうして實行に移すかについて、暫く考へて居た。どうしたら今日明日の中にクライドに會へるだらう？ どんな風に言つて、其の金を貰ふか借りるかしようか。實際、彼女はその金を借りて、後から少しづつ返して行かうかと思ひもしたが、又同時に、その外套さへ手に入れれば、その金を返す必要がなくなると思つたのだつた。若しクライドが、今直ぐ出す事が出来ないと言ふならば、ルベンスタインと約束して、何度かに割つて拂ふ事も出来さうに思つた。さうする爲めには、あのルベンスタインを蕩らし込む必要があると考へて、今日あの店で、彼が言つた事を思ひ出したりした。

そこで、ホルテンスが先づ考へた計畫は、ルイス・ラツタラアをそのかして、今晚クライドと今一人のスカルと言ふ男を誘つて、例の煙草屋の番頭と行く筈であつた或るダンスホールに、一緒に來

させる事であつた。無論彼女は、自分の約束の男が來られなかつたと言つて、ルイスやグレタ達と一緒にになる。さうすれば、クライドと一緒にルベンスタインの店に行かれる機會も出来るわけだと考へたのであつた。

しかし、蜘蛛の様な性質を持つてゐるホルテンスは、こんな事をすれば、ルイスがきつとクライドやラツタラアに説明して、今夜の首唱者はホルテンスだつたと言ふに違ひない事を看とつた。さうすれば、其の後になつて、クライドがあゝの外套の事を、ルイスに話すかも知れない危険がある。これはホルテンスの忍び得ない事であつた。彼女は、自分の友達達に、その外套の出所を知らせたくなかつたのである。そこで彼女はルイスやグレタの手を煩はす事を止す事にした。

かうしてホルテンスが、途方に暮れて居る時に、偶然にも仕事の歸りに此の店の前を通り掛つたクライドが、彼女の店に這入つて來たのである。彼は、次の日曜日の時間を打合はせようと思つて來たのであつたが、ホルテンスは、彼を見ると心から喜んで、ひどくなつかしさうな笑を浮べて彼に手を振つた。その時彼女は、一人の客を相手にして居たが、直ぐに用事を済ませてから彼の方に近づいて來た。

「まあ、私今もあなたの事を考へてゐたのよ。あなたも私の事を考へてゐて呉れた？」言つてから彼

女は聲を落した。「私と話してやるやうな様子をしては駄目よ。監督がそこに歩いてるから」

思ひ掛けない彼女のかうした態度は、忽ちクライドを元氣にした。

「僕があなたの事を考へて居なかつたのですつて？ あなたの他に誰の事を考へるんです。ラツタラアの言ひ草ではないが、僕はあなたに首ツたけになつてるんぢやないですか」

「あゝ、ラツタラア」ホルテンスは不興氣に口をつき出して言つた。不思議な事だが、彼女はラツタラアを餘り好かないのであつた。「ラツタラアなんて駄目よ。自分では粹な男か何かだと思つて居るけれど、あんな男に惚れる女なんか一人も居ないわよ」

「いや、トムはいゝ男ですよ。あれはあいつの癖なんだけど、本當はあなたが好きなんですからね」

「そんな事はないわ。でもラツタラアの事なんぞどうでもいいけれど、あんな、今晚の六時にはどうしていらつしやるの？」

「ほう、では今晚空いてるんですね。畜生ッ。僕は未だ今日働かなくちやならないんです」

實際彼は、溜息をついた。偶々ホルテンスと一緒に一晚を過さうとして居るのに、その機會を利用する事が出来ない事を考へて、彼はすっかり悄けて了つた。しかし、彼の此の烈しい絶望を見て、ホルテンスは少からず喜んだ。

「私も今日は約束があつただけで、あなたの時間があいてれば、すッほかしてもいゝと思つてたの」喜びの餘り、クライドの胸は烈しく浪立ち始めた。

「糞ッ、僕も今日働かないでいゝんだつたらなあ。でも、明日の晩はどう？ あすの晩なら、僕自由なんだけど。それから、此の次の日曜日の午後、自動車で遠乗りをしようと思つてるんだけど、あなたの都合はどう？ それを聞かうと思つて、今寄つて見たんですが、實は、ヘッグランドの友達に、バツカードを一臺持つてる奴があるので、今度の日曜に、それに乗つてエキセルシャアに行く事になつてるのですが、その時一緒に行く連中を作れと言はれてるんですよ。ヘッグランドも、あれで仲々愉快な男ですよ。しかしまあ、其の事は後でも話せますが、明日の晩はどうです？僕は空いてるんですが」

ホルテンスは監督の眼を誤魔化す爲めに、クライドにハンカチを見せるやうな恰好をしてゐるが、心の中では、かうして此の上、二十四時間を無意味に延ばさねばならぬ不幸を考へてゐる。が、同時に、明晩會ふ事が在外難かしいと言ふ事をも、クライドに思はせようと努めて居た。

「此のハンカチを見てるやうな恰好をして、頂戴」小聲で言つておいて、「私、明日は他に約束があるのよ」と考へ深さうに言ひ續けた。「その約束を變ることが出来るかどうか未だ解らないのだけれど、

でも待つて頂戴。——あ、い、わ。兎に角、かうして置ませう。明日の晩、六時十五分——いや

六時半があんたには都合がい、のだね。——では、六時半に十五番街と本通りとの角の所へ来て、

頂戴。私も出来たら行きますから。でも、御約束は出来なくてよ。多分行けるだらうと思ふのだけ

ど。では、よくつて？」

彼女の取つて置き、笑顔を見ると、クライドは嬉しさに我を忘れた。とう／＼自分の爲めに、他の男との約束を破つて呉れるのだ。と考へると、嬉しくて堪らなかつた。實際彼女の眼は、彼への好意の暖かさで輝いて居た。

「大丈夫、必ず行つてますよ。しかし、其の時のことで、僕に一つお願いがあるんだけど」

「お願いつて何アに？」

「あの、赤リボンのついてる黒い帽子を被つて来て呉れない？ あれを被つてると、素敵なんだがな

ア」

「まア、お安い御用だわよ」彼女は笑ひながら言つたが、直ぐに聲を落して、「でも、もういらつしやい。監督がまたやつて来たから。後で屹度ぐすぐす言ふのよ。でもい、わ。六時半よ。い、？ 待遠しいわね」

言ひ捨て、彼女は直ぐ、新しい一人の客の方に向いた。クライドは、豫期しない喜びに満たされて、得意然と近くの出口に出て行つた。

思ひがけない好意を見せられて、別に酷く怪しいとも思はなかつたクライドは、翌晩の六時半になると、きつちり其の場所へ行つてゐた。やがて、アーク燈のまぶしい様な光の中に、彼女が現はれて来た。見ると、彼女は、彼の好きな帽子を被つてゐた。しかも、これまでになく、溢れるやうな愛嬌を湛へてゐる。クライドは、自分の好きな帽子を被つて来て呉れた嬉しさを口にしようと思つたが、その先に彼女が口を切つた。

「誰かさんには屹度い、事があるんだわ。だつて、他の約束をすつほかして、お好みの帽子を被つて来て上げた人が居るんですもの。どうしてこんな氣になつたのだから、私にも解らないのよ」

クライドは大勝利を得た氣がした。いよく自分も此の女の戀人になれるのかと思つた。

「いや、しかし、その帽子は本當によく似合ふんですよ。どんなに可愛く見えるか、あなたには解らないんですよ」

「まア、こんな使ひ古しても？ あなたを喜ばせるなんて、随分わけないわねえ」

「それに、あなたの眼はまるで黒天鷲絨のやうなんですもの。實際素敵ですよ」

彼はさう言ひ乍ら、グリーン・デビッドソンの廣間にかゝつて居る黒い天鵞絨を思ひ出してゐた。
「でも今晚は、それがあんだのものになつたのだからいゝぢやないの。私、今日はいゝ事をして上げ
るつもりなのよ」

それに對して、クライドが何か言はうとしたが、彼女は直ぐ、全く出鱈目の作り話を話し始めた。
彼女は今夜、トム・ケアリーと言ふ或る紳士と或る約束をして居たのであつたが、それを打つちやつ
てクライドに會ひに来たと言ふのであつた。彼女はケアリーを尋ねて行つて、今夜は會へないと言ふ
事を知らせたのであるが、先刻、使用人の出口から外に出て見ると、此のケアリーが、すつかりおめ
かしをして、自分の兩自動車を持つて、待受けて居るのだつた。しかし彼女は、彼に攔まると時間が
遅れると思つて、そつと男の眼をかすめて逃出して來たのだと言ふのであつた。

「そこで、ホルテンスさんの小さいお御足が、今、此の町の燈の中できら／＼してると言ふ事になつ
たわけなのよ」

彼女は面白さうにそんな話をした。クライドは無論、その話を信じて了つた。

間もなく彼等は、或る料理屋に行くつもりで、ウィアンドットの方へ歩いて居た。道々、ホルテン
スは、ちよい／＼と飾り窓の前に立止つては覗き込んで居たが、やがて小外套が一着ほしいと言ふ

話をし始めた。今着て居るのはもう古くなつたから、是非、一つ買はなければならぬと言ふのであ
つた。しかしクライドには、それを自分に買へと言ふのであるか、買つてやつたら二人の關係がもつ
と進行すると言ふ意味であるのか、まだまるで見當がつかなかつた。しかし、その中にルーベンスタ
インの店が段々近づいて來た。そこには相變らず、きらきらと色々の物が並べ立て、ある中に、例の
外套もそのまゝに置いてあつた。ホルテンスは、豫ねて計畫して置いた通りに、その前に立止つた。

「まア。何て可愛い、小外套でせう」彼女は始めて此の外套の美しさに打たれたやうに、有頂天にな
つて叫んだ。「まア、本當に綺麗ぢやないの。あんだ、こんな外套を見た事があつて？ まア、あの襟
だの袖だのポケットだのを見て御覽なさいよ。にくらしい程粹ではないの。あんな外套で、私の小さ
い手を暖める事が出来たらどんなでせう？」

言ひ乍らホルテンスは、クライドの顔を伺つた。

彼女の言葉に促されて、クライドも少からず珍らしさうにその外套を見詰めて居た。無論、素晴ら
しい外套であつた。しかし一體、幾ら位するのだらう？ こんな外套を、自分に買はさうとして居る
のだらうか？ だつて、少く共二百弗は取るに違ひないが、彼は、そんな大金の事は考へて見た事も
なかつた。無論、彼にそんな外套を買ふ金はない。殊に今は、エスタの爲めに餘分の金まで取られて

居るのではないか。しかもホルテンスの様子では、これを買はせる爲めに自分を連れ出したらしくも見える。考へて、彼は先づ寒くなるのを感じた。

だが、彼はまた、悲しい氣持で考へ續けた。——若しホルテンスが本當に之を欲しがつて居るのなら、彼女は屹度、誰かを見付けて、例へば今話して居たケアリーの様な男でも見つけて、之を買はさないでは置かないであらう。不幸にしてホルテンスは、さうした質の女なのだ。しかも、彼が買つてやる事が出来なくて、他の誰かを買つてやりでもすれば、彼女は必ず彼を輕蔑するにきまつて居た。

クライドの烈しい驚愕と不満とを見ると、彼女は直ぐ叫んだ。

「本當に私、こんな外套の爲ならば、どんな事でもするわよ」
彼女は、自分の深い企みをクライドに實行させるには、餘り露骨であつてはいけなと思つて居た。が、經驗のないクライドは、さう言はれても、彼女の意味がすつかりは解らなかつた。解つて呉れない方が有難いやうにも思へた。が、何れにしても、彼女が誰かに頼んで、何かの方法でそれを得ようとして居る事は、明かであつた。だが、自分はどうしたらいいのだらう？ 自分に金さへあれば、今夜にでも、明日の朝にでも、値段を聞いて買つてやるのだけど。だが、買つてやるとすれば、これ迄のやうに馬鹿にされてはゐない。此の外套を買つてやるからには、その報酬も貰はねばならな

い！

こんな事を考へ乍ら、彼は彼女の側で本當に身震ひをした。彼女は彼女で、その外套を眺め乍ら、これを買つて呉れなければもう最後だと思つて居た。彼女の思ふまゝにならないやうな男、なれないやうな男は、彼女に馬鹿にされるにも値しないのだ。

そのまゝ二人は、ギヤスピの料理屋に行つたが、食事の間にも、ホルテンスは、他の事は殆ど話さなかつた。何と言ふ立派な外套だらう？——それを着たらどんなに美しく見えるだらう？——そんな事計り話し續けてゐた。

「私、どうにかすれば、買ふ方法があると思ふの」彼女はとうとう大膽にそんな事を言ひ出した。私あの店に行つて相談をすれば、屹度相當な内金だけで賣つて呉れるだらうと思ふのよ。だつて、さう言ふ方法で買つた人が外にもあるんですもの」

彼女はクライドに絶望させない爲めに、そんな嘘まで言つた。しかし、此の法外な金で、すつかり脅えて居るクライドは、何と言つていゝか解らなかつた。彼には、その値段の見當さへつかない。或は三百弗もするかも知れない。しかも、後になつて拂へなくなるやうな物に對して、責任を負ふ事は怖しかつた。

「しかし、あれは幾らだらう？ 知らないの？」

彼はいらくした様子で尋ねたが、同時に此の際、幾らかの金を無條件で彼女にやつたとしたら、彼女はとうするだらうと考へて居た。その報酬として、彼は之までよりも優つた何かを期待出来るだらうか？ クライドは、これまで色々買物をさせられて、而かも接吻さへ録々させなかつた事を知つて居た。

彼は、彼女から甘く見縊つて居られるらしい事を考へて、内心の憤りを感じてゐた。が、しかし、彼女が今、その外套の爲にはどんな男にでも、どんな事でもさせると言つた事も思ひ起して居た。

「いゝえ」

ホルテンスは、本當の値段を言つたものか、それ共、それより少し高く言つたものかと、その時迷つてゐたのだつた。即時拂ひでないとすれば、もつと高くとられるかも知れないと思つたからである。而かも、高く言つては、クライドが買つて呉れさうになかつたからである。

「でも、幾ら高くても、百二十五弗より高くはないと思ふの。それ以上高かつたら、私もう買はないわよ」

クライドは安心の溜息をついた。どちらにしても、二百弗だの三百弗だのと言ふ金ではなかつたか

らである。彼は何とか交渉をして、五十弗とか六十弗とかの現金で済む事ならば、二三週間の中には出来さうに思へて来た。しかし一度に百二十五弗を拂はねばならないとなると、ホルテンスにも待つて貰はなければならぬし、彼も、その報酬について、はつきりした事を知らねばならないと思つた。

「そいつはいゝぢやないですか、ホルテンス」

クライドは自分に浮んだ考へを、まるで話もしないで叫んだ。「何故さうしないんです？ 最初に幾ら現金を拂つたらいいんだか、聞いて見たら好いぢやないですか。多分僕にも、何とか出来るだらうと思ふけれど」

「まあ、素敵な話ぢやないの」とホルテンスは手を叩いた。「では、あんたさうして呉れて？ 何て氣前がいゝんでせう？ さうすれば、もう賣つて呉れるにきまつてるわよ。私、上手に話し込んでやるから」

クライドが怖れてゐた通りに、此の外套を作つてやるのは彼であると言ふ事實を、ホルテンスは忘れつゝあるらしかつた。金を拂ふのは彼だと言ふ事實を無視さうであつた。

しかし、彼の氣むづかしさうな顔を見てとつたホルテンスは、「でも、本當にあんたはいゝ人ね。そ

んなにまで私にして呉れるんですもの。此の御恩は私決して忘れないわよ。だからまあ、今暫く見て頂戴。私、決してあんたを悲ませないから。只一寸だけ待つて、ね」

實際、今、ホルテンスは、クライドの賤しくない事を認めて、彼に酬いようと決心して居たのである。一二週間の後、その外套が手に入ると同時に、彼に親切にしてやらう。——ある事をしてやらうと考へて居たのだ。そして、その思ひを誇張して傳へる爲めに、彼女はうつとりとした眼付をさせて思はせ振りに彼に倚り掛つた。しかし、その思はせ振りな様子に接して、クライドは寧ろ尻込みをした。彼は多少驚かされると共に、彼女の生活力に壓倒される氣がしたのである。彼は多少臆病に尻込みをし乍ら、彼女の本當の愛情はどんなものだらうと疑つて居た。

しかし兎に角、その外套が百二十五弗以上でなくて、最初に先づ二十五弗を拂ひ、後から五十弗宛拂つていゝ事になれば、それを買つてやらうと約束した。彼女の方では、明日にもルーベンスタインの店に行つて、最初の二十五弗でその外套を渡して呉れる様に交渉しようと答へた。

料理屋を出ると、彼女は猫の様に咽喉を鳴らして、本當の有難さから、色々とクライドに囁いた。彼女は、此の事は決して忘れないとも言つたし、その外套が手に入つたら、それを着た最初の日に彼と會はうとも言つた。その日に若しクライドの勤めがなかつたら、一緒に晚餐を食へに行かう。さも

なくば、例の日曜の遠乗りの日までに間に合はせようとも言つた。

彼女の發議で、二人はやがてダンス・ホールに行つたが、そこでも彼女はびつたりと抱きついて、ひどく色ツほく踊り廻つた。その色ツほさに、クライドは多少わなないた程だつた。

とう／＼クライドは、その日の事を夢見乍ら、自分の家に歸つて行つた。最初の二十五弗なんぞ、わけなく拂へさうな事が、彼を満足させた。必要があれば、ヘツグランやラツタラアから二十五弗宛借りてもいゝのだと考へて居た。

が、それにしても、何と言ふ美しいホルテンスだらう！あの魅力！此の喜び！とう／＼彼女が彼のものになるのではないか。彼には只夢であつた。信じ得ないものゝ實現であつた。

十六

約束通りにホルテンスは、翌日ルーベンスタインの店へ行つて、あらゆる掛引を用ひて話込んで見た。即金でなく、百十五弗の金でその外套を買ひたいと言ふのであつたが、ルーベンスタインの頭は容易に縦には動かなかつた。此の店は月賦屋ではない。若し彼がさういふ方法で賣るのであつたら、二百弗の値をつけても飛ぶやうに賣れるであらう。

「だつて、外套を貰つて行く時に、五十弗だけは拂ふんぢやありませんか」とホルテンスは言つた。
「いや、それは解つてます。しかし残りの四十五弗は、どなたから何時戴けるんです？」
「來週二十五弗。其の次の週に二十五弗。そしてその次の週に十五弗拂ふのぢやありませんか」
「しかし、例へばあなたがこれをお持ちになつた翌日、自動車に引かれてお死になつたらどうなるんです。その時はどうして金を戴けるんです」

之は難問であつた。實際、彼女の支拂ひが確かだと言ふ事を證據立てるものは何もなかつた。それを證據立てようとすれば、多少責任の持てる人物、例へば銀行家か誰かの證明書が必要であつた。いや、此の店は月賦屋では無いのですからね——とルーベンスタインは言ふのだつた。此の店は現金屋である。だからこそ、百十五弗で賣るのであつて、それ以下では一弗だつてご免をかうむる。ルーベンスタインは溜息をつき乍ら、そんな風に話を進めた。とう／＼ホルテンスは、それでは最初に七十五弗渡して、一週間の中に後の四十弗を渡す事にしてはどうかとまで言ひ出した。

「しかし、その一週間が問題なのです。若しあなたが來週、いや明日でもよござんすが、七十五弗をお持ちになつて、次の週間、また四十弗をお持ちになつて下さるんでしたら、何だつてもう一週間待つて、百十五弗を揃へてお拂ひ下さらないんでせう。さうすれば何のいざ／＼もなく、あの外套はあな

たの物です。どうぞお持ちになつて下さい。如何でせう。明日にももう一度御出でになつて、二十五弗でも三十弗でもよござんすから、一つ手付けを打つて戴けませんでせうか。さうすれば、あの外套を飾り窓から引込めて、あなたの爲めに取つて置きます。その後で、來週でも來々週でもよござんすから、残りの金をお持ちになつて下さい、さうすれば品物を御渡しますから「ルーベンスタインは、酷く難しい事を話すやうな調子で説明して聞かした。

此の理窟はもつとも千萬であつた。ホルテンスには、もう議論の餘地がなかつた。あの外套を今直ぐ持つて行けないと思ふと、彼女ははかに悄けたが、店を出ると、彼女はまた別の元氣が出て來た。たとへ今直ぐではないにしても、クライドさへ約束を間違へなければ、あの外套が手に入るのだと思つたからである。何れにしても、目下の急務は、あの二十五弗か三十弗の金をクライドに出させる事であつた。しかし今になつて、あの外套に似合ふ帽子が欲しくなつた彼女は、百十五弗の代りに百二十五弗だつたと言はうと決心した。

此の話を聞いて、クライドは幾らか氣が休まつた様に思へた。此の週間の中に、三十五弗以上の金を作る事は、どう考へても無理なやうな氣がして居たのであつたが、その先の週になれば、いくらか樂になりさうに思へたからである。その頃になれば、彼のチップも二十弗や二十五弗にはなつて居る

管だつたし、それにラツタラアから二十か二十五弗か借りれば、二度目の支拂ひには充分であつた。そして、その次の週にはヘツグランドに頼んで、十弗か十五弗を借りられるし、それで足りなければ、彼の時計を十五弗の質に入れる事も出来ると思つたのであつた。その時計は三ヶ月前、五十弗で買ったのであるから、少く共、その位の質草にはなる筈であつた。

しかし彼の思ひはまた、あの不幸なエスタの上に落ちて行つた。彼は、母や姉達の經濟問題に捲き込まれる事を怖れては居たが、同時に、あの姉はどうなるんだらうと考へないでは居られなかつた。彼の父には、經濟的に母を助ける力はない。しかも問題が彼にかゝつて來たら、彼は何とすべきであらうか。何の必要があつて、父はあんな押賣りだの説教だをして廻るのだらう？ 何だつて、自分の親達は、あんな傳道なぞを止さないのだらう？

しかし、家庭の事情は、彼の手助けを必要とする事が、彼にも解つて來た。丁度クライドが、ホルテンスと約束をした週の終りの日であつたが、その時クライドは、次ぎの日曜日に彼女に渡す爲の五十弗の金をポケットに持つて居た。

「クライド、一寸御前に話したい事があるんだが」
彼が勤めに出ようとして居ると、母が彼の部屋に來て言つた。彼女に何か心配事がある事は、既に

數日前から解つて居たが、かうして借金までしてホルテンスに貢いで居る今の彼には、何と頼まれても金は出せないと思つて居た。若し出せば、ホルテンスを失はねばならないが、そんな事はとても出來ない。

だが、此の際、母からまたせびられるとすれば、何と言つて言ひ抜けをしたものだらう。二月前に、一週五弗宛余計に拂ふ事を約束させられて、それを果して仕まつた彼は、彼の財布にそれだけの余裕がある事を見せたと同じ事だ。だが、どれ程母に盡したいにしても、今度だけは出來ない。

彼が部屋から出て行くと、母は直ぐに、何時もの様に、彼を集會所のベンチに連れて行つた。
「こんな事をお前に話したくはなかつただけけれど、お前の外に頼りになる者がゐないから話すのだけれど、しかし、こんな事は誰にも言はないで居てお呉れ。フランクにもジュリアにもお父さんにも、私は知らせたくないんだから。實はエスタが、此のキャンサス市へ歸つて來て居るんだよ。

それについて、色々とは困つて居るのだが、私にはお金はないし、と言つて、お父さんにはちつともお願ひするわけに行かないので、本當にどうしたらいいかと思つてるんだがねえ」

母親が大きな手を窓に當てた様子で、クライドには何を言ふつもりか解つた氣がした。彼は、エスタが此の街に歸つて來て居る事などは知らないふりをしようかと、餘程思つただけけれど、さうも出

來なかつた。

「え、僕それを知ってます」

「知つてるつて？」母が驚いて聞いた。

「え、知つてます。僕は或る朝、お母さんがビュードリイ街の其の家にお這入りになるのを見てたんです。そして其の後で、エスタが窓側へ出て來たのを見たものですから、僕も直ぐ這入つて行つたんです」

「それは何時の事だい？」

「五六週間も経ちましたかね。それから、二度計り會ひに行つたのですけど、エスタが黙つて居れと言ふから黙つて居たんです」

「チエツ、チエツ、チエツ」グリフィス夫人は舌を鳴らしてから、「では、お前には皆な解つてゐるんだね」

「え、」

「まア、さうかい。で、フランクやジュリアには、何も言ひはしないだらうね」

「いゝえ」

「さう。言はないでお呉れ。あの子達の爲めにならない事だからね。だが、本當に困つた事になつたものだねえ」

母は口をひき歪めてさう言つたが、クライドは只ホルテンスの事を考へて居た。

「みんなあの娘が、自分で仕出かした事なのだけど、と言つて打つちやつて置く譯にも行かないしさ。でも、それも神意だよ。神様が試みをお與へなさるんだよ。『それ罪人の道は……』」

彼女は言ひかけて頭を振り乍ら兩手を握りしめた。クライドは彼女の様子を見乍ら、どんな事が起つて居るのだらうと考へた。

母親は、自分の變な立場を考へて、不快な氣持になつて居た。彼女は、世俗の人と同じやうに、嘘をついて來てゐるのである。而かもクライドは今、彼女の嘘をみんな見抜いて了つて居る。しかし、それと言ふのも皆な、クライドの爲めを思へばこそではなかつたらうか？ しかし、もうクライドも色々な事が解る年頃になつて居る。もうクライドにすつかり話して、手助けをして貰はねばならない。「エスタの身體工合が今大變悪くなつて居るんだよ」突然母親は、クライドの顔を見ないやうにし乍ら、しかし出来るだけ卒直に話して了はふと思ひ乍ら、そつけない調子で話し出した。「それでもう早速醫者に見せなくてはならないし、私の代りに看護して呉れる人を頼まねばならないのだが、それに

はどうしても五十弗計りいるんだよ。無論お前にはその金は出来ないだらうが、誰かお前の友達か何かで貸して呉れる人はないだらうかねえ。お前だつて、その位のお金なら直ぐに返せるだらう。それが返せるまで、私の方に現金を入れて貰はなくてもいいのだが」

彼女が一心に心配さうにクライドを見詰めて居る顔を見ると、クライドも其の力に打負かされた。彼は何か言はうとしたが、母がまた言つた「いつかお前が作つて呉れた金、あの御金はねえ……」と言ひかけて、好い言葉が見つからない様子で一歩躊躇つたが「亭主にピツツバーグで逃げられた後、此の街へ呼び戻す爲めに要つたお金のだよ。お前ももうエスタから聞いてるだらうけれど」

「え、聞きました」とクライドも憂鬱な悲しい氣持で答へた。成程、エスタの今の様子では、多少考へて見なければならぬと思つたからだ。「さうですね」彼は自分のポケットにある五十弗やその使ひ道を考へ乍ら言つた。「それだけの金が出るかどうか、一寸僕にも解らないのです。他の連中だつて、みんな僕と同じ給金しか取つて居ないのですからね、そんな金を持つてゐるかどうか、よく解らないのです。多少借りられるかも知れませんが、随分體裁の悪い話ですし」

言ひ乍ら彼は息詰つた。自分の母にこんな嘘を吐く事は容易い事ではなかつたからである。實際、彼は今日まで、こんな淺ましい嘘をついた事はなかつた。彼は今現に、五十弗の金を持つて居るでは

ないか。しかも一方には、ホルテンスの問題があり、他方には母や姉の問題がある。その金は、ホルテンスの問題を解決し得る様に、母達の問題をも解決し得るのだ。それなのに、母を助けられないなんて、何と言ふ怖ろしい事だらう。實際、どうして斷り得るだらう。彼はいらくくと唇をなめずつて、額に手を當てた。冷汗がしみ出しているからである。彼は何だか堪らない氣がして來た。

「それで、お前は今いくらでも現金をお持ちだらうか？」

母はいくらか喜んで言つた。彼女には今、即坐に金が欲しい様な事がいくつもあつたからである。「いえ、ちつとも無いんですが」彼は恥かしさうな顔をして、母の顔を見詰めた。その時若し母親が、

うつかりして居なければ、彼の言つてる事が嘘だと言ふ事を知つた筈である。實際、その時の彼の心中には、自己憐憫と自己嫌惡との感情がこんがらがつて居たが、と言つて、ホルテンスを斷念する氣にもなれなかつた。斷じてそれは出来ないと思つて居た。而かも母は、こんなに淋しさうに、こんなに頼りなさうにして居るではないか。これは恥ず可き事だ。自分は、こんなにも賤しい男なのか。その中にばちが當るのではないだらうか。

クライドはまた何か別な方法で、その金を得られないものかと考へて見た。だが、それにしても、もう一二週間の必要があつた。ホルテンスの問題がもう少し先であつたのだつたらと彼は思つた。

「しかし、五弗位だつたら今有るのですが、それでは何の役にも立ちませんか」

「いや、それでも結構だよ。買ひたいものは幾らでもあるのだからね」

「ではまア、それだけ取つて置いて下さい」

彼は來週になれば又何か旨い事があるかも知れないと思つて言つた。「來週になれば、多分十弗位は差上げられるでせう。無論、確かな事は言へないんですが、場合に依つては、誰かから借りてもいいです。まア、何とか考へて見ませう」

母親は、息子が漸く仕事を見付けた許りの時に、こんななまでに息子に頼らねばならない事を考へて、深い溜息をついた。これから何年か経つた後に、息子はそれを何と考へるだらう？ 母やエスタや家族たちの事を何と思ふだらう？ 随分しつかりした子供の様には見えても、どちらかと言へば父親に似た子供の様に思へたからだつた。實際彼は、何事にも直ぐに興奮をして、後先を考へないやうな處があつた。而かも母親は、エスタや亭主の不幸な一生を考へて、クライドにもその心配を向けて居るのであつた。

「いや、出来ない時は出来ない時で、また何とか考へるから」

彼女はさう言つたが、しかし別に見當がついて居るわけではなかつた。

十七

ヘッグランドの言ひ出した、例の自動車遠乗りの件は、その後幾らか計畫が變つて來た。そのバツカードは今度の日曜には使へない事になつたので、木曜か金曜日にしなければならぬ事になつた。既にみんなに説明してあつた様に、その車はキンバークと言ふ或る金持の老人の持物で、その老人は今アジアの方に旅行して居るのであつた。その車を持出すヘッグランドの友達と言ふ男は、キンバークの運轉手だと言ふ事になつてゐたが、實はキンバークの農園の管理人スパーサーと言ふ男の道樂息子であつたのである。此の息子が、自分を管理人の息子以上に見せようとして、こつそりとその車を持出さうと言ふのであつた。

此の遠乗りを最初に言ひ出したのはヘッグランドであつたが、皆な誘ひをかけて了つた後になつて、キンバーク氏が最近に歸つて來るかも知れないと言ふ知らせがやつて來た。そこで例のスパーサーは、此の計畫を直ぐ止す氣になつたのであつたが、此の遊樂を楽しみにして居るヘッグランドは、しきりにスパーサーをそゝのかして、次の金曜日の正午から六時まで遠乗りをしようと言ふ事に決心させたのであつた。無論ホルテンスも、自分の計畫を變へて、クライドと同行する事に決心した。

無論彼等は、所有者の承諾を得て此の自動車を使ふのでなかつたから、人目につき易い所から乗出す譯には行かなかつた。男達は先づ十七番街の静かな通りで自動車に乘込んで、それから十二街の邊で待つて居る娘達を乗込ませようと言ふことになつた。そして、公園通りから、北カンサス市通りを通つて、モウズビーからエクセルシャーへ行かう。エクセルシャーから一二哩手前にウイグワムと言ふ小さい旅館があるから其處に行かう。それは、食堂とダンス場とホテルとを兼ねたやうな家であつて、ピクトロラと自動ピアノが置いてある。ヘッグランドやヒグビーの話に依ると、それはひどく粹な場所であつて、食物も旨いし、往復の道路も素晴らしいと言ふのであつた。その宿屋の下には小さい川があつて、夏には船遊びだの魚釣りが出来るし、冬にはスケートが出来る。無論今は一月であるから、道はすつかり氷つて居るし、景色もいゝに違ひない。その近くには湖水が一つあつて、今頃はすつかり氷が張つて居る筈だから、其處へ行つてスケートをして面白。

「どうだい、こんな時にスケートをしようなんて奴が居るぜ」

ラッタラアが寧ろ皮肉な調子で言つた。彼の考へに依ると、こんな旅行では、只色事にだけ没頭すべきで、個人的な運動などはすべきでなかつたからである。

「ふん、いや、いゝ思ひ付きと言ふものは、兎角馬鹿にされ易いものだよ」とヘッグランドも言ひ

返した。だが、此の遠乗りについて、多少でも氣がとがめて居るものがあつたとすれば、それはスパ―サーを除いてはクライドだけであつた。此の車がスパ―サーの物でなくて、彼の雇主の物だと言ふ事は、始めから彼を脅して、不安にさせて居たからである。たとへ少しの間にもせよ、他人の物を黙つて使ふと言ふ事は、彼には苦しかつたのだ。そんな事をすれば屹度何か起つて来る。屹度見つかるに違ひない。

「そいつは君、危険ぢやないかい？」

二三日前、此の旅行の話が聞かされて、其の車の出所が解つた時、彼はラッタラアに尋ねたのであつた。

「そんな事は問題でないさ」と、こんな事には馴れきつて、何とも思つて居ないラッタラアは答へた。「僕達が車を引張り出す譯ぢやないぢやないか。引張り出すのは彼奴なんだから、問題はあの男にあるのさ。あ奴が行かうと言ふから僕が行くんぢやないか。僕としては、只時間に間に合ふやうに連れて歸つて貰へればいゝんだよ。僕の心配してるのは、只それだけさ」

丁度そこへヒッグビーもやつて来たが、彼も同じやうな事を言つた。しかし、クライドの心配は消えなかつた。こいつは餘りいゝ事ではない。こんな事で職を失ふのかも知れない。しかし、そんな立

派な自動車で、ホルテンスや他の娘や、友達達と一緒に遠乗りが出来ると考へると、もう此の誘惑に抵抗する事が出来なかつた。

金曜日の正午が来ると、此の連中はそれ／＼豫定の場所で待合はせて居た。ヘツグランド、ラッタラア、ヒツグビー、クライドの四人は、例の十七街とウエストブロスベクトとの角で、待合せて居たし、ヘツグランドの相手のマイダ・アレキサンダーや、ラッタラアの友達のルシル・ニコラスや、ヒツグビーの友達のチナ・コーゲルや、彼女がスバーサーの爲に連れて来たローラ・サイブ達は、十二街とワシントン通りの角に待合はせて居た。唯ホルテンスだけは、自分の家に寄らねばならない用事があるので、其處で待合はせる事にして、此處には来なかつた。

一月も終りに近いその日は、薄雲が低く垂れて、雪でも降つて来さうな空模様であつたが、みんなは却つて其れを喜んだ。雪模様を自動車の中から眺めると言ふ事が、皆なをひどく嬉しがらせたのであつた。

「ほんとに降つて来るといゝわね」チナ・コーゲルが言ふと、ルシル・ニコラスも「ほんとに雪景色つて、いゝ物だわよ」と、同じた。

彼等は、街の中を抜けるとハンニバル橋をハーレルの方に渡つて、小山にかこまれた蕭條たる川添

ひ路を、ランドルフ高原の方に進んで行つた。やがてモースビーヤリパーティの町々を過ぎたが、その邊りの平坦な道からは、小さい農園だの、雪を被つた山々だの、美しい眺めが展開された。

カンサスの町中や、一寸した郊外しか知らないクライドは、かうして自動車に乗つて居る事が何處か長旅にでも出るやうな気がして、すっかり嬉しくなつて居た。それは彼の日常生活とは丸でかけ離れた出来事であつた。しかもホルテンスは、非常に愛想よく親切で、絶えず彼の傍に寄り添つて居た。見ると他の連中も、それ／＼娘達を引つけて、嬉しさうに抱き合つて居るので、彼も彼女に腕を廻したが、彼女もちつとも拒まなかつた計りでなく、彼の顔を見上げて、「私、帽子をとちやつた方がいゝわねえ」と言つたりした。他の連中は笑ひ出した。彼女のぶつきら棒な様子が、時々みんなを笑はせるのである。帽子をとつて見ると、彼女は見馴れない髪に結つて居たが、それが彼女を素晴らしく美しく見せた。彼女はそれを見せたかつたのである。

「今日、何處か踊れる所があつて？」彼女は誰にもなく言つた。

「解りきつてらあね」チナ・コーゲルに帽子をぬがせて、じつと抱きしめてゐたヒツグビーが言つた。

「向ふには自動ピアノや、ビクトロラがあるんだもの。僕もコルネットを持つて来るんだつたな。僕、デイクシイが吹けるんだよ」

車は操縦自慢のスパークの腕前で、雪の中の道を、首が飛ぶ様な速さで走つて居た。綾目をなした森影が、右にも左にも飛んで行つた。平野や丘は波のやうにうねつて居た。大きく手を擴けた案山子が、腐つた帽子をいたゞき乍ら、直ぐ近くに、風の中にはためいて居た。と、その側から、鳥の一群が舞ひ上つて、雪の中に描き出された遠くの森の方に飛んで行つた。

運轉臺にはスパークが、ローラ・サイプと並んで座つて、こんな事は馴れきつた仕事だと言はな計りに、操縦をして居た。彼は本當はホルテンスに心を惹かれて居たのだつたが、此の場合の義務として、ローラの腰に片手を廻し、別の片手で運轉をして居た。その様子がクライドには酷く危つかしく見えた。あんな事をして、こんなに走らせていゝのだらうかと思つたりした。ホルテンスは、スパークが自分に興味を感じて居るらしい事に氣附いて居たが、彼がローラ・サイプにお愛想を見せ居る事にも興味を持つた。スパークがローラを引寄せて、之まで度々自動車に乗つた事があるか等と聞いて居るのを見ると、彼女は密かに心の中で笑ひ出して居た。

ラッタラも運轉臺の様子に眼を止めて、肘でルシル・ニコラスに知らせた。と、ルシルがまたヒツグビーに知らせて、二人の様子を見守らせる。

「前の方では、大分お楽しみの様ですな」ラッタラが交際を求めるやうに言ひ掛けた。

「勿論」向ふを向いたまゝでスパークが機嫌よく答へた。「如何です。お嬢さん」

「結構ですわ」とローラ・サイプが答へた。

しかし、クライドはこれ程の娘たちの中で、ホルテンス程美しい娘は實際に居ないことを考へて居た。その日彼女は、赤と黒との着物を着て、眞赤な帽子と釣合はせて居たし、左の頬には活動女優でも眞似たらしく、黒い愛嬌黒子を書入れて居た。事實、その日、他の連中を壓倒する程美しく見せようとしてきた彼女は、今其の成功を見て、すつかり満足して居るのだつた。無論、クライドも同じ氣持だつた。

「今日の綺麗さは、あなたが一番ですよ」クライドは嬉しさうに抱きよせて囁いた。

「では、およろしかつたら、蜜でも掛けて召し上げ」

彼女が大きい聲で言つたので、皆なが笑ひ出した。クライドは少し顔を赤らめた。

ミナビルから六哩計り行くと、彼等は或る盆地の曲り角に來たが、其處に一軒の田舎店があつたので、ヘッグランド達は降りて行つて、菓子、煙草、アイスクリーム、ジンジャー・エールの類を買つた。やがて、リパティを過ぎて暫く行くと、ウイグワム旅館が見えて來た。それは或る丘の前に建てられた、古い二階造りの百姓家に過ぎなかつたが、それに續いて、一軒の新しい平家があつた。そ